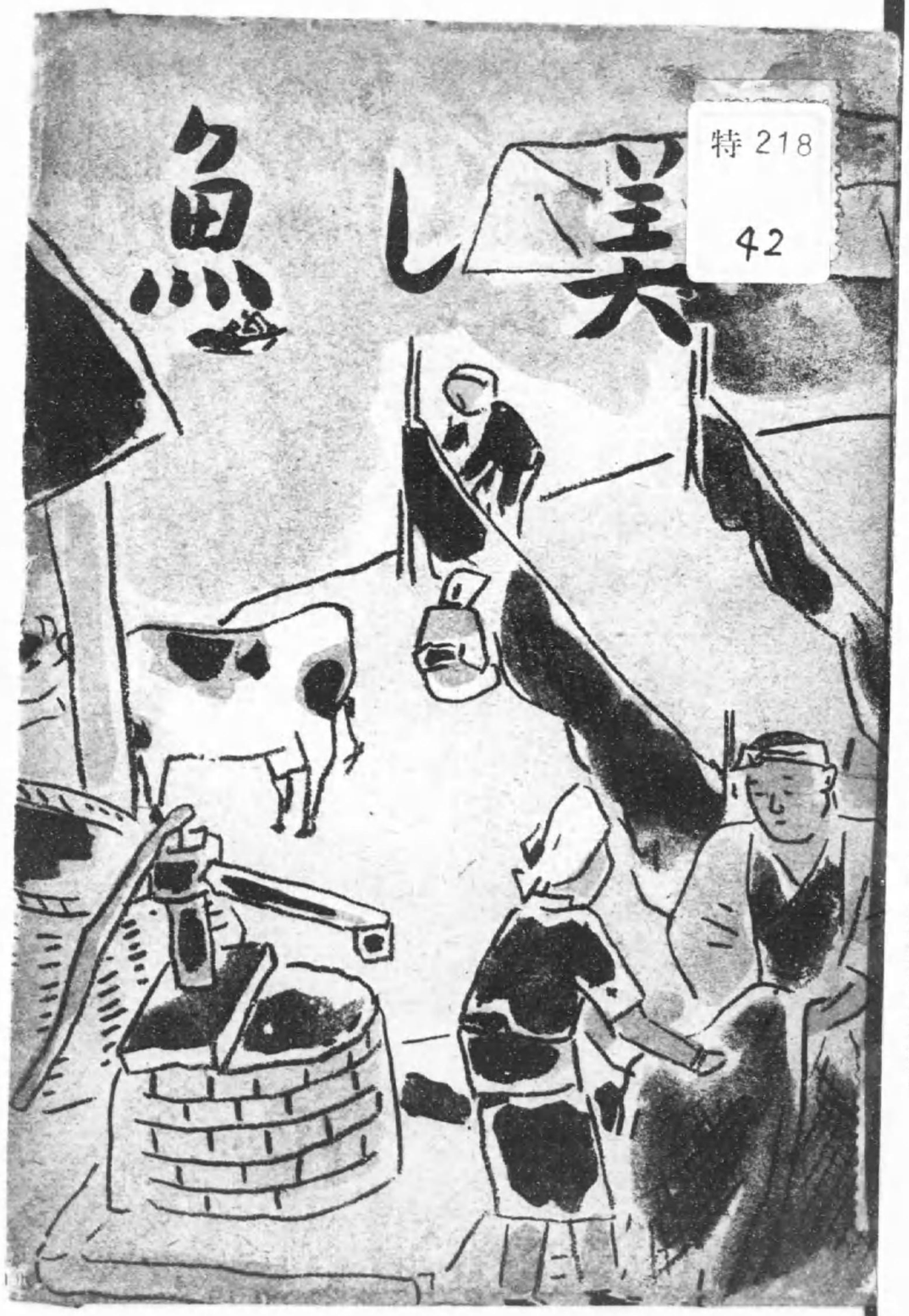


特 218
42

始

特218
42

生產小說集

魚し美

橋爪健著

東京 紙硯社 發行

目次

美し魚……三
鰯（いわし）……六三
鰹漁夫……一〇九
海の倫理……一四五
望郷……一八一

裝幀　清原　齊

美し

魚

遠つ代ゆこの黒潮ぞ美し魚
美し國たみはぐくみ流る

一

なぐりつけるやうな強い西風が、絶えず遠州灘の方から吹きよせてゐた。

熊野灘あたりから凡そ百數十浬、そのあひだ何のさへぎるものもない海原だけを勝手氣儘に吹きまくつてきたその風は、こゝへ來て初めて手ごはい相手にぶつかり、むかつ腹をたてたやうに波に白牙をむかせ、凄まじいおらび聲をあげて、依估地に突つかゝつてくるのだつた。

古劍の切尖に似て南から北へするどく太平洋に斗出したこの岬は、幅わづか二百メートル、高さ三四十メートルほどの細長い胴體の背で、この風と波とを見事に撥ねかへしてゐた。いや、西風ばかりではない。時季によつて東側の駿河灣方面から吹きつける強烈な北東風をも、寒々とむきだしの懐ろでまともに受けとめてゐた。

だが、長い年代にわたる風波との惡戰苦鬪のおもかげは、海岸線から急傾斜でせり上つたその臺地の横つ腹に、まざまざと殘されてゐた。ある所は風洞のやうにポツカリと抉りとられてゐるかと思ふと、ある所は白蟻にやられたやうにジリ〳〵と蝕ばまれ、その傾斜面に生えてゐる灌木といふ灌木は、どれもこれもひねこびれ、匐ひつくばり、幹も葉も白茶けて臺地にしがみついてゐた。O村の人々は、何百年來、かうした岬の突つ鼻にこびりついて生き拔かねばならぬ運命におかれてゐたのである。

こんなにせゝこましい、川一つない砂原の臺地に、米のできる筈はなかつた。わづかに難破船によつて薩摩からもたらされた甘藷と麥類が作られてゐたが、それとても一戸あたり二反餘の耕地面積では、三百餘戸の村民の生業とはなりえなかつた。さりとてこの荒濱では、三方に海をひかへながら、沿岸漁業の發展もたうてい望まれなかつた。風浪の害に加へて、旱魃、飢饉の厄は應仁の亂の落武者が先祖といはれるこの村の人々を、長いあひだこつぴどくいためつけてきたのである。

だが、人間はつひに灌木ではなかつた。冷酷な自然の脅威が加はれば加はるほど、人間は逞ま

しく鍛へあげられ、執念に伸上つてゆく。いつの頃からか村びとたちは、わが地先の海面に見切りをつけて遠洋へのりだし、鰹や鮪などを釣ることをおぼえた。遠洋といつても、當時は櫓漕ぎ帆走の和船だつたから、沖の瀬、錢洲、伊豆近海から遠くて三宅島あたりがせいぜいだつた。それでも難航するものが多く、後から後から犠牲者が續出したが、これよりほかに生きる道のない村の男たちは、父祖の屍をふみこえふみこえ、まつしぐらに海へ乘出していつた。

あとに殘つてゐるものは女子供ばかりだつた。彼女らは家を守り、野良を耕し、船が歸つてくると、朝でも夜中でもその魚を笊にかついで相良の魚市場まで三里の道を駈けどほしに飛んだ。

明治の中ごろ漁船に發動機が取付けられ、やがて無線電信電話が設けられるやうになつて、この村の遠洋漁業も急激に發展し、沿岸漁業の十數倍の生産をあげるやうになつたが、しかもこの男女の働きぶりは少しも變らなかつた。屈强の漁夫たちは一年のうちわづか二ケ月ぐらゐしか村にゐない。あとは小笠原、三陸沖から內南洋、外南洋と、一年中魚を追つて太平洋をかけずり廻つてゐた。母港へ歸つても波が荒くて碇泊できないため、船はみな駿河灣の奥のS港へ持つてゆく。漁夫はそこから鐵道やバスで村へ歸るが、二日とおちついてゐない。二日以上村にゐるのは

男の恥とされてゐた。だから留守のことは女が全部やらねばならぬ。村の消防まで女が引受けてゐた。

かうして村は次第に太つてきた。女たちは傾斜地のだん〳〵畑に甘藷と麥を交互に作り、芋は大部分切干にされて女房たちの財布をふくらませた。かつては呪ひの風だつた西風も、今では切干を程よく乾燥させる惠みの風ともなつた。

そこへドカツと來たのが支那事變——大東亞戰爭である。資材の不足、特に燃料の配給減と大型船の徵用は、全國の遠洋漁業を徹底的にうちのめしたが、O村もその例にもれるわけにいかなかつた。

わづか××隻ながら、毎年百萬圓もの漁獲高をあげてゐた鰹鮪船を、ほとんど全部國家にさゝげてしまつた漁夫たちは、召集か徵用に召される以外、ある者はやむなく近くのF町の小工場やS市の道路工事にやとはれていつた。どうしても海を離れたがらない者たちは、小さな船を仕立てゝ鹿兒島縣山川港へ乘出し、そこを根城にして鯖釣りを始めた。畑や磯に働いてゐるのは相變らず女ばかりで、若い男の姿などほとんど見かけなかつた。「男のゐない村」は、こんな大變動

があつても、やつぱり同じ「男のゐない村」だつたのである。

ところが、大東亞戰爭も三年目になつて、ソロモン方面の敵反攻が次第にはげしくなりだした今日このごろ、燈臺のある上峠に近い西山のだん〳〵畑に、四五日前からヒョツコリ一人の若い男があらはれて、漸く二三寸にのびそろつた麥畑でさくをきりだした。意外にもそれは、通稱「ペンちやん」と云はれる海形丸の若い衆、澤田太吉だつた。

二

けふも太吉は、凸凹の多いイガグリ頭に漁師獨特のネヂ鉢卷をのつけて、早春の西日をあびながら鍬をふるつてゐた。

猪首で足が短く、丈よりも横幅が長いくらゐヅングリの上に、あまりやりつけない仕事と見えていかにもギゴチないその恰好は、遠くから見るとまるで鍬につかまつて踊りでも踊つてゐるやうだつた。おまけに、ひと畝うつては伸び上つて海の上を眺め、はつと氣をとりなほしたやうにしばらく鍬を動かしてゐるかと思ふと、いつのまにかまた腰をのばして沖に目を投げる。そんなことを七八回もくり返してゐるうちに、たうとう我慢しきれなくなつたやうに鍬も何もはふりだして、磯松の根方にドツカリ腰をおろすと、腹がけから切干を出してボリ〳〵かじりながら、今度はおほつぴらに海と向ひあつた。

「ち、ちきしやう、羨ましがらせやがるのう……」

吐きだすやうに口では言つたが、象の眼のやうに小さな三角眼は、見えなくなるほど細まつて、いかにも好人物らしく笑つてゐた。尤も彼の顏は、しよつちゆう鼻の兩脇に笑皺をたゝへて、いつ見てもニヤ〳〵笑つてゐるやうに見えるのだが……。

一浬ほど沖には、俗に輕便とかモーターとか呼ばれる鰆船が三ばい、うねりに乘つてのんびりと浮んでゐた。舳の兩舷に長い竿を二本、艫の方に短いのを二本、舵のところには綱だけ二本、都合六本の曳綱を流してゐる恰好は、ちやうど水すましそつくりだつた。すばらしく目のきく太吉にはそこに乘つてゐる三四人の漁師が煙草をふかしてゐるのさへ見える。彼は自分も波のうねりに乘つてゐるやうに、不恰好な體を前後左右に搖ぶりながら、うつとりしたやうに眺めてゐた。

一日かゝつてやつと五六本かせいぐ七八本しか釣れぬこんな悠長な鰆釣りなど、彼としてべ

つに羨ましいわけではない。これに轉業しろと云はれゝば尻込みするかも知れぬ。たゞあゝやつて毎日自分の船に乘つて仕事ができるといふことだけが、たまらなく羨ましいのだ。

十五のとき、鰹船に乘つて沖へ乘出してから十二年間、ほとんど一年中鰹や鮪を釣り暮した彼――それだけなら別に珍らしいことではないが、まだ若衆の身で彼ほど骨の髓から漁が好き、魚が好きといふ男は珍らしかつた。漁の權化、魚の化身――そんな言葉がふさはしいほど、彼は魚を愛し魚そのものになり切つてゐた。今まで何萬匹、何十萬匹釣つたか知れないが、彼はその一匹々々に深い愛情をこめて、人知れず引導を渡してゐたのである。

（えゝか、かんねんせいよ。うめえ刺身か良え節になつて、人間樣を肥やすんだぞ）

言葉にこそ出さないが、一匹釣るたびにさう云つた氣持でチラと獲物を眺めやる。時には、兩腕で抱きしめたり、輕く頭を叩いてやつたりする。この奇妙な癖は、十八九ごろから始まつたらしいが、そのために飛んでもない大失策をしでかしてしまつたのだ。

まだ檢査前、鮪延縄で南鳥島方面へ行つたとき、甲板に釣り上げた一間半もある大鮫に例の引導をわたすつもりで、右手を鮫の頭へ持つていかうとしたとたん、死んだふりをしてゐたその鮫

がとつぜん鎌首をもたげて、ガブリと嚙みついたのである。一度悲鳴をあげたが、それでも彼はニヤ〳〵泣笑ひをしながら、じつとその鮫を眺めてゐた。年寄衆がとんできて、鮫の急所である尻尾の端を嚙みしぼつてくれたので、普通なら容易にとれぬ鋭どい鮫の齒も、すぐ離れたが、おかげで右手の人さし指は第二關節から、中指は第三關節から、ブラ〳〵に腐つて取れてしまつたのである。

そのため遂に徴兵檢査には不合格となり、竿をつかふ鰹釣りには致命的な傷手を蒙つたが、それでも彼の魚を愛する氣持は弱まるどころか、ます〳〵激しくなつていつた。

それほどの彼が、こゝもう半年あまりも漁に出られないのだ。昭和八年建造以來ずつと乘組んでゐた前の海形丸が去年の夏徴用になつてから、（その時も彼は船と一緒に徴用されたいと願つたが、許されなかつた）糸の切れた凧のやうに、しばらく家でブラ〳〵してゐた彼は、やがて京都で小さな纖維工業所をやつてゐる親戚から無人故ぜひにとたのまれ、四ケ月あまり綱作りの手傳ひに行つてゐたが、海から遠い都會の生活にはどうにもやりきれなくなつて、五六日前逃げるやうに歸つてきたのである。一つには、去年の秋以來三重縣大湊の〇〇造船所で建造中の代船が

竣工したとかしないとかいふ噂を聞きつけて、矢も楯もたまらなくなつて飛び歸つたのだつた。

さつそく親方（船主）の家へ挨拶に行つてみると、主人の大濱源右衞門はちやうど大湊の造船所へ行つてゐて留守だつたが、細君の話によると、竣工の噂は眞實でも、竣工と同時に新船も○○徵用になるらしいから出漁は當分望み薄とのことで、さすがメーボーの太吉もすつかりしよげかへつてゐるところだつた。

ちやうど母親のシマが風邪をひいて寢こんだので、代りにかうやつて畑へ出てはきたが、鈎竿と鍬とでは大ちがひだし、第一、永年大洋の上でばかり働いてゐたので、こんなに足もとがドツシリと小ゆるぎもしない地面の上では、なんとなく調子があはず、働く氣合が全然入らないのだ。

「あゝあ、せ、戰爭にや行けねえ、漁にも出られねえ、おら、いつてえ、ど、どうすりやえゝだか……」

風と話でもするやうに、持前の吃り聲でさう呟くと、あとは彼の癖で、口のなかで何やらブツブツ獨り言をいひながらなほも厭かずうつそりと沖を眺めてゐた。

このあたりの海は、黑潮がすぐ近くまで來てゐるため、目にしみるばかり冴えた濃藍色に輝い

てゐた。そこから吹いてくる風には、しよつからいやうな、甘ずつぱいやうな、なんともいへぬ黑潮の匂ひと溫みが、むせかへるばかり溶けこんでゐた。その嗅ぎなれたなつかしい匂ひを、太吉は平べたく畏こまつた小鼻をクンクン鳴らして嗅ぎ、はては涙が出るほど大口あいて、胸いつぱい吸ひこんだ。

そのとき彼は、ふと、つい先だつてまでゐた京都の生活を思ひだした。——月に二三度、魚屋の前には長い列がつながつた。そして久しぶりに一人ひときれの魚が手にはいると、家のなかが急に明るくいきいきとしてくる。それほど世間には魚がないのだ。それを知つて、彼はしんそこからおどろいた。地團駄ふむ思ひだつた。しかも、彼が漁師であることを知つて、近所のおかみさん連がかげ口をたゝいた。あんなうすのろみたいな人にや、はしつこい魚なんかとれやしまい。おまけに漁師のくせにこんな町なかへ來てボヤボヤしてるから、私らも魚が食へないんだ……。それを聞いたときには、さすがの彼もニヤニヤ笑ひを消して、齒をくひしばつた。十五歳のとき父親が海で死んだ時以來、たえて見せたことのない涙をボロボロ流して無念がつた。そのときの悲しさが、今ふと思ひ出されたのである。

——指が無えばつかりに兵隊にもなれねえ、工場へ行つたつてロクな働きもできねえ。おらみてえなうすめろは、もうなんにもお國のお役にたてねえごくつぶしか……なーにくそ、そんなことがあるもんか、おらだつて、おらだつて、きつとお國の役にたつてみせるぞ。船せアありやあ、いくらでも奴らに魚を食はしてやるぞ。さうだ、船せアありやあ、船せアありやあなあ……。

彼は、大聲あげて泣き叫びたい氣持で、泥だらけの拳をグツとにぎりしめてゐた。

三

「ベンちやん、何してるだ、そんなところで……」

とつぜん、癇だかい女の聲に呼びかけられ、太吉はぜんまい仕掛の玩具みたいにとび上つた。あわてゝそばの鍬へ手をやつたが、すぐにはふり返らうともしなかつた。聲だけでヒサエといふことがすぐ分つたからだ。とたんに、からだぢゆうがカーツとほてつてきた。

「ベンちやんてば、何ボヤ〳〵してるの……さつき海形の船頭さんがお前をさがしてたよ、船が出來あがつて漁へ出るつていふんに……」

二度目の聲に、太吉は又しても跳びあがつた。こんどはまともにヒサエの方を向きなほつて、ドス赤くてれた顔をクシヤ〳〵にほころばせながら何か喚いた。

えつ、りよ、りよ、りよう……といふふうにそれを聞いたヒサエは、思はず、貝殼のやうな美しい齒なみを見せて、プツとふきだした。相變らずのベンちやんだといふ、さげすみと親しみの同時にこもつた笑ひだつた。

上下そろひの紺がすりのモンペに黒の手甲脚絆、色白の胸もとにチラと赤い襟をのぞかせ、白の手拭を姐様かぶりにしてもつこをかついだその姿は、折からの夕陽をまともに受け、開濶な大空を背景にして、ほんとに繪からぬけだしたやうに綺麗だつた。太吉はまぶしげに目をしばしばさせながら、もう一度うなつた。

「え、ヒサちやん……りよ、りよ、漁に出るつて、それ、ほ、ほんとかね」

「うそだと思ふんなら聞いといでよ、船頭さん自轉車に乘つて、大さわぎで海形の衆にふれ歩いてた」

「おつ、さうか、そ、そりや有難え」

太吉はもう、心がデングリ返つてゐた。日ごろ人知れず思ひをこがしてゐるヒサエが突然あらはれて、誰もゐない畑のまんなかで差向ひに口をきくといふことだけでも大事件なのに、その有頂天をさへ吹きとばすほどの大吉報が同時に舞ひこんだのだから、神經の鈍重な彼には、それは一度に背負ひきれないほどの劇しい感動だつた。彼はもう全く上の空で、そこらにちらばつた鍬や辨當箱代りの茶鉢などをかきあつめると、ころがるやうに畑から飛びだして行つた。

「ホホホ、ベンちやんたら……なにもそんなに慌てなくたつてえゝぢやん。わしもそつちへ歸るで待つとくれな」

あとから甘つたるい聲が追ひかけてきた。

太吉の足は、しばりでもかけられたやうに立ちすくんだ。

右むけといへば右、左むけといへば左、なんでも人のいひなりしだいになるのが、ちやうど船のベンチレーター（通風筒）みたいだつたし、またその猪首の恰好が煙管のがん首に似たベンチレーターそつくりなため、仲間から「ベンチ」といふ綽名で呼ばれてゐる彼は、今もその本領を發揮して、ピタリと足をとめたのだつた。まして相手がヒサエと來ては、どうにもならなかつた。

しかも、ふり返つて話しかける勇氣などあるわけはなく、まるで國民學校の生徒が先生に足ぶみの號令をかけられたやうに、シヤンと前を見たまゝ足ずりしながら、背後にヒサエが近づくけはひを待つて、そろ〳〵歩きだした。

「相變らずねえ、ベンちやんは……。しばらく見えなかつたけんが、どけ行つてたの」

ヒサエは、自分よりやゝ低目の太吉のうしろ姿を見おろすやうに眺めた。

「うゝんね、ちよつくら、きよ、京都へ行つてきただ」

「京都？　まあ、えゝとけへ行つたの。何しにさ」

「し、し、親戚んちの工場への、な、縄作りの手傳に……」

「へー……京都はえゝらねえ、舞妓さんての見た？」

「ハハハ、そ、そんなの、し、知んねアよ」

たてつゞけにいろ〳〵のことを聞かれるので、すつかりドギマギして、もと〳〵口下手の彼はもう舌もよく廻らなかつた。それに後から溫かい湯でも浴せかけられるやうで、背中がむづ〳〵とかゆかつた。できることなら一つ飛びにこの場から逃げ去りたかつた。

戀といつても、これほどみじめな戀は少いであらう。いやみじめが過ぎて、かへつて幸福なのかも知れぬ。もともと彼は自分でこれが戀だとハツキリ自覺してゐるわけではなかつた。

船主はちがふが、日吉丸といふ同じ漁船の船長の一人娘で、近くのK町の實科高女を出た、村でも五本の指にかぞへられる器量よしのヒサエに對して、村一ばんのぶをとこの太吉がまともに戀をしかけたとて何にならう。それは彼も十分承知もしてゐた。滅相もないことだと思つてゐた。だから、ヒサエのからだに觸りたいとか、嫁にもらひたいとか、そんなことは少しも考へはしなかつた。何しろ彼の頭は魚のことで一ぱいだつたし、第一、自分の顏や姿に愛想をつかしてゐた彼は、女の對象としての自分を考へることなど到底できなかつた。たゞ火のそばへゆけば否應なしに熱くなるやうに、ヒサエのことを考へたり道で會つたりすると、むしやうにそこらがほてつてきて、自分で自分をもてあましてしまふのだ。こいつが戀つてものかと、以前にちよつと考へかけたことがあつたが、遊び人の多い漁師仲間にまざつて二十六にもなりながらまだ女を知らない彼には、そんなことを考へるのさへテレ臭い氣がして、すぐやめてしまつた。

おまけに、ヒサエには鑛一といふりうとした男がついてゐる。太吉より二つ年下だが、同じ海

形丸の若い衆で、男つぷりはいゝし辯はたつし、陽氣でがむしやらですばしこくて、鰹竹を持たしたら若衆部屋一ばんの腕つこきだ。ヒサエの方では、べつにどうといふことはないやうで、會へば親しく口をきく程度らしかつたが、鑛一の方では大熱々で、殊に船の上で若衆どうし女の話が出るたびに、おほつぴらに切々たる戀情をぶちまけ、將來はおれの女房にするのだと獨りぎめにきめてゐた。そんなとき、太吉はべつに嫉妬めいたものは感じないらしく、それが當然のことのやうに例のニヤ〳〵笑ひをうかべながら、默つて聞いてゐるだけだつた。事實、鑛一と太吉では、女のことに關する限り、あまりにケタがちがひすぎてゐたし、太吉もよくそれを心得てゐたから、鑛一と張合ふといふやうな氣は毛頭無かつた。謂はゞ、あきらめ切つてゐたのである。

それだけに、その淋しさはよけい切ないものにちがひなかつた。たゞ彼のやうな性格と境遇の人間には、その淋しさがそのまゝの姿であらはれないだけの話で、だからこそ、ヒサエに會つたりすると、あきらめ切つてゐながらも、身體ぢゆうがやたらにほてつてきたりするのかも知れなかつた。

ヒサエの方では、そんなことは知るよしもないから、持前の氣さくな性分で、ことに太吉には

なんの氣もおけないらしく、朗らかに、さつくばらんに、いろんなことを話しかけては、太吉がヘドモドするのを背後から面白さうに眺めてゐた。あげくのはて、鏡一のことを持ちだしてきた。

「鏡ちやんて、面白い人ねえ。いつか南洋からとても怖つかねア鬼の面を持つてきてくれただ、お土産にの。さうしての、おめアに虫がつくといけねアで、これを魔よけにしろだつて、ホホホ、よく云ふぢやあ……。そいからの、あの人、前に現役で中支へ行つつら、あん時わしに手紙よこしての、おめアが送つてくれた慰問袋を、ぐうぜん手に入れた、あの切干はとてもうまくて、故郷のことがなつかしく思ひ出されただつて……、わしや、切干なんか入れたこと一度もないのにさ、ホホホ……」

太吉は、それらの言葉を、何か音樂でも聞くやうにうつとりと聞いてゐた。話の内容なんかはどうでもいゝ、たゞ彼女のやゝ舌にもつれる甘つたるい聲と、浮々と樂しさうな彼女の氣持を背中一ぱいに感じながら、ときどき大げさにコックリしたり、ゲラゲラ笑ひ聲をたてたりしながら、狹い畦道の隅つこの方を、畑に落ちんばかり遠慮つぽく歩いて行つた。

四

ヒサエの知らせは眞實だつた。

進水した新船は十二月八日の八をとり、末廣の縁起にちなんで第八海形丸と名づけられ、當分徵用が猶豫されたのを機會に、一ケ月ばかり小笠原方面へ出漁することになつた。

乘組員は甲板部機關部の役付漁夫全部と、いくらかの平漁夫が陸路大湊へ急行して、そこから船を出し、すぐそばの伊勢神宮に參拜してから、そのまゝO村へ入港、殘りの漁夫をのりこます手筈だつた。

小笠原と聞いて、太吉はとび上つてよろこんだ。秋から春にかけて小笠原へ行くといへば、黄肌マグロを釣る「やり手糸」と、底魚を釣る「下てじ」が主である。もちろん竿釣りで瀨付きの鰹も釣るが、それは沖魚群の鰹釣りにくらべれば、ものの數ではない。

太吉のやうな神經遲鈍な者にとつて、寸秒を爭ふ敏捷活潑な鰹釣りなど、どちらかといへばニガ手だつた。小學校時代鰹釣り體操といふのが正科になつてゐて、廢船になつた鰹船を校庭の一

隅にすゑ、先生の號令一下、木製の鰹を釣りあげる練習を毎日やらされたが、そのころから餘りいゝ成績ではなかつた。ことに右手の二指をなくして以來、右手で鈎をぬいたり餌饂を鈎につけたりすることができなくなつたゝめ、右左をとりかへて全部逆にしてしまつたのだが、そして今では生れつきのギッチョみたいに自由に動くやうにはなつたものゝ、やはり鑛一のやうな天衣無縫の敏活さには、たうてい歯がたゝなかつた。餌つきのいゝ沖なぶらで、鑛一が一分間に十五六匹釣るとすれば、太吉はせいぜい七八匹だつた。だから鑛一初め鰹釣りの上手な者からは、全く馬鹿にされてゐた。

顔ではニヤニヤ笑つてゐても、太吉はそれが口惜しくてならなかつたのだ。ほかのことはどうでも漁の上のことでは誰にも負けたくなかつた。それで人知れず研究もし、修練もはげんだが、柄にあはぬといふのか、鰹釣りだけは何としてもそれ以上上達しなかつた。

そのひけ目をおぎなふつもりで、彼はこの數年來ギハダその他のテジ釣りに全力をそゝいだ。その結果、最近やうやくそのコツをおぼえ、めきめきと成績をあげてきたのだつた。

(釣竿(はね)ぢやあ負けても、テジぢやあ誰にも負けねえぞ)

お人好しの彼のがんくびにも、さう云つた負けじ魂が人知れずこもつてゐたのである。

久しぶりにそのヤリテジに行けるのだ。今度こそ鑛一らの高慢鼻をおつぺしよつてやるぞ。一匹十五六貫もあるすばらしいキハダを、うんとこさ釣つてくれるぞ。一貫目三圓とすりや、百本釣りや四千五六百圓だ。一貫目の鰹なら三千本ぶりだ。……いやいや、そんなこたアどうだつてえゝ。おらつちみてえな人間だつて、お國の役にたてるつてことを、今度こそ思ひ知らしてやれるんだ。こんな片輪のウスノロ野郎でも、きつとき一つと戰爭のお手傳ができるんだ、さうだ、できるぞ、できるとも……

それを考へると、太吉はうれしくて嬉しくてたまらなかつた。たゞでさへニヤニヤ笑ひの顔に、腹の底から大笑ひが、嬉し涙がこみあげてくる。

「母ちやん、おら、はあ、た、たまんねえや。おらが行くまでに、早くゝか、かぜをなほしといてくんな」

午前中だけ陽あたりのいゝ前庭にござをしいて、いま拾つてきたばかりのわかめやかじめを干しながら、太吉は家のなかの母親に聲をかけた。家といつても名ばかり、岬の東傾斜面の中腹に

やつと狹い平地をみつけて建てられた粗末な藁ぶき屋根の古家で、細いヒョロ〳〵松と竹籔の間から駿河灣の一角がながめられる。父親がなくなつて母一人子一人になつてからは、こんな小さな家でも廣すぎるくらゐで、ことに太吉の出漁中は、小柄でやせたシマが、まるで大きな貝殼でもしよつてるみたいに、一人ぽつちでツクネンと暮してゐるのだつた。

「ひやあ大丈夫ぢや。あしたから起きるんで……」

浮々した太吉の聲を聞きつけて、寢間着姿のシマが障子をあけて首をつきだした。唯さへやせてゐるのに、この五六日の病臥でめつきりやつれたやうに見える。

「そんだつて、も、むりをしちやあいけねえよ。出帆までにやまだ二三日あるで」

母親の顏色を見て、太吉が案じ顏に云ふと、シマは急に聲をひそめるやうに、

「そんでもなあ太吉、いきもミネ婆さんが來ての話にの、でアぶ爺の潛水艦が近くまで來とるちうぢやねえか。漁船もでアぶやられたちう話だけえが……」

この三十餘年間、夫と息子を一年ぢゆう荒海へ送りだして、一生の大部分を一人で暮してきた氣丈の母親も、この全く新しい出來事には大分頭をなやましてゐる樣子だつた。

「せ、せ、潛水艦だつて？　なーに、そんなもん、おら、な、なんとも思つちやゐねえ……時化よりや樂づらに、ハハハ」

太吉は事もなげに笑ひとばした。

「時化よりだつて？」

「さうよ、母ちやんなんか知んねアらけえが、た、た、太平洋のドまんなかで、大じけでも食つてみろ、そ、それこさ、どうしよんもねア。たんだ、か、か、神樣ををがんでるよりほか、しよんねアだよ。それに比べりやあ、アメリカ野郎の潛水艦なんかあ、た、たかが知れてらあ。何しろ、あの時の……」

なほも云ひかけて、太吉はふつと口をつぐんだ。母親の顏つきが急に變つてきたのである。十年前、野島崎沖の大じけで、太吉の父親ほか數名の漁夫が激浪にさらはれたあの悲慘な出來事が、シマの胸にゆくりなく甦へつてきたにちがひない。あのとき、シマ初め遺族の女房たちが、歸らぬ夫の靈を呼ぶために、夜の濱べに火をもやし、夫にせて作つた藁人形を波にうかべ、いたましい叫びをあげて夫の名を呼んでゐたその慟哭の聲が、太吉の耳にも卒然としてよみがへつてき

た。この上おらが死にでもしたら、おふくろはどんなに悲しむだらう。さう思ふと、何か熱つぽいかたまりが、急に胸いつぱいうづきあげてきて、太吉は泣きだしたくなつた。それをやつと嚙みこらへながら、太吉はとつさに話をかへて、

「なあ母ちやん、せ、潜水艦の心配なんか、なんにもいらねえよ。で、出て來やがつたら、體當りだ。却つて面白えよ、それよかの、おら、魚のことが心配なんだ、なんしろ半年もやすんだでのう、つ、つ、釣りのコツを、わ、わすれちまやしねアかと思つて……ハハハハ」

やさしく笑ふと、シマも釣りこまれたやうに、

「さうだのう、漁師が海を怖つかながつちや駄目だ。こつちから敵の潜水艦をめつけるぐれえなつもりでやるだの。鐵砲がなけりや、おめえ一人で玄能持つて泳えでつて、ドデツ腹へ穴をあけてやれ。漁だつて戰さだつて、おんなじこんぢや。な、何事も天子さまの御爲ぢや。しつかりやつて來いよ。おめえもだん〳〵死んだ父ちやんに似てきたで、おら頼もしいだ」

さう云ふとシマは急に障子をしめてはげしく咳こんだ。

五

その翌々日の未明、大湊の第八海形丸から、いよいよ今朝出帆、正午ごろそちらへ着くといふ無電が入つた。

村は大さわぎだつた。ほかの大漁港などとちがつて、まとまりのいゝ小さな漁村だけに、船主は誰であらうと船はわが村の船といふ氣持がつよいのだ。まして、久しぶりに新造の經船が入るといふので、村びとたちは朝からその噂でもちきりだつた。船着場は駿河灣側の内濱の方なのだが、氣の早い連中は早飯食をかつこんで、岬の先端から外濱の方までおしだし、遠州灘の方からやつてくる新船の姿を一刻も早く目に入れようとたくらんだ。

殘りの乘組員たちも全部動員されて、いつでも乘船できるやう待機命令が發せられた。出征その他の事情で、定員〇〇名には十數名たりなかつたが、それは他船の漁夫から補充することになつた。

大體、この地の經船は、昔から一ぱいの船に三十八戸から四十二三戸のかまど（家系）といふ

ものが定まつてゐて、それが五代も八代もつゞいてをり、他の者は自由に乘船できない仕組みになつてゐた。たとへば、甲の船主と船子とのあひだが氣まづくなつた場合、その船子が乙船にかはるのには、兩船主の圓滿な了解がいる。それがなければ絶對に移れないのだ。その上、おなじ一船一家系の組織でも、焼津などのやうな大きな町場では、どうしても所謂よそもの（他村の漁夫）を雇入れなければならぬ場合があるが、この村では絶對によそものを乘せないしきたりだつた。それだけ純粋に、父祖の傳統を守つてきたのである。

だが、今はそんなことにかゝづらつてゐる時ではない。他船の者であらうと何であらうと、働ける者、手のあいてる者は、どんどん乘せてゆかねばならぬ。船主たちもみなその氣になつてゐた。だから、昔ならむづかしい不足乘員の補充も、たちまち解決した。

すでに内濱の船着場附近には、それらの漁師たちが、手に手に風呂敷包みや茶鉢をかゝへ、家族たちにとりかこまれて待ちかまへてゐた。そのなかに唯ひとり、ポツネンと砂地にうづくまつて、ニヤニヤ笑ひながら時々吾家の方を振返つてゐる太吉の姿もまじつてゐた。

朝のうちは曇りがちで案ぜられた空模様も、畫ぢかくなつてすつかり晴れわたり、はるか東方

には伊豆半島がうつすらと眺められた。東北風の吹くときは猛獸のやうな凄まじい形相をあらはすこの内濱一帶も、けふのやうな靜かな日和には、文字どほり青だたみをしきつめたやうで、ただ渚の砂地や低く匐つた岩礁に、のどかな波がしらが時をり思ひだしたやうに白くくづれるばかりだつた。

「來たぞオ、來たぞオ……」

とつぜん、岬の突つ鼻の方から、かすかな聲がきこえてきた。早くから外濱の方へ出むいてゐた物好きな連中であらう、女もまざつた七八人の人影が、手をふり、飛ぶやうにしながら現れた。

今まで靜かだつた人むれは、にはかにざわめきたち、みんな腰を浮かして岬の鼻の方に目をやつた。だが、まだ何も見えない。見えない筈だ、このあたりには一めんに暗礁が多く、西からくる船が内濱へ入るには、ばかばかしいほど大きまはりをしなければならないのだ。

やがて三四分もすると、岬の鼻から鼻くそがこぼれるやうに、ポツンと小さな船のすがたが見えだした。エンヂンの音もかすかに聞えてきた。

「そうれ、來た、來たア」

「見えたぞ、見えたぞオ、御前を廻つたぞオ」

一度腰をおろした者もみんな總立ちになつて、顏をひきつらせ、目をかゞやかせて沖を見まもつた。

やがて、岬から二浬ほどある御前岩の暗礁を大きく廻りこんだその船は、見る見る姿を大きくして、內濱へ近づいてきた。

いかにも戰時下の漁船らしく、船首の舷側と操舵室の腹に、クツキリと日の丸がえがかれてある。前檣に日章旗、後檣に眞赤な船名旗が、高らかにひるがへつてゐる。ピンと張つた形のいゝやりだしから胴中にかけて、ズラリと人影が立ち、ひつきりなしに手をふつてゐる。シヤカツ、シヤカツ、シヤカツ、シヤカツと、はずむやうに輕やかなディーゼル機關のひゞきが次第に高まるにつれ、船名旗の白ぬきの文字がハツキリと見えてきた。

——第八海形丸。

突如、ワーツといふ鬨の聲が、內濱一帶にどよめき起つた。村びとたちは、とび上り、帽子をふり、聲をからして萬歲を叫んだ。その聲がこだまのやうに船からも返つてきた。

見るまに船は、內濱の正面百メートルほどの沖合へ來て、ピクリと停つた。

「ほう、こりやえゝ船だ。前の海形よりや小つくいけえが……」

「伊勢の黑杉ださうぢやねえか、ありがてえごりやくがあるぞ」

「木造船もなかなかえゝもんぢやのう」

村の漁船は最近ほとんど全部鋼鐵船ばかりだつたので、それを見なれてゐる村びとたちは、赤みがかつた眞新しい黑杉造りの木船に、何かすがすがしい神ながらのすがたを見出して、つゝましやかな嘆聲をあげるのだつた。

磯からはすぐ傳馬船が三ばい漕ぎだされた。二十數名の漁師がそれに分乘してゐる。本船にもチヤカ（二三馬力の小さな發動機）のついた傳馬が二はい乘せてあるのだが、やりてじに行くときは鰹釣り專門のときとちがつて、傳馬を五六ばい持つてゆくのが慣はしだ。

その最後の傳馬へ一ばんあとから乘りこんだ太吉は、船が岸からはなれようとしたとき、チラとヒサエのすがたを見送人のなかに見出した。一ばんうしろの、やゝ小高い砂地の上に、三四人の友だちと並んでゐたヒサエは、ニコニコ笑ひながら、頭の手拭をはづして元氣よく振つてゐ

た。それが自分への挨拶ではないと知りつゝも、太吉は思はずポツと顔を熱くして、自分も手をあげて振り返した。

そのとき、突然、待ちよオ、待ちよオといふけたゝましい女のしやがれ聲が聞えて、一人の老婆が水ぎはへとびだしてきた。

「日出エ、日出エ……おめえ明神さんのお守りを忘れたぢやねえか、しつかりやらにや駄目だぞ、おめえはボンツクだで……」

大聲にどなりながら、すでに岸から六七メートル離れた傳馬を追つて、水のなかへ踏みこんできた。手に袋入りのお札らしいものをつまんでさし出してゐる。日出と呼ばれた十七八の少年漁夫が、眞赤にテレた顔を立上らせた。

一ぱん艫にゐた太吉は、そのお札を受取つてやらうと、とつさに右手をグイとのばした。が、たつたいまヒサエのすがたを見てボーツとしてゐたせゐか、それとも波のかげんか、やつとそのお札をつかんだ拍子に、もんどりうつて船からすべり落ちた。ワツと喚聲があがつた。ウスノロのおめでた野郎と思はれてゐる太吉として、いかにもふさはしい滑稽な恰好だつたので、みんな

思はず吹きだしたのである。

ところが、全身水にもぐつてしまつたと思はれた太吉の右手だけが、いびつな恰好の指先に今のお札をしつかりつかんだまゝ、ニヨツキリ水の上につき出てゐるのを見て、人々は一瞬あツと息をのんだ。

そして、水のなかからムツクリ頭を出した太吉が、全身びしよぬれになりながら、村の氏神駒形明神のお札だけはぬらさずに、傳馬の上へヨチヨチはひあがるのを見ると、嘲笑の聲はたちまちやんで、讃嘆の拍手歡呼が磯一ぱいにまき起つた。當の太吉は、いかにもテレ臭さうに頭をかいたり、ぬれた服をしぼつたりしながら、相變らずニヤニヤ笑つてゐた。

明神様のお札が水にぬれなかつたといふこと——この偶然の小さな出來事は、見送りの人々に何か云ひしれぬ深い感銘をあたへて、壯行の感激は一ぱいと高まつた。

ところが、太吉らの乘つた傳馬が本船に近づくと、待つてましたとばかり、がむしやらな喚鳴り聲が頭上から降つてきた。

「なーんだ、誰かと思やあベンチの野郎か。だうりでヘマなことをしやがると思つた。わつはつ

は、見ろ、あのショボたれた恰好つたら……まるで鼠が寢しよんべんひつかけられて、せつなつ
屁たれたつて形だ。わつはつは、わつはつは……」
ほかならぬ鏡一だつた。
小粋な縞のワイシヤツに、ちよいと斜めにハチマキをのつけた、水のしたゝるやうな美男の鏡
一は、すつくと船首魚釣臺につつ立ち、持前の早つ口でどなりつけながら、さもをかしくてたま
らないやうに、わざと大げさに腹をかゝへて笑ひつのるのであつた。

六

本州の胴中をま二つに縦斷する富士火山帶は、伊豆七島からハロース島、スミス島、鳥島、小
笠原諸島と眞一文字に南下し、そのあひだに大小百數十の島々、火山、岩礁、淺瀬をつらねて、
到るところに鰹その他の好漁場をつくつてゐる。
ことに孀婦島から南硫黄島にいたる小笠原諸島の附近には、海形場、海德場、三福場、海神場、
松清場、日吉場、日東場などといふ、發見船の名前をつけた淺瀬が無數に散在して、鰹、キハダ、

鰹魚はじめあらゆる魚類の大集會所をひらいてゐる。第八海形丸は、いまそこを目ざしてやつて
きたのだ。
いろいろな魚がゐるから、いろいろな餌を用意してゆかねばならぬ。あの日、小一時間ほどし
て母港に別れをつげた第八海形丸は、まづ根據地S港に一泊して、食糧、燃料、氷などのほか、
キハダを釣る冷凍鰯を一カメ積みこんでから、翌朝未明、伊豆の内浦に寄つて、鰹の生餌マルイ
ワシ一カメ、マグロ類の生餌にするやゝ大きな鰯を一カメ買ひとゝのへると、すぐさま針を眞南
にむけて乘出したのである。
すでにハロース、スミスを過ぎて、火を噴く鳥島、竹の子そつくりの孀婦島が左舷に見えてき
た。S港出帆以來すでに一晝夜半、早くも約三百浬を航破して、めざす漁場はあと二百浬ほどだ
つた。
さいはひずつと風つゞきで、農林型百二十三噸、二百五十馬力の新造船は、白ぬりのドン腹も
染まるばかりに鮮やかな濃藍色の黑潮を蹴ちらして、エンヂンの爆音も快調に、なほも南へ南へ
と突つぱしつていつた。

前檣の見張臺には、屈强の漁夫が一人、双眼鏡を目にあてゝ八方を睨んでゐる。今は魚群監視のためではなく、對潜見張りのためだつた。敵潜水艦が出て來たら、體當りを食はせようといふ構へだ。ヤリテジに行く時は普通前檣を倒してゆくのだが、その見張りの必要上、今度は倒して來なかつたのである。

操舵室の屋上にも、漁撈長の平五郎がドッカと大あぐらをかき、ギョロリとした巨眼の下に掌を水平にあてゝ遠くをねめ廻してゐた。十六の時から三十餘年も太平洋の荒波で叩きあげた彼はもう五十近くもなるがさすがに目達者で、双眼鏡なしに二三浬先の魚群を發見する。しかも人が目の上にあてる掌を、目の下にあてがふのだ。

O村の鰹船で絶對的な權力をもつ者は、この漁撈長（普通主梶（おもかじ）といふ）である。彼の命令に從はない者は、竿ででも薪ザツパででも容赦なく張り倒される。丙種免狀をもつた若い船長もゐるにはゐるが、彼には全く頭が上らなかつた。

甲板上には、船首（おもて）の方に若衆連が、艫の方に年寄衆（妻帶者）が、めい〳〵とぐろをまいて日向ぼつこしながら、下テジ用のホーデ（鉤かけ）を作つたり、ヤリテジの繩をつないで鉤をとり

つけたり、間近に迫る戰鬪準備に大童だつた。

こゝらあたりはもうすつかり春めいて、日向にゐればシャツ一枚でも寒くはない。獨り者の若衆たちは小忙しく仕事しながらも、他愛ない女話に夢中だつた。中でも鑛一は、さつきからたてつゞけにヒサエの惚け話にうつゝをぬかしてゐた。

「とにかく、誰がなんてつたつて、まあづヒサエにかなふやつはねえな。おゝ見よ、あの夢みるやうな瞳、林檎みてえな頬ぺた、おゝそして、ポッテリしたおちよぼ口に、チラリとのぞく片ゑくぼ……ヘッ、たまんねえや」、

やいやい、えゝかげんにしろ、手ばなしで惚けやがつて、とか、なーに、これがあはびの片思ひつてやつぢや、などと半疊を入れる者があつても、鑛一は平氣の平三で、聲色でもやるやうにまくしたてた。

「まあ、やくな、やくな。いまに俺んちへ遊びに來たら、彼女の手料理でお茶ぐれえ御馳走してやるぞ。ちよいとあなた……なんだヒサエ……あのう、ベンちやんがお腹ペコペコの顏していらしたわ……」

わつはつはと爆笑する一座のすみつこに、眞赤になつた太吉が、ホーデを口にくはへてしごきながら、ニヤニヤ笑つてゐた。

こんなに口では話に夢中になつてゐても、手はホーデ造りに精神をこめてゐるのだ。子供の頃から永年造りつけてゐるので、どこはどうやらねばならぬかといふ勘どころは頭の髓までしみこんでゐて、それに自分の創意工夫をさへ加へてゆくのだ。右左互ひちがひに針金を折りまげた八本のホーデの先に釣鈎をたらし、一ばん下にビシ（おもり）をつけるのだが、簡單のやうでなかなかむづかしい。

さんざん喋べりたてゝゐた鑛一は、そのときふと後の方をふりかへつて、いたづらつぽい目つきで太吉の手許を見てゐたが、急にプツとふきだした。

「なんだそりや、ベンチ。まるでメメズがのたくつてるやうぢやねえか。汝のが一ばん不細工だぞ」

船に乘るときから目のかたきのやうに事毎に太吉を嘲弄したりからかつたりしてきた鑛一は、またしても冗談半分の難くせをつけてきた。べつに心から憎んでゐるわけではないが、鑛一みたいな性格の男には、太吉のやうな煮えきらない存在が目ざはりで齒がゆくてならないらしい。何を云つても怒らないし、いつもニヤニヤ笑つてゐる。こいつを一つ怒らしてみたいのだ。

だが、やつぱりだめだつた。太吉はチラと鑛一の方を見て、フフフと笑つただけだつた。

「チエツ、この男はなんて甲斐性のねえ野郎づら。そんなこんぢや灘ガツヲは釣れねえぞ。灘ガツヲが釣れなきや、おら村の漁師たあ云へねえぞ。まちつと筋がねを入れろい、筋がねを……」

思ひつきり亂暴な喧嘩口調でゐながら、鑛一もニコニコ笑つてゐた。

「のれんに腕おし、ベンチに鑛一ぢや」

「もう一つおまけに、ヒサエに鑛一」

わつはつはと、又しても大笑ひだつた。

そのとき突然、操舵室の屋上から、平五郎の胴間聲がひゞきわたつた。

「やーい、魚雷だ、魚雷だ、とりかーぢ！」

魚雷と聞いて、若衆連は總立になつた。いよいよ來たか、といふ緊迫した感じが、するどく背すぢを走り、反射的に海面を凝視した。が、雷跡らしいものも潛望鏡も、何も見えない。第一、

敵の潜水艦なら、部署につけの號令があるはずだ。不思議に思ひながら、おもかぢの顏と海面とを見くらべてゐると、そこへ、鯨か鮫の死骸みたいな長細い銀色のものが、浮きつ沈みつ流れてきた。目のきく平五郎は、早くもそれが不發の敵魚雷であることを見ぬいたのだ。

「なーんだ、土左衞門の魚雷ぢやねえか」

「だうりで平さん、平氣の平三だと思つたよ」

拍子ぬけの顏で笑ひとばしながらも、初めて見る敵魚雷の不氣味なすがたに、若衆たちは好奇と敵愾の目をかゞやかせて、じつとそのにぶい光をにらみつけた。

「野郎ども、よつく見ておけよ。こいつが生きて泳えでゐる時あ、カジキやサメよりや、ちつとばか荒つぺえぞ」

頭の上から、笑ひをふくんだ平五郎の聲が聞えてきた。

七

海形場——それは小笠原群島の西北端にある無人島西ノ島から眞南に約三十二三浬の地點にあつた。二十年も前、先々代の海形丸が初めて發見した淺瀨で、こゝさへ張つてゐればまづい飯は食はんとさへ云はれた豪勢な新漁場だつた。發見當時は、カツヲとキハダが、まつくろに折重つて船をもち上げるばかりだつたといふ。第八海形丸がその盆のやうに平べつたい西ノ島を左手にながめたのは翌日の晝ごろだつた。

海圖には淺瀨として載つてゐても、それらはたいてい五六十ビロから三百ビロもあつて極くせまく、目に見えるわけではなし、浮標もおいてないので、まづそれをさぐりあてるのからして、容易でなかつた。もつとも、先代からの海形丸には、わが國の鰹漁船にたゞ一つといはれる最新式の音響測深儀がとりつけてあるので苦もなく探せるが、普通の鰹船だと、天測や目測のほか、何回も何十回も船をとめ、長いワイヤの測深機(レッド)をたらして測らねばならぬから、その苦勞も並たいていではなかつた。時には、宵から朝まで一晩中かゝることもあつた。

だが、海形丸にとつて、海形場をさがすことは、新鋭な機械力もさることながら、今まで何十回となく來たところであるから、いはばわが家の畑を耕しにきたやうなものだつた。

そのなつかしいわが漁場がだんだん近づいてきた。最後にこゝへ來たのは一昨年の秋だつたか

ら、まる一年半ぶりだ。漁師たちはもう目の色をかへて、海の狀況を見たり、アリウキ（浮標）の用意をしたりしてゐた。

眞赤な夕陽が西の水平線に沈みかゝつて、うす氣味わるいほど靜かな海は、れんげか何かの花畑のやうに鮮やかなあかね色に染つてゐた。

そのとき、カハセミのやうな綠と黃金に光る夫婦者らしいシイラが二匹、特徴のある長い背びれでシューッと一直線に水を切りすゝんでゆくのが見えた。と思ふと、その後方に、背が青く腹の黃白い六尺もある魚が一丈ばかりサッと宙に舞ひあがつた。

「やあ、飛んだ、飛んだ、キハダが飛んだぞつ」

漁師たちは、目をひんむいた。

また飛んだ。眞つ黃な槍の穗のやうに長い尾鰭に夕陽が照り映えて、キラリと金色に光る。飛びながらシイラを追ひかけてゐるのだ。

ちやうど活魚艙のそばでドラム罐のアリウキをいぢつてゐた太吉は、この繪にもかけぬ美しさをチラと目に入れると、思はずしびれたやうにドラム罐にしがみついた。永年見なれてきたキハ

ダだが、これほど美しい姿を見たことは初めてだつた。彼はなぜか、突然ヒサエの姿を思ひだした。

娘なら二十二三、よく成熟して重みのある、しかも身輕ではしつこい、小股の切れあがつた感じの美しさである。もとより太吉がそんなこまかいことを感じたわけではないが、たゞなんとなくヒサエに似たみづみづしい魅力を今さらに感じたのであつた。

（ようし、あれだ、あれだあいつを今夜、しこたまやつつけてやるぞ！）

彼はやつと持前の笑ひ顏をとりもどして、ニヤニヤ舌なめずりをした。

やがて、キハダのほかにも鰹やチヤツパ（鮪の子）の群がぞくぞくと現れてきた。いよいよ瀨に近づいた證據だ。すでに音響測深儀にはスキッチが入れられ、底知れぬ海の深さが小氣味よく紙に記錄されていつた。

百二十ピロ……百ピロ……九十ピロ……じつと記錄紙をながめてゐた平五郎は、それが八十ピロになつたとき、大聲で命令を下した。

「ようし、エンヂン・ストップ、アリウケを入れろつ」

船がとまると同時に、アリウキが投げこまれた。それは、頭に船名旗と豆電氣の燈り玉をとりつけ、尻に長いロップとワンヤで石の重りをつけたもので、十五六日間の操業期間中、瀬のありかを明示するためだつた。

美しいあかね色はいつか消えて、海も空も蒼茫と暮れてきた。キハダが一ばん食慾をそゝられる夕まづみが靜かに迫つてきた。

急いで夕飯を食ひをはつた漁師たちは、カチカチに凍つた冷凍鰯をシヤベルでカメから取りだして笊に入れると、こんどは、ヨーイサ、コラサと、掛聲もうきうきと五はいの傳馬を順々に海へおろした。

一ばい四人乘りで、三人が釣手、一人が餌係りだ。各船に、二百ピロもあるテジ綱をまるく入れた籠を三つ、餌笊を一つ、蓄電池のついた燈り玉を一つづつ用意する。

乘るのは、若衆を中心とした平漁夫で、漁撈長、船長、機關長、コツク長はじめ役付漁夫は本船にのこつてテジをやるのだ。何しろ久しぶりの出漁なので、みんな張切つて何やらガヤガヤわめいてゐる。だまりこくつてゐるのは太吉一人だつた。

ゴムカツパに身をかためた漁師たちがみんな傳馬に乘船してしまふのを見ると、平五郎が仁王のやうな巨體を魚釣臺にのりだして叫んだ。

「えゝか、いつも云ふとほり、みんな自分勝手なまねをするぢやねえぞ。五はいチヤンと並んでやるんだ。本船の信號と、お互ひの燈り玉に氣をつけろ。なんぼ食つたつて、本船の燈りが見えなくなるほど流しちや駄目だぞ。えゝか、わかつたな」

「わかつた、わかつた。ぢやあ行つてくるぞ」

はずむやうな返事をのこして、五はいの傳馬はほのぐらい夕闇のなかへ消えていつた。アリウキを中心に瀬のぼりをして、そこから船を潮に流しながらテジをやるのだ。

太吉は發動機のついてない傳馬の一つに乘りこんでゐた。櫓をこいでゐるのは、餌係りの日出男だつた。この無邪氣な少年漁夫はあの明神樣のお札事件以來、太吉にすつかりなついて、けふも自分から太吉の船に乘りたいと申しでたのである。そのほかに、船長格の年寄衆が一人と、忠作といふ若い衆が乘つてゐた。

いつか十日ばかりの月が水平線から風船玉のやうに浮び上つた。もう八時を廻つたであらう。

月の出しほは特に魚の餌つきがいいのだ。マグロといふ魚は不思議な魚で、晝間はどこか遠くへ行つてゐても、夜になると必ず淺瀬へ歸つてきて、海面近くを瀨のぼりする。その習性をねらつて、輕いテジを流すわけだ。

やがて本船の灯はだんだん小さくなり、僚船との距離もだいぶひらいてきた。アリウキから七八町も瀨を上つたころ、五はいの船は約二町おきに一列にならんで、横むきに流しだした。

この五はいそろつて同じ間隔で流すのが、O村、殊に海形獨特のやりかただつた。かういふやうに團體的に散開してゆけば、一つの船で魚の食ひがよかつた場合、他の食ひのわるい船をそこへ寄せさせて、大量に釣ることができる。他所の船はアリウキの廻りを自分勝手にでたらめに流すから、一ぱいが食つても他は食はぬことがあり、全體の成績が上らないのだ。O村のヤリテジが日本一の優秀を誇つてゐるのも、かうしたところに苦心があるのだつた。

「さあ、こまえろ。よつく小くく切つて撒くんだぞ」

艦の衆の命令で、日出男は冷凍イワシをこまかく千切つて海中へバラまいた。これをコマエ（燒津ではコマシ）といふ。魚を呼ぶ誘ひ餌だ。

太吉はもう身體中ぞくぞくしてゐた。二百ピロもある木綿の本繩の先に小さな錘りをつけ、それに二十ピロほどのセギヤマ（てぐす）とワンヤをつないだ鉤に、冷凍イワシの口をひつかけると、祈るやうな身ぶりでポチヤンと海中へなげこんだ。

「どうだ、食ふかな……あんま久しぶりだで、勝手がちがふわい」

年寄衆もニコニコしながら投げこんだが、太吉は默りこくつたまゝ、しづかにセギヤマをのばして行つた。

テジが張ると魚は食はぬ。餌がブカン〳〵樂に流れてゆくやうにテジに適度のたるみをくれながら五寸か一尺づつのばしてゆく——これがヤリテジのこつだ。船が搖れてもテジが張らないやうに、どく自然に流さねばならぬ。

十ピロ……十五ピロ……まだセギヤマが終らないうちに、突然、太吉のテジはググツと引つばられた。早くもかゝつたのだ。

「おツ、く、く、食つた！」

思はず叫んで、太吉はテジを持ちなほした。ググツ、ググググツ……重みのある、快よい振動

が手に傳はつてくる。魚が首を振つてゐるのだ。胸がドキドキする。

そのうちにグーツと引つぱられた。引つぱられるにまかせてテジをのばしてやる。時々かるく引つぱつてみる。またグーツと引く、およそ百ピロも引かれたとき、急に動かなくなつた。

よしとばかり、太吉はグイグイテジをたぐりだした。すでに弱りはてた魚は、そのまゝどんどん引かれてきた。六尺ゆたかの巨體が、にゆうと目の前に浮んできた。黄ろい背びれ尾びれが、月光をうけて淡く光つた。すばやく手かぎを鰓にうちこむと、力一ぱいグイと船中へ引上げた。

とたんに、バタバタツと船もくだけるばかりに暴れだした。

(觀念しろよ!)

例の引導を口のなかで渡しながら、掛矢をふるつて脳天に一撃くれると、魚はグツタリと動かなくなつた。黄ろい肌の特にあざやかな大キハダだつた。

「巨きやなあ。こりや二十貫近くあるぞ」

みんな呆氣にとられて眺めてゐた。

すばらしい幸先だつた。太吉は、ぐツぐツとこみあげてくる笑ひを噛みころしながら、第二の

餌を鉤につけてゐた。

八

その晩太吉の傳馬は、八時から九時ごろまでのあひだに、十貫から十五六貫のキハダを二十本も釣つた。そのうち半分は太吉の收獲だつた。船中に入りきらず、綱でしばつて、海中につるしながら歸つてきた。他の船はたいてい十本前後にすぎなかつたが、本船でも三十餘人で百本近く釣り、全部では千五六百貫の大漁だつた。

夜は瀬の附近に船を流し、翌朝は三時から六時ごろまでの朝まづみに、竿でカツヲを二千本ばかり釣りあげた。竿では何といつても鏑一が一ばんの稼ぎ手だつた。

この朝夕のまづみをすぎると、カツヲもキハダもほとんど食はなくなるので、晝の間はやはり傳馬を出して下テジをやる。これはカツヲの肉を餌にして、下魚または根魚といはれる海底の雜魚を釣るもので、カツヲ釣りのやうな壯烈味も、キハダテジのやうな豪快さもないが、そこには又のんびりとした小味な魅力があり、しかも一本に八つも鉤がついてゐるので、漁獲高もばかに

ならない。

二尺ぐらゐの紅いベニサバ、その半分ほどの黒つぽいアカサバ、藝者のやうに口ばたにべにを塗つた七八寸のゲイコダヒ、眞赤な肌に大きな目玉のキンメダヒ、腹に三本筋のある上等兵、その他カサゴ、ベラ、ソツボなどの小魚がかゝるかと思ふと、二十貫もある家老バタなどがあがつてくる。これらの魚は深海に住んでゐるため、釣りあげると水壓の關係で臓物が口からとびだし目もとびくり出てしまふので、八匹一度に食つてもわりあひ輕くあがつてくる。

太吉はこの下テジでも、みごとな腕と超人的なねばりを見せて、一日平均百貫あまり釣り餘いだ。

かうして毎日カツヲ釣り、下テジ、キハダテジとくりかへして、平穏な五日がすぎた。第八海形丸の魚艙は、さまざまな海の幸で次第にふくらんでいつた。

六日目——その日は朝からかなり強い北東風が吹きだし、波も荒く、朝まづみのカツヲはほとんど釣れなかつた。晝間もたうとう傳馬を出さず、下テジにもあぶれてしまつた。漁師たちは上下動のはげしい船室にねころがつて、脾肉の嘆をかこつてゐた。ことに向ふつ氣のつよい鏑一

は、地團駄ふまんばかりにじりじりしてゐた。

「なんだ、これつぱかな風ぐれア……。えゝ風ぢやねえか。前前上陸んときあ、しけだつてなんだつて、そんなことを構つちやゐられねえぞ。こんな風で傳馬もおろさねえなんて、おら村の名折れだ……」

彼はこの數日、カツヲや下魚はとにかく、キハダテジですつかり太吉に壓倒されたのが、くやしくてたまらないのだ。太吉がべつに功を誇りもせず、當りまへのやうな顏をしてニヤニヤ笑つてゐるのが、なほさら癪でならないのだ。おまけに昨夜平五郎が、たゞ鼻つぱしが強えばつかが能ぢやねえ、太吉みてえなやつがほんとの漁師なんだとほめてゐたのを聞いて、なほさらつむじをまげたのだつた。よし、そんなら明日は太吉と一つ傳馬に乘つてやつてみるぞ。なーに、今まではは偶然太吉の傳馬が食ひのえゝとこへ當つたんだ。くそッ、あんなウスノロに負けてたまらすか……さういつた烈しい敵愾心まで燃えたゝせてゐたのである。

夕方近くなつて、いくらか風がしづまつてくると、漁師たちはもうじつとしてゐられなかつた。平五郎にせがみこんで、やつと傳馬を出してもらふことになり、みんな甲斐々々しいゴムカ

ツパに身をかため、勇躍して傳馬に乘り移つた。中にひとり太吉だけが、猿股にシャツ一枚といふ輕裝だつた。これが結局あとで大きな意味をもつことになつたのだが――。

「なんだ太吉、汝あカツパ無えのか」

平五郎がさつそく見とがめた。

「あるけえが……おら、こ、この方が、やりえゝで……」

動作のにぶい太吉には、ゴハゴハかさばつたカツパが不自由なのも事實だつたが、それよりも、貧乏で極度に物を大切にする彼は、最近めつたに手に入らぬ大事なカツパを、こんな天氣のときに使ふのが何となくいやだつたのだ。

「ふんどしはどうした」

「ふ、ふんどしかね……」

云ひよどんでゐると、

「どうした、ハツキリ云へ」

「ふ、ふんどしはね、手拭が無えで、は、鉢卷に切つちやつた」

太吉は面目なささうに頭をかいた。

船の上にも下にも一瞬大笑ひが起つた。が、その笑ひはすぐ消えて、漁師たちは傳馬と船がぶつからないやうに大聲あげてひしめきあつた。それほど強い波だつた。

だが、鰹釣りが魚との戰ひであるとすれば、このヤリテジは自然との、闘ひである。そこにこそ逞ましい漁師魂を鼓舞するものがあるのだ。

「さあけふは潮が強えで、遠つぱしりするぢやねえぞ。何かあつたらすぐ信號しろつ」

平五郎の聲に送られて、五つの灯ははげしく搖れながら、闇のなかへ散つていつた。

「汝ア寒くねえのか、え、ベンチ」

思ひどほり太吉と同船した鑛一は、早くも波をかぶつてずぶ濡れになつてゐる太吉をふり返つた。けふは日出男と三人だけだつた。

「うん……な、なんでもねえよ」

豆電燈にほんのり明るめられたうす闇のなかに、太吉の白い齒がちらついた。

「へつ、あきれた野郎だ。不死身だか不感症だか知んねアが、重寶なからだがあつたもんだ」

フフフと笑つただけで、太吉は又もづんぐりした猪首をまるめて、鉤やセギヤマをもう一度丹念にしらべなほした。それつきり話はとぎれて、たゞ日出男のこぐ櫓の音だけが、舷をうつ波の音にまじつて、悲壯にひゞいた。時々波のために櫓べそがはづれて、日出男は何度も足をさらはれさうになつた。

ふり返ると、母船の信號燈の光はいつかずつと小さくなつて、波のうねりの合間にチラチラと見えがくれしてゐる。わりあひ近くにゐる筈の僚船の灯も、波のためにほとんど見えない。まだかうした漁にあまり慣れない日出男は、櫓をおしながら、ふつと淋しくなつた。

この母船式のヤリテジでは、傳馬が瀬に流されて母船を見失ふことがよくあるのだ。たまにはそれつきり歸つて來なかつたといふ慘事もある。つい二三年前には、村の高須丸がこの海形場で操業中、機關に故障をおこし、すぐなほるつもりで傳馬を寄せないでゐるうちに遠く流されてしまつた。あとに殘された傳馬は、いくら母船をさがしても見當らないので、やむなく西ノ島まで辿りつき、やうやく難をさけたといふ話もある。

長さわづか二間ばかりの櫓こぎの傳馬が、しかも夜中に、ポツンと太平洋のド眞中にこぼされ

て操業するのだから、危險といへばこれくらゐ危險な漁法はない。頼みの綱はたゞ母船の燈だけである。だから母船と傳馬とは、いつも電燈（晝間は旗）で連絡しあつてゐるのだ。よそでは赤青などの色電燈でやる所もあるが、O村では電燈の數でやる。たとへば、三つつけたら、すぐ歸れ、四つなら漁の模樣はどうだ、傳馬の方で四つつけたら今よく釣れてゐる、（これには四と四で「ヨシ」といふ緣起かつぎの意味がある）といつた工合に、あらかじめとりきめた信號で話しあふのである。その母船の燈が見えなくなるくらゐ淋しいことはない。

日出男の祖父も、十何年か前、硫黄島附近で遭難して亡くなつたのだ。チラチラ見えがくれする母船の燈が、ちやうどお祖父さんの靈火のやうに見える。遠くから自分を守つてくれてゐるやうな氣がする……

「さあ、このへんで良えら。やらうぜ、ベンチ」

六七町も來たとき、鑛一が挑むやうに云つた。

「も、もう少し、行かざあ」

珍らしく太吉が異議をとなへた。

「なぜだ」
「な、なぜつて……けふは、せ、瀬が早えで」
「なーに、大丈夫でえ。見ろ、ほかの奴らだつて停つてるぢやねえか」
太吉もふり返つたが、僚船は停つてるか動いてゐるかも分らないくらゐ波にかくされてゐた。
「日出、早くコマエろつてば」
ムツとしたやうに云ふと、鏑一は早くもテジを投げこんだ。太吉はなほも心配さうに僚船の位置をながめてゐたが、やがて諦めたやうに坐りなほすと、日出男のまいたコマエがひろがるのを待つて、ゆつくりとテジを入れた。
船の動搖がはげしいので、丁度いゝたるみをくれるのがなかなかむづかしい。それどころか、大波をかぶるたびに、自分のからだを安定させることさへ骨だつた。
二人は默つてテジをのばして行つた。が、四五十ピロになつてもなんの手ごたへがない。
「日出坊、う、うんとコマエてくれうよ」
さう云ふと、太吉はさつさとテジをたぐり返し、新しい餌につけかへて、また入れた。

五十ピロも流してかゝらないときは、餌がとれてゐることもあるし、潮のためにコマエと餌とが別々の方へ流されてしまふので、面倒でも一度入れなほすのが一つのコツだ。鏑一とてもまんざらそれを知らないわけではなかつたが、妙に氣がいらいらして億劫だつたし、太吉の眞似をするのも癪な氣がして知らん顏してゐた。
果然、ものゝ五分とたゝないうちに、太吉のテジがグンと引かれた。それを巧みにさばいて、見るまに十二三貫目のやつを釣りあげると、鏑一もさすがに慌てゝ餌をつけかへた。
こんどは、二人同時に食ひついた。鏑一は、どうだと云はんばかりに得意になつて繩をしなへた。ところが、しなへ方がまづくて、魚を怒らしてしまつたらしく、百ピロも百三十ピロもグングン持つていかれた上、やつとたぐりよせる段になつてからも、今に引くか引くかといふためらひが魚に傳はつて、またしてもグーツと引かれだした。大骨を折つてやつと船まで寄せたときには、太吉はもうサツサと始末して、三本目にかゝつてゐた。
鏑一は、だんだん焦つてきた。焦るとなほさらヘマをやつた。結局、鏑一がやうやく二本上げたとき、太吉は六本も釣りこんでゐた。

「えッ畜生、この糞つたれつ」

いらつた鑛一が三本目を手カギで船のなかへしよびき上げようとした時だつた。船の重心をあまり傾けすぎた拍子に、うしろ斜めから襲つてきた波に横つ腹をしたゝかに煽られ、あつと思ふまに傳馬はもんどり打つて顚覆してしまつた。

とたんに太吉は、がぶがぶッと水を呑んだ。苦しまぎれに浮上らうとしたが、下半身に何かギッチリ卷きついて、身動きができぬ。手をやると本縄だ。もがいても、もがいても、どうしても取れぬ。一瞬、あゝ駄目だと思つた。もう一度力一ぱいもがくと、不思議にもスッポリと取れた。ゴム紐の猿股が縄と一しよにずるりとぬげたのだつた。全く瞬間の出來事である。

やつと水の中から浮上ると、あたりは眞つ暗だ。おやと思つて息を吸ふと、息はできる。手を上げて撫でると、傳馬の中らしい。かぶさつてゐるのだ。とつさに水にもぐつて外へ出ると、あわてゝ傳馬の上に匐ひあがつた。

ふと見ると、艙の方に日出男がつかまつて、水にひたつたまゝアップアップやつてゐる。

「おつ、日出坊、こ、鑛一はどうしたつ」

「知、知らねア……」

水でも呑んで苦しいか、弱々しい返事だつた。

「よしつ、おらが見てくるで、おめアは、し、しつかり、つらまつてろつ」

叫ぶと同時に、また水の中へとびこんだ。もぐつて傳馬の下へ入り、手さぐりで舳の方へにじりよつて行くと、足の先に何かヌルリとさはつた。カッパらしい。すぐさまもぐつて、引上げようとしたが上らない。からだに手をやると、やつぱり縄がからみついてゐる。とつさに太吉は、二兩手でバリバリッとカッパをひき裂いた。やつと縄がはづれて、鑛一のからだが浮んできた。

「鑛ちやん、鑛ちやんつ、しつかりしろつ」

左手に鑛一を抱き、右手で傳馬のふちにつかまりながら、聲かぎり叫んだが、鑛一はウウウとかすかに唸つただけで、すぐぐつたりと沈みかゝる。

あわてゝひき起さうとしたが、あひにく右手の指先がないので、傳馬につかまつた手に力が入らない。ずるずると辷り落ちる。醜く丸まつた指の傷あとから、血が噴きだしてきた。せつかく手ごたへのある所にしがみついたと思ふとこんどは波にあふられてふり落された。何度もそれを

くり返してゐるうちにさすがの太吉も、だんだん力が弱つてきた。苦しくてたまらぬ。泣きだしたくなつた。

左手を離せば、自分は助かる。離さうか……その瞬間、ふいつとヒサエの顔が闇の中に浮んだ。悲しげな顔だつた。太吉は胸がはり裂けさうだつた。——だめだ、鑛一を殺しちやなんねえぞ、ヒサちやん、きつと鑛一を助けてやるぞ……痛ましい泣笑ひの表情が、一瞬彼の顔をかすめた。彼はずり落ちた右手をしつかりと鑛一の脇の下にあてがひ、兩手で鑛一のからだを傳馬のへりへ抱きあげるやうにした。その重みで、太吉のからだは、ズブズブと耳まで水にもぐつてしまつた。必死に立泳ぎしながら、口を空にむけて息を吸ひこむと、その口へドツと波がなだれこんできた。

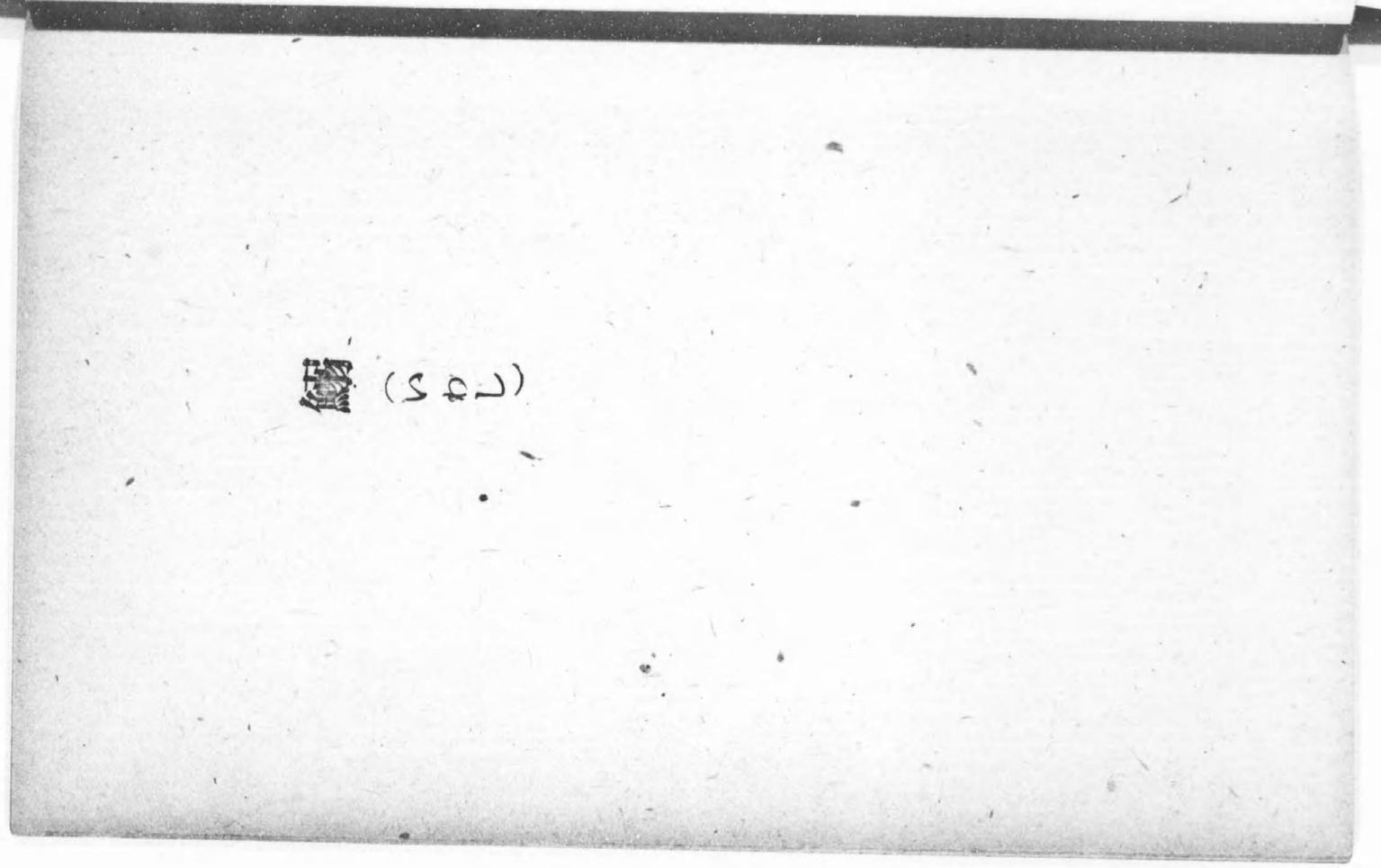
（あゝもうだめだ……おれは死ぬんだ……鑛一が助かつて、ヒサちやんが幸福になりや、それでえゝだ……）

兩手の力が、しだいに抜けてきた。極度の息苦しさが、急に變な快よさに變らうとした。その瞬間、彼の網膜にパツと大寫しに迫つてきたのは、母の面影だつた。老いやつれて、唯一人家を

守る母のすがただつた。夫を海で亡くしながら、ふたゝび一人息子をけなげに海へ送りだす母のたましひだつた。その刹那、幼いときから母に叩きこまれた父祖傳來の漁師魂が、風波に抗して逞ましく生きぬいてきた鄕土の魂が、猛然と五體のすみずみから衝き上つてきた。——さうだ、おれも生きなきやならぬ。このまゝ死んでなるものか。生きて、もつともつと働くんだ……

「母ちやん！」

半分水の中で、しぼるやうに叫ぶと、彼はとつさに自分の鉢卷をはづして、片端に鑛一の手を結びつけ、片端をわが齒に嚙みしばりながら、崖をよぢ上る手負ひの猛獸のやうに、滑り滑り、傳馬の胴つ腹へ匐ひあがつて行つた。



弱き魚　鰯よ
汝もいまや強力な兵器だ。

一

組合主事の山根が歸つてしまふと、猪之助はもう寸時もじつとしてゐられないやうに夜具をはねのけ、南むきの縁がはへとび出した。今までガラス戸ごしに眞つかふから射しこんでゐた冬の陽ざしも、いつか弱々しく戸ぶくろのすみに片よつて、沖のはうにはあかね色のうろこ雲さへ浮かんでゐた。

四五日腹ぐあひがわるくて休んでゐた眼に、やにはにパッと映しだされたのは、すぐ鼻さきの漁港にむれてゐる鷗の大群だつた。どこかの揚操船が入港したらしく、それを追つて右往左往まんじともゑと亂舞するその下には、二本半島堤式に突きでた防波堤の上にも、こぼれ落ちるばかりの鷗がぎつしりとまつてゐた。

クークー、クルルル、カオーカオーと、晴れやかな舞ひ姿には似もやらぬ不氣味な啼聲をあげながら、やがて水揚げされる鰯のおこぼれを待ちこがれてゐるそのざはめきは、いつものことながら今日は殊さらなまなましく眼にうつるのだつた。

猪之助はガラス戸にしがみついたまゝ、この六十年來見なれた鄕土の姿を、食ひいるやうに眺めてゐた。いや、眺めてゐたといふよりも、眺め入ることによつて、渦まく思念をこらしてゐたのである。

――今年からは必ず舊の正月二日になまきりをやるやうにしたい。この時局に一週間も十日も全村の船が休むといふことは、食糧增産の上からも大問題だし、それに迷信打破の意味からも今年はぜひ二日に船を出してもらひたい、たつたいま市役所からさう云つて來たんだが……と云つて、當惑げに相談に來た山根の言葉が、頭のなかをキリキリのたうち廻つてゐるのだ。

戸數わづか七百たらずの小さな漁村だが、村生えぬきの漁師でもあり、今ではこの界隈切つての大親分として、五百の漁業者の代表者でもある猪之助としては、これはまことに容易ならぬ重大問題である。

自分ひとりだけのことなら、もちろん肚はきまつてゐる。有無を云はせず二日に船を出しさへすればいゝ。いや、むしろ出せるものなら出したくて毎年ウヅウヅしてゐたのだ。殊に支那事變以來、發動機用重油の消費規正がだんだんきびしくなり、さらに大東亞戰爭となつて、二十數統からあつた揚操船も約半分に統合され、その他、人的物的のさまざまの條件のため、漁獲高もグツと落ちてゐる現在としては、正月だからといつて昔どほり前祝ひのドテラをひつかけ、酒をくらつて何日も何日も遊んでゐる時ではないのだ。そんなことは分りきつてゐる。

だが――問題は、可愛い船方とその家族だ。彼らのことを考へるとき、猪之助はどうにも動きのとれぬしがらみにぶつかるのである。それほど船方は「なまきり」をきらつてゐる。いや、船方自身はまだいゝとしても家族の者たちが泣いていやがるのだ。くじに當つてやむなく「なまきり」をやつたその一年間といふものは、その乘組員の家族たちは夜の目も眠れぬほどの不安と心勞にとりつかれる。その氣分が船方にも反映して、その一年はなんとなく漁にも身が入らないのだ。漁熱心では昔から村一番の猪之助でさへ、口にこそ出さね、心のなかでは一年中なんともいへぬ暗い影をはらひきれぬのである。

このなまきり――普通なら目出たいはずの正月の初出漁が、なぜこんなにも不吉がられるのであらうか。そこには何十年何百年の昔から語りつたへられ怖れつがれてゐる牢固な迷信があるのだ。

大體どこの田舍でも盆や正月は舊暦であるが、この村でも舊の大晦日には一年の出漁を大仕舞ひにして、正月の六日まで休み、たいてい七日に初出漁をやる。ところが、そのときまつさきに港を出た船は、その一年間のうちにきまつて何かの凶事がある、といふのである。大じけにあつて難破するとか、暗礁にのりあげて大破するとか、さもなければ一年中不漁つゞきで家がつぶれるとか、とにかく必ず何か惡い目にあふと、かたく信じられてゐるのだ。

どうしてこんな奇怪な迷信が起きてきたか、それは誰もはつきりとは知らない。だが、土地の古老の言ひ傳へによると、そもそもの事の起りは海の神秘に對する人間の畏れから始まつたものではないかといふ。

だいたい漁師といふものは、その日の雲行きを見るために、午前一二時ごろ起きだして海をながめるのが慣はしだ。ふだんの日なら廣い沖のどこかに漁り火の一つや二つきらめいてゐるもの

だが、舊正月ともなればどこの村も休みで、沖へ出てゐる船など一そうもない。眞夜中の海は黑一色にシーンと靜まりかへつて、いつとき風が凪いだときなどは、波の音一つきこえず、なんともいへぬ森嚴凄愴な感にうたれ、氣のあらい漁師でさへ、思はずゾツとそゝけだつといふ。この海の神秘、大自然の尊嚴をおし切つて、おぞましい人間の力でその年の處女海を犯すものは、海神の憤りにふれてその祟りをうけねばならぬ、うける筈だらうぢやねえか……といふ古老の言葉が、次第に恐怖觀念となり、つひに頑迷な信仰とまで發展したものらしい。

のみならず、地圖を見てもわかるとほり、右に九十九里濱の激浪、左に鹿島灘の荒潮をひかへて、するどく太平洋につきさゝり、その突端から大利根の濁流を奔出するこの犬吠岬界隈が、やこしい潮流にかこまれた難所である上に、利根の河口近くは岩礁が多く、砂洲が出つぱつてをり、ことに舊正月ごろは東北風がはげしく、ものすごい怒濤を立たせるので、設備のわるい昔の手こぎ舟には、特に非常な危險があつたのである。現に、利根川河口の一ノ島、二ノ島あたりには、「てんでんしのぎ」といつて、舟が顚覆して親子親族がおぼれてもお互のことをかまつてはをれず、てんでんにしのがなければ助からぬといふ難場があり、今までにも何そうの鰯舟がこゝ

で遭難したかわからぬとさへ云はれてゐる。

そんな有形無形の原因から、しだいに正月の先發出漁にたいする危懼の念が嵩じてきて、明治初年からなまきり（生切り？）と呼んで忌避する風習がおきてきたものらしい。

しかも、板子一枚に命を托す荒仕事だけに、漁師たちには案外えんぎかつぎが多く、舊正月の三日、四日、六日、八日などは日がわるいといつて、なまきりでなくても出漁するのをいやがる、だから、松の内だけはまあ休んで七日に初出漁といふことになるわけだが、誰しもなまきりは怖いので、いまに誰か出るだらう出るだらうと、おたがひに睨みつこしてゐる。

八日、十日は日がよくないから、九日に誰も出なければ、十一日になり、やがて十五日になつてしまふ。誰か一人出れば、あとはみんなつゞいてサツと出るのだが、まづ先頭を切るものがないと、何十そうもの船がいつまでも船敷場に釘づけになつてしまふ。二十日も一と月も出なかつたといふやうなことも、昔から珍らしくはないのである。

これではならぬといふので、明治四十年ごろから、舊の年末に船主が全部集つて、くじびきをすること となつた。くじに當つたものは、いやでもおうでもなまきりをやらねばならぬといふこ

とがきめられ、その慰藉激勵の意味で金百圓也を村の漁業組合から出すことにした。これが現在でも行はれてゐるのである。

ところが、その結果はかへつて漁師たちに、やつぱりなまきりは悪いんだなといふ觀念をもたせ、その迷信をいよいよ濃厚なものとしてしまつた。くじに當つても、なんだ、かだと、言を左右にして出漁をのばすものも出てきた。ことに最近では、延縄で釣る十トン前後の鯛船が四五十艘にもふえ、この方でも別にくじびきをしてなまきりを出すことになつたゝめ、揚操と鯛と兩方の當り船が、おたがひに相手が先に出るのを待ちあひ、自分のはうが少しでもおそく出れば、なまきりの難をのがれるといふやうな虫のいゝ考へをもつやうになつたので、なほさら初出漁がおくれるといふ狀況になつてしまつた。

かうして、疑心はいよいよ暗鬼を生み、暗鬼はますます凄まじい形相をあらはしてきた。その年のなまきり船は、その一年間村中の注目の的になる。ちよつと何事かあると、例へば魚群に網を切られたとか、船を陸揚げするときワイヤが切れて船頭が大けがをしたとか、それほどでなくても、船方の一人が食物にあたつて下痢をしたといふやうなつまらぬことがあつてさへ、それを

ものものしく取上げて、あゝあれはなまきり船だから……といふやうに結論づけてしまふのだ。はたの目もさうだから、當の船方たちとなると、なほさらビクビクもので、いまに何かありはしないかしないかと、一年中きんたまが吊りあがつてゐる。そのあげく、鹿島灘で火の玉がとんでゐるのを見たの、亡靈が出てきてアカ柄杓をかせ〳〵と云はれ、水をかけられないやうに底のぬけた柄杓を海に投げてあやふく逃げかへつたのと、さまざまな怪談が生れるのだ。ことに、なまきり船に乘つた船方の誰もが口をそろへて云ふことは、見たこともない三本マストの大船が闇のなかをものすごい勢ひで突つぱしつてきて、こつちの船にぶつかりさうになり、あわてゝ舵をまげるとその船は煙のやうに消えてしまつたが、おかげで自分の船は淺瀬にのり上げてひどい目にあつた、といふ話である。

「やつぱし、なまきりのせゐだつぺ……」

と、漁師たちは岩のやうな顏をひきつらせて溜息をつくのである。

このくらゐのことで濟んでくれゝばまだいゝ方で、長い年月にはもつと悲慘な遭難事件が數へきれぬほどあつた。

現に、猪之助の持船でも、十三年前には大縄船（まぐろ延縄）が舊正八日の忌日に初出漁したまゝ、船も人も行方不明になつてしまつたし、六年前には、その年の正月になまきりをやつた揚操船の一艘が、十一月の末になつて颱風のため那珂湊沖で遭難し、二十七名の乘組員中十三名が溺死、そのなかには猪之助の長男右近も入つてゐたのである。

そのとき、猪之助は船長として右船に乘り、右近は副船長として左船に乘つてゐたが、右船だけが辛うじて顚覆をまぬかれたのであつた。親父おとらぬ出來物といはれた右近の死が、猪之助にどんな衝擊をあたへたかは察するにかたくないが、彼はそのとき、吾子のことについては一言も云はなかつた。それよりも、十二人の子飼ひの船方を死なせた傷心のため、たゞさへ無口な彼が一そうものを云はなくなり、鬼瓦のやうな顏に涙をためて遺族の家を一軒一軒弔問してまはり、莫大な慰靈金を贈つた。それのみか、三年間は故人の配當額の半分づつを、その後は二分五厘づつを遺族にあたへて面倒をみてゐたのである。

現實にかうしたなまきりの慘禍を經驗してゐるだけに、さすが太つぱらでせいしよ（精勵家）の彼も、この迷信だけはどうにもならないのだ。

自分でかうと思つたら、身體を張つても必ずやりぬく、怖いものなしの彼が、正月ともなれば、沖にいさむ魚群を指をくはへて眺めながら、何日も何日も船を干してゐなければならないのだ。

彼はそれが口惜しくて殘念でならなかつた。この五十年間、どんな難場をも乘つ切り、どんな荒潮をも組みひしいで、何千萬貫といふ鰯や鰹を海から稼ぎとつてきた彼が、事もあらうに、こんな奇怪な迷信のためにジタバタ後ずさりしなければならぬとは、一體なんたることだ。

「くそ、そつたらことあるけえ、ばかつくせえ！」

彼は今までに何度もかうした悲痛な叫びをあげて、大自然の脅威に反抗し挑みかゝらうとしたのであるが、そのたびに、可愛い船方や哀れな遺族たちの姿を思ふと、その決意もたちまちグニヤグニヤとくづをれてしまふのであつた。

いま、彼はわが家のガラス戸から、この因緣淺からぬ故郷の海をねめつけてゐる。

額ぶちにはめられた白晝の海は、至極のんびりとして、いつもながらの愛すべき顏つきをしてゐるが、今日は殊さらその底に、何やら不逞な敵意がかくれてゐるやうな氣がしてならぬ。彼は

そのとき、大鮫みたいなアメリカ潜水艦の姿を、チラと思ひうかべた。

大東亞戰爭がはじまつて今日でちやうど二ケ月目だから、そこらに敵の潜水艦がうようよしてゐるかも知れぬ。あとにたゞ一人殘つた次男の左近が海軍に入つて潜水艦に乘組んでゐるので、潜水艦にたいしては特に關心をもつてゐる彼である。だが、色の生つちろい碧い眼の人間どもが乘つてゐる潜水艦など、そんなものは彼にとつて物の數ではない。

そんなものよりも、もつともつと凄まじい執念無類の敵性が、この海のどこかに潜んでゐるやうな氣がする。そいつが吾子をうばひ、たくさんの部下を殺し、なほもあきたらず貪慾な贄をねらつてゐるのだ。そいつに、このおれも負かされ、おさへつけられてゐるのだ。

それが海神だといふのか。なんの、そんなことをする奴が、なんで神樣なものか。惡鬼だ。魔ものだ。魔ものをこのまゝにしておいてなるか。何とかしてそいつを取つちめて、みんなの仇をとつてくれたい。けふはもう舊の十二月二十六日だ。正月二日まで、あと四五日しかない。二三日うちには組合事務所でくじびきをやると山根も云つてゐた。ぐづぐづしてはをられんぞ、今度こそ、何とかして、何とかしてくれねばならぬ……。

猪之助は、齒ぐきまで潮やけした分厚い唇をグツと食ひしばり、鷹のやうにするどい金壺眼(かなつぼまなこ)をらんらんと光らせて、しばらくは、じつと沖のはうをにらみすゑてゐた。赤黑い胸毛をのぞかせたドテラの襟が、大きく、荒々しく波うつてゐた。

が……ふと目をおとして防波堤の上をながめ、そこにつくねんとならんでゐるチヤラ鷗(子鷗)のしよんぼりした姿に氣がつくと、もういけなかつた。なまきりで死なせた船方の小さな遺族たちの姿にそれが見えて、彼はおもはずガクツと首をたれ、吼えるやうな吐息をもらしながら、逃げるやうにあたふたと寢床へもぐりこんでしまつた。

二

この村の歷史を語るには、猪之助一家の歷史を語らねばならぬ。

今でこそこの村は、大銚子市の一部に併呑され、漁獲物の水揚げも大半銚子港にとられてしまつて、わづかに名もなき一漁村として存在するにすぎないが、從來日本一を誇つたこの附近の鰯漁業のそもそもの元祖は、この村だつたのである。そして、今までに何度もつぶれかゝつたその

鰯漁業を今日の隆盛にみちびいたものこそ、ほかならぬ猪之助一家なのである。

けれどもこの村に初めて漁業をやりだしたのは、彼らの先祖ではなく、意外にも紀州の人間だつた。今からおよそ三百年前、ちやうど三代將軍家光の鎖國政策がはじまつた直後のことで、例の紀文大盡もさうであるが、進取的な紀州人は、鎖國に反撥するやうに盛んに本土沿岸の海上をあばれまはつたものだ。そのころ紀州有田郡廣村の崎山次郎右衛門といふ漁師が、廣村からはるばる浦つゞきを出漁してきて、とゞ明暦二年、この浦の豐漁に着眼し、八手網といふ方形の敷網や地引網をつかつて鰯の大漁に成功したといふことが口碑につたはつてゐるが、それ以來、紀州攝州あたりの漁師がぞくぞくと移住し、この界隈の漁業權を一手に掌握して、豪勢な成金風を吹かしたものである。むかし高上村と呼ばれたこの地方一帶の土着民たちは、生活が樂だつたのか、阿呆だつたのか、それまでこんな海上の寶庫には一さい手をださず、農業だけを後生大事にまもつてをり、紀州の漁師に宿や海岸をかして、その成金ぶりを指をくはへてながめてゐた。たゞ、土地は海べりだけで上の方は貸せぬ、また海べりにも家は建てさせぬ、といふ約定をしたことが、あとで大きな物をいふことになつたのであるが……、

さて、紀州人は委細かまはず海岸の船敷場に鰯を焚く釜口をいくつもこしらへて、油や肥料を無盡藏に生産する一方、荒海から舟をまもるために後ろの鳩山から一個二三百貫もある大石をうんとこさ切りだして、龜腹にまるく防波堤をつくりあげた。現在あるのとは形もちがつて、中に一本おいた島堤半島堤混用式の三本堤で、やはり紀州人の築いた紀州勝浦のものとそつくり同じ形の防波堤だつた。

ところが、永いあひだ眠りこけてゐた高上村民も、だんだん目さめてきた。

このまゝで行つたら、故郷の海も土地もしまひには全部他國者にとられてしまつて、自分らは永久にその勢力下に屈服しなければならぬ。これは何としても自分らの手で漁業をやり、故郷をまもらねばならん。さう考へた農家の次男坊らは鍬をすてゝぞくぞくと海へのりだしてきた。

しかし、漁にかけては海千山千の紀州人には、敵すべくもない。おまけに、村一ばんの磯を防波堤で占領されてゐて、その使用ができないため、漁船の出入からして不自由である。まづ何とかして、この防波堤を村に取返さねばならぬと、明治初年になつて訴訟を起した。そのころはすでにその防波堤が築かれてから百數十年もたつてをり、それについて確たる記録も殘つてゐなか

つたので、「この波止場は村で作つたものであるから村に返せ」といふ訴へを起したのである。

その裁判は、どういふ關係か茨城縣の縣廳で行はれたさうだが、紀州側があくまで自分らが作つたものであるといろいろな證據をあげて主張したので、高上側はしだいに不利になつてきた。

郷土防衛に躍起の村民は、そこで苦肉の一計を案じ、暗夜ひそかに屈強の若者數名を海底にもぐらせて、防波堤の石の數をかぞへさせたのである。そして、次の裁判のとき、相手方にたいして、

「たしかにお前らが作つたものなら、沈めた石の數が分つてゐるだらう。東でいくつ、西でいくつ、中でいくつ石があるか、今この場で云つてみろ」

と、啖呵を切つた。

これにはさすがの紀州人も應答に窮して、結句、大岡もどきのこの裁判もつひに村民側の勝訴に歸したが、そのとき海にもぐつて大石を勘定した壯漢の一人こそ、ほかならぬ猪之助の父卯八だつたのである。

このときから、地元漁師が紀州人に取つて代つて村の漁業を支配するやうになつたのは云ふまでもないが、貧乏な卯八は、網船三ばいをつかふ八手網など手に入れやうもなく、やつと「かもゐ舟」といふ舳(へさし)のない小舟を房州から持つてきて、そのころ漸く十三四歳になつた長男猪之助と二人、ほそぼそと雜魚の小釣りなどをやつて暮してゐた。

だが、自らすゝんで海底の石勘定をやるだけあつて、剛毅熱血、尋常一樣の漁師ではなかつた。その血がそつくり伜につたはつて、猪之助も小わつぱながらどこか鋭いところがあり、親子ふたり虎視眈々と機會をねらつてゐた。

そのうちに鰯の漁撈法もしだいに進歩して、明治三十年ごろから、巾着網の一種揚操網(ひきあみ)がさかんになり、漁獲高も一だんと増して、いはゆる紀州式の網旦那がぞくぞくと輩出した。猪之助父子も、その將來性を見込んで、揚操船の船方として乘組み、朝から晩まで鰯を追ひまはしてゐた。

ところが、この鰯といふやつは、とれるときは唄の文句どぼり「夜ひる焚いても焚きあまる」ほど漁れて、濱一めん血のりで足のふみ場もないくらゐだが、一たん不漁となると、一定期間その漁場には全くよりつかなくなつてしまふ不思議な魚である。

この不漁期はときどき訪れたが、大正七八年ごろ襲來した大不漁は、とりわけ深刻をきはめ、

この村だけで十何軒あつた網旦那も、根こそぎ倒産してしまつた。これも「なまきり」のたゝり と、そのころは騒がれたものだが、當時すでに三十四五の働きざかりになつてゐた猪之助は、この時とばかり親分から株をもらつて、自ら船主兼船長となり他の者が海をながめて休んでゐるときでも、弟宇太吉とふたり率先して出漁し、朝漁がなくても晝あるかもしれぬ、晝なくても夕方にはきつとあるぞと、終日しつこく沖にがんばつて、あくまでも鰯に食ひさがつた。

その甲斐あつてやがてまただんだん漁がぶりかへしてきた。

これに勢をえた彼は、大正十四年、村で初めて發動機を網船にとりつけ、ポンポンと威勢よく魚群を追つかけはじめた。

それを見た他の船主たちは（これもすべて倒産した親分から株をもらつた新家だが）あんな喧ましいものをくツつけたつて、しやうがあんめえ、魚がみんな逃げちまふべえ、と笑つてゐたが、意外にも、その年彼らがやつと一萬二三千圓の漁獲高をあげたのに對し、猪之助だけは七萬圓からの漁をほこつたのである。

おどろいた彼らが、あわてゝ發動機を買ひこんだのは云ふまでもないが、そのとき猪之助はす

でにこの地方一帶の揚操網漁業の指導權をにぎり、いまや押しも押されもせぬ大親分になつてゐた。

しかし、どんなに大親分になつても、他の船主たちのやうに、ふところ手をして陸にをさまつてゐるやうな彼ではなかつた。いつでも自ら沖合（船長）となつてかむろ（望樓。魚群を見張る臺。はとばことも云ふ）に乘りこみ、縱横無盡の陣頭指揮をやる。だから、ますます成績があがる。ひと網一萬圓といふやうな大漁もめづらしくない。金は、鰯の大群のやうに唸りをあげてとびこんでくる。だが、それをかゝへこんで離さぬといふやうな守錢奴の彼でもなかつた。

たとへば一萬圓儲けた場合、ほかの連中が八千圓を自分のふところにねぢこんでしまふのに對し、彼は逆に八千圓を公共の寄附とか子分の福利とかのために投げだしてしまふ。那珂湊遭難者の遺族にたいする救恤ぶりは前に書いたが、おなじなまきりで行方不明になつた大縄船の遺族にたいしても、三千圓ポンとはふりだした。

支那事變が起きてからは、高上地區出征軍人全部に慰問品をおくつたり、戰死者遺族に御佛前をそなへたり、また軍部には何度も献金するなど、率先して銃後の赤誠を示した。しかもこれ

が、小學校さへも出ぬ、文字どほり目に一丁字のない、貧乏漁師あがりの彼が、誰にも教へられず自發的にやることである。千葉縣漁業界で「昭和の清水次郎長」と謳はれるのも、むりからぬことだ。

もつとも彼の配下には、現に銚子市會議員であり、高上漁業協同組合主事をつとめてゐる山根正之助のやうな苦學力行の人格者があり、永年彼の片腕となつて献身的に陸上の采配をふるつてきた關係もあるが、さりとて猪之助の義俠的行爲は決して山根に教はつたわけではなく、みな自分の肚からほとばしる、性情の發露にすぎなかつたのである。

しかし一方、彼にも敵はあつた。いはゆる喬木に風强しで無理もないとはいへ、その傲岸不屈な仕事ぶりと、無學からくる猜疑心とが、知らず識らず敵をつくるのである。もともと、しごく磊落大様な性格で、海上のこと以外は何もかも人まかせだつたが、そのため二度人にだまされてひどい目にあひ、それ以來すつかり疑ひぶかくなつてしまつた。彼が全幅の信頼をおいてゐるのは、たゞひとり山根正之助だけだつた。

敵にたいして、彼はあくまでも抗爭する。敵が强ければ强いだけ、彼の鬪爭心は猛獸のやうに

烟りたてられる。だが、相手が弱い、力ないもの、たとへば女子供のやうな場合には、彼もまた、鳩のやうに弱く、涙もろくなつてしまふのだ。

いま彼は、はしなくもまきおこつた「なまきり」問題によつて、この二つの對象——狂暴無類の魔性の强敵と、駄菓子もろくに買へぬ哀れな遺家族とのあひだに挾まれ、二進も三進もゆかぬ土壇場に追ひこまれてしまつたわけである。

三

もうかれこれ一時間も、猪之助はかむろの上に坐りこんだまゝだつた。

いつものとほりドテラ姿で大あぐらをかき、いくらか腦天のうすくなつたネヂ鉢卷の頭を、しづかに左右にまはしながら、じつと前方一浬あたりの海上をにらみつけてゐた。

鹿島灘の方からかなり强い東風が横なぐりに吹きつけ、波も相當なうねりを見せてゐるが、十六トンの木造船「榊丸」は、すでに色あせた船體ながら舳をピンと上げ、燒玉無水エンヂンを空たかくはずませながら、犬吠沖を一路、南東へ南東へと突つぱしつてゐた。

すぐ一二町左手には、大きさも恰好もそつくり同じい相棒の左船が、これもポツポツと煙の玉を吐いて並んでゆく。日の出ももう間近らしく、東天の朱色が一まい一まい剝ぎとられるやうに冴えてくる。すでに三浬は沖に出てゐるであらう。ふりかへると、故郷の濱も山も朝霧にうつすらと煙つて、たゞ犬吠の燈臺だけが、かすかに白く、淡彩畫のやうに浮上つてゐるばかりだ。

猪之助は、樂しかつた。六日ぶりの出漁で、きのふからのもだもだした氣持など、どこかへケシとんでしまつた。時をりチラと腦裏をかすめる「なまきり」の一件も、なにやら遠い夢のなかの出來ごとのやうで、一つの形をなして迫つてこない。飛行機のりが雲のなかへ入ると、地上の煩惱などすべて忘れさつてしまふと同じである。殊にかうして海の色あひや鷗の動靜を見張つて魚群をさがしまはるときの緊張しきつた氣持は、何ものにもかへがたい法悦境だつた。大漁滿船したときの滿足よりも、はるかに強い魅力がある。彼はそれを、頭で感ずるのではない。目で、耳で、鼻で、皮膚で、首の上にある小さなこぶでさへも感ずるのだ。

沖にとんでゐる鷗は、たゞの一羽でも、防波堤あたりに群れてゐる鷗とはわけがちがふ。鷗に一とつては同じ口腹の慾から發する行動であつても、漁師にとつては、魚群の位地を敎へてくれる

神の啓示なのだ。

鷗がゐないときは、海の色で判斷する。鰯の大群が洄游してゐるところは、さらぎと云つて雨が降つてゐるやうに海面が波だつし、或は、あたり一めん赤みばしつて、水泡がブツブツ浮きあがる。それを一浬さきからも肉眼で見わけるのだ。だが、猪之助のやうな古つはものになると、第六感といふか、眼だけではない、全身全靈で感得する。靈氣といふか、電氣といふか、そんなものが身體中からほとばしるのだ。だから、かむろに乘つて魚群を監視してゐるときの猪之助のすがたには、そのズングリとしたドテラの下に、一種神々しい力が、瑞々しい氣合が磅礴としてこもつてゐた。

「うわッ！……」

突如、猪之助は右手をダイとあげて、何か叫んだ。

聲はエンヂンのひゞきにもみ消されたが、舵とりはその手の動きだけですぐさまおもかぢ一ぱいに引いた。

船は急角度で右に旋回した。左船もそれにならつて急轉回してくる。

右前方十町ばかりのところに、魚群らしいものを發見したのだ。折からの朝暾をうけて、滿面朱をそゝいだやうな海上に、そこだけがうつすらと赤黑い縞をなしてゐる。その上の方に、鳥らしいものが點々と、ほこりのやうに動いてゐる。それが船のまともにくると、猪之助は右手をぴつこめ、兩手でかむろの框をにぎりしめたまゝ、やゝ前こゞみにクワツと眼をみひらいた。

船の前進につれて、それが次第にはつきりとなつてくる。ざらぎだ。しかも、ものすごいやつだ。鷗は五六羽しかゐないが、約二町はゞの海面が、篠つく雨にたゝかれたやうに、いちめんにさゝくれだつてゐる。

さすがの猪之助も、胸がドキついてきた。こゝ一年ほど見たことがない。彼は、めつたに動かさぬ相好をくづしてニヤリとほくそ笑んだが、一瞬、その笑ひはたちまち消えて、ふたゝびシカと目をすゑ魚群の進路と速度を十分見さだめると、こんどは左手を大きく二三度ふつた。

魚群が東の方へ動いてゆくので、その進路へ大きくまはりこんで、遠くから網をおろさねばならぬ。

船はとりかぢに急カーブした。左船もすぐあとについてくる。もちろんエンヂンはさつきから全開だ。

こんなとき、たいていの船長は昂奮しきつて、かむろの上に突つたち、狂氣のやうに喚くのだが、猪之助だけはどんな場合も立ち上つたことがない。手と顏はするどく動かしても、相變らずの大あぐらのまゝ、ドツシリと坐りこんでゐる。そこに大親分の貫祿もあり、從つて船方たちの信頼心を强め、沈着機敏の働きをさせうるのだ。

が、そのとき彼は、はるか東北の方に二艘の大あぐりが、こつちを目がめて突進してくるのを見つけた。おそらく銚子か波崎の船であらう。やはりこのざらぎを發見したらしく、全速力でのりこんでくる。

かういふ場合に、よく魚群爭奪の大喧嘩が起るのである。今までに血の雨をふらしたことが、何度あるかわからない。このまゝ魚群の進路に大まはりしてゐたら、かならず正面衝突になつてしまふ。猪之助は、とつさに肚をきめ、魚群の横つ腹から包圍する決心をした。

少しぐらゐ逃がしても仕方がない。もはや一刻の猶豫もならぬ。彼の顏は、たぎりたつ鬪志で

キリキリと痙攣した。

彼は手もとの紐を荒つぽくつゞけさまに引つぱつて、機械場へエンヂン・ストップの急信號をおくると同時に、左船に合圖して即座にもやひの態勢をとらせた。

左船のかむろに乘つた宇太吉が大きくうなづいて、兩手をかはるがはる振りまはしながら近づいてくる。兄に似てズングリムツクリの小兵だが、兄が痞せぎすで行動が直線的なのにくらべ、弟はよく肥つて、動作も曲線的だ。

「おう、やるかァ、……」

宇太吉が臺の上に突つたつて、大聲で叫んだが、あとの方は騷音で聞きとれなかつた。

左船は、停止してゐる右船の左側へ徐々に近づいて、いよいよもやひにかゝつた。兩船の船頭たちはいきり立つて、口々に何やらをめきながら各自の持場を守つてゐる。船首に立つ竿張りと、船尾にゐる艫乘りは兩船をつなぐスプリング（舫ひの止め金）にとりついて待ちかまへる。他の船方たちは、綱をしごいてせば（兩船に分載してゐる綱の尾部を縫ひあはすこと）の用意をする。

このもやひも、こんなに風のいゝときは格別苦もないが、強風怒濤のまつ只中でやるときは、兩船がぶつかりあつて非常な危險がともなふ。老練な竿張りが、竿をあやつつて、船の激突をふせぐのだが、下手をやると海中へ落ちたり、船にはさまれたりする。命がけの荒仕事だ。そのため船の構造も、兩舷に頑丈な巨材がとりつけられ、破損をふせぐと同時に、兩船がガツチリ組合ふやうに肋骨も左右相反して造られてある。

やがて、兩船の舷がピツタリつくと、ガツチン、ガツチンと、前後のスプリングがしつかりと嚙みあはされた。

時を移さず、せばにかゝる。向ふの船はすでに四五町のところまで迫つてきた。いまや一分一秒を爭ふ時だ。

せば終了の合圖をうけると、猪之助はサツと大手をひろげ、

「やれいッ」

と、大喝した。

スプリングがはづされ、エンヂンが吼えだし、綱が投下されたのが、ほとんど同時だつた。兩

船はたがひに網をうしろへ落しながら、右と左へ全速力ですべり出した。

この臨機應變の處置に、向ふの船はすでに時おそしと觀念したか、それ以上つつこんで來ず、突然急停船してもやひをはじめた。魚群の進路が自分らの方向にあると見て、いくらかでもおこぼれを拾はうと考へなほしたらしい。

それを尻目に、猪之助の兩船は大きく圓形をゑがいて、魚群の胴っ腹におそひかゝつた。エンチンは喘ぐやうに鳴りひゞき、船方は火花をちらさんばかりに網をぶちこんでゆく。猪之助一人じつと動かず、えぐりこむやうに船と魚のうごきを見まもつてゐる。

いつのまに集つたのか、數十羽の鷗がつぶてのやうにとびかふ下には、驚愕した鰯の大群が、逃場に迷つて、もりあがるやうに銀鱗を水面にはねかしてゐる。

猪之助の右手が又も大きく動ぐと、兩船は最後の弧をゑがいて、ふたゝび一ケ所におちあひ、こんどは反對舷のもやひをかけた。

すでに大包圍網は完成され、網の上部にとりつけてあるあば（浮子）が、美しい環狀をなして波にゆれてゐる。

舫ひ終ると同時に、兩船の卷揚機はガラガラと動きだし、網底のいわ（沈子）に通つてゐるいわづなを締めあげてゆく。

およそ十分で締括がをはつた。これでもう魚群はどこへも逃れられぬ。戰ひの峠は、すでに過ぎた。あとは次回の旋網に都合のいゝやうに整備しながら、悠々と網をあげてゆけばいゝのだ。

船方たちは、ほつとして腰をのばし、網のなかにものすごい渦をまいてゐる鰯の大群をながめては、浮ずつた歡聲をあげてゐる。猪之助もウーンと伸びをして立上つた。さつきからのはげしい緊張がとけて、急に小便がしたくなつたのである。

ところが、立上つたとたん、足がしびれてゐたのか、四五日の臥床で身體が弱つてゐたのか、思はずフラフラとよろめいたと思ふと、船の動搖も手つだつて、高さ五六尺のかむろの上から、まつさかさまに海上へ顚落してしまつた。

あつと、船方たちは息をのんだ。愕いたのと、をかしかつたのと、兩方である。猪之助且那が船から落ちるなんて、猿が木から落ちるよりも珍らしい。生れて初めてのことだ。思はず笑ひださうとして、あわてゝ口をつぐむと、二三人の船方がバラバラと舷側へかけよつた。

どうせ鰯でも逃げられない網のなかへ落ちたのだし、年はとつても猪之助旦那のことなら溺れる氣づかひはないと、みんな安心しきつてゐるのだ。たゞ、さぞ冷たからうといふやうに、氣の毒だけに下をのぞいてみた。

「ワツハツハハハ……」

突然、下から割れるやうな笑ひ聲が起つた。一度水中にもぐつた猪之助は、鰯の渦のなかをかきわけるやうにしてポツコリ水面に浮かびあがると、まづ眞つ先に河馬みたいに笑ひだしたのである。

自分ながら何ともをかしくて朗らかでたまらない。冷たいのやら息苦しいのは少しも感ぜず、腹の底から何ともいへぬ笑ひがこみ上げてくるのだ。手の先や首根つ子のあたりにヌラリとまつはつた鰯の肌ざはりさへもが、嬉しいやうな、くすぐつたいやうな氣がしてならぬ。まるで、鰯に胴上げされてゐるやうな感じだつた。

「ハツハツハ、こりやどうぢや、えれえこつちや、ワツハツハツハ……」

上から投げおろされた綱に兩手をつかまると、彼はなほも潮水にむせかへりながら氣味わるいほどの大聲をあげて笑ひこけてゐた。

四

村の漁業協同組合事務所は、船敷場のすぐ眞上に建つてゐた。

村全體が三十度ぐらゐの傾斜地に段々になつて作られてゐるので、どんなに低い見すぼらしい漁師の家でも、見晴らしだけはいゝのだが、ことにこの事務所の二階は、前に何のさへぎるものもなく、船敷場から沖の方まで一と目に見わたせた。

その二十疊もある明るい大座敷に事務卓をすゑて、主事の山根はじめ、若い歌人の柏崎源三や、前に女教員をつとめた未亡人の林田やえ子などといふ書記連が、事務をとつてゐるのであるが、よその大きな組合事務所に見られるやうなお役所風の鹿爪らしさはみぢんもなく、毎日ドテラ姿の船主や、仕事着のまゝの船頭たちが集つてきて、日向ぼつこしたり談笑したりするやうな、いかにも田舎の純漁村らしい、のんびりとした雰圍氣がいつも溢れてゐるのだつた。

だが、今夜は――まるつきり樣子がちがつてゐた。テーブルや椅子があつてもまだ廣々として

ゐる畳の上に、大火鉢を三つおいて、そのまはりに二十人からのあぐりと鯛船の船主たちが坐りこんでゐたが、誰も彼も小聲でボソボソと話しあつてゐるか、或はだまりこくつてゐるかで、いつものやうに大口あいて笑ふ者など一人もなかつた。

みんな、これから行はれるなまきりのくじびきに對して、自分があたりはしないかといふ不安を感じてゐるのは云ふまでもないが、さうでなくても、なまきりに關聯した遭難談や思ひ出話が出てきて、氣がめいる一方なのである。こんないやな寄合は、さつさと切上げたいと、誰も彼も考へてゐるのだ。けれど、もう一人來るはずのやま治といふあぐりの船主がまだ見えないので、たつたいま使ひを出したところだつた。

一ばん上座には、めづらしく猪之助が坐つてゐた。やはり、だまりこんでゐた。隣席にゐる組合長の長谷源七や、親しい山根正之助などが何かと話しかけても、唯うむうむと、いくらか出つ歯の黄ろい歯をみせてうなづくだけで、一口も口をきかなかつた。

以前組合長を八年もつとめてゐたころの彼は、しよつちゆうこゝへ出張つてゐたが、最近ではめつたに顔を出すこともなかつた、ことにこのくじびきのときは、きまつて弟の宇太吉か沖合の

喜三郎を代理によこさせたものだが、今日はめづらしく大將自身出馬におよんだので、いつも彼に一もくおいてゐる他の船主たちは多少氣おされてゐる氣味もあつた。猪之助が自分で出てくるところを見ると、こりや今夜は何かあるわいと、誰も彼もそんな豫感がして、よけい重苦しい氣分がたゞよつてゐたのである。

ところが、一番だまりこくつてゐる當の猪之助が、じつは一番晴々とした氣持だつたのである。彼の肚は、もうはつきりと決つてゐた。一昨日、沖で海中へ顚落したときから、不思議にも彼は一さいの迷ひを解脱したのであつた。

あのとき、腹の底からこみ上げてきた笑ひこそ、今にして思へば、その解脱の單純極まる表現だつたかも知れぬ。あの、顚落した刹那のおどろきは彼の錆びついた人生觀をくつがへす一つのよすがだつたかも知れぬし、またあの冷い水は、彼の割りきれぬ煩惱を洗ひきよめるみそぎでもあつたらう。實際不思議といへば不思議、當然といへば當然のことであるが、水にもぐつた瞬間、彼はなんとも名狀しがたい感情で、出征中の次男の水兵服姿をチラツと思ひうかべ、あツと叫ぶかはりに「左近！」とその名を呼んだのであつた。

それはごく短い時間だつたから、そのときにはその感動がどういふものであるかよく分らなかつたが、やがて水から匐ひあがつて、ぬれ鼠のまゝ網揚の命令を下してから船室へおり、冷えきつた體を手拭でゴシゴシこすつてゐるうちに、それがはつきりと形をあらはしてきたのである。

一口に云へば、彼は潜水艦にのつて働いてゐる吾子を通じて、のるかそるかの大戰爭をやつてゐる祖國のすがたを、毛穴から骨の髓まで、きびしく感じ取つたのである。こんどの戰爭については、新聞も讀めずラジオもあまり聽かない彼は、今までたゞ人づてに聞き知るくらゐなものだつたが、水中で思ひだした吾子の姿によつて、ゆくりなくも戰爭の勞苦、すさまじさを、身にしみて感じ、國家の運命がいかに國民一人一人の動きと緊密に結びついてゐるかといふことを、初めてしたゝかに感得したのである。

彼は、からだを清めながら、その感動に身ぶるひした。

(あゝ、日本は今こんなに命がけの戰爭をやつてるんだ。おれたちもぐづぐづしちやをれんぞ)

さう思つたとき、彼の耳をつきさすやうにひゞいてきたのは、エンヤ、ヨイト、エンヤ、ヨイトと、甲板の上で子分たちが叫びかはす勇壯な揚網の掛聲であつた。指がちぎれ、胸も腰もくだ

けるやうな激しい勞働からしぼり出る生活の歌であつた。彼はふと、たつた今さはつた鰯の感觸を思ひだして、しびれるやうに立ちすくんだ。

(おゝ、やつとる、やつとる……あれがこの五十年間、おれの商賣だつた。あの鰯のおかげで、おれは今まで生きてきた。したいざんまい、やつてきた。だが、これからは、ちつと違ふぞ。自分が生きることなんか、二の次だ。誰も彼も、自分だけの商賣ちうものはなくなつたんだ。今までが間違つてたんだ。これからは何もかも、天皇樣にお返しするんだ。大臣だらうが漁師だらうが、日本人はみんな天皇樣のため國のために働くところに、ねうちがあるんだ。生甲斐があるんだ。おれたちが今、一匹でもよけい魚をとらにやならんのは天皇樣のおんため、日本が戰爭に勝つためだ。それが、このごろの不漁はどうだ。資材不足のせゐだといふのか。そんな逃口上はゆるさんぞ。親父の時代を見ろ。櫓こぎでも濱を血糊にするほど獲つたぢやねえか。それに鰯は、食ひ料や肥しにするばかりぢやねえんだ。油になり火藥になり、鐵や石油にまけぬ兵器なんだ。あいつらは何も知らずに、昔どほりの氣持で網をたぐつてゐるが、やつらもおれも、第一線の兵隊にまけぬ大事な戰爭をやつてるんだ。いのちや財產がをしくて、戰爭ができるか。

それを何ごとだ。下らねえ迷信や、ちつぽけな手前だけの氣持にしばられて、何日も何日も漁を休むとは、かういふ時になつて、まだあんな迷信をすてきれんなんて、村の恥だ、日本人の恥だ。いや、誰よりもこの猪之助の恥だ。ようし、もう文句はいらねえ、やつたるぞ、やつたるぞ……)

その決意を、彼はかうした言葉で考へたのでは勿論ない。からだぢゆうで、五臟六腑で感じたのだ。感じながら、ギリギリ齒を鳴らし、地團駄をふみ、はては、いま大笑ひしたその顏から、ボロボロ大粒の涙をこぼして泣きだしたのであつた。

——だが、彼はこの決意を、まだ誰にも話さなかつた。今年八十三歳でなほ矍鑠としてゐる母にも、しつかり者の女房にも、腹心の山根にさへも、一言も洩らしてなかつた。一たん決意してしまへば、それほどの大ごとではない。たゞ、今夜の寄合で船主たちによく話し、あしたの大晦日に網をしまふとき、船方衆にとくと云ひふくめて納得させればいゝ……さう考へてゐたのである。

「ぢやあ、そろそろ始めてもらひませうかな……」

やがて、やま治の親方が最後にかけつけると、猪之助についで人望のある組合長の長谷源七が、好々爺らしい顏を不細工にことばらせて、主事の山根をかへりみた。山根は、茹でたてのたらばがにみたいな幅廣の赭ら顏をうなづかせながら、すひかけの朝日を火鉢の灰につきさし、ゐずまひを正した。もう猪之助とおなじ六十の聲をきゝながら、いつも酒をのんだやうに眞赤な顏をしてゐるので、一見大酒飲みに見えるが、實は一滴も口にしない謹嚴溫厚の人物で、村では一ばんの物識りだつた。

「えー、では、組合長に代りまして、わしから一言申上げます。今年はどうも皆さん御苦勞さんでした。おつかれのところをお集りねがつて、まことにすんませんが、じつは、先日もおつたへしたとほり、來年からはぜひ正月二日から出漁してもらひたいと、市役所や、また警察の方からも云つて來とりますで、けふは一つ抽籤がてら、そのこともとつくりと御相談してえと思ひまして……」

ひどく嗄れた、しかも幅のある聲で山根がさう云ひかけると、それまでうつむいて、左手の指先で後頭部のこぶをひねくつてゐた猪之助が、突然顏をあげ、

「いゝや、いゝや、そ、そのこたゞもう、みんなわかつてるべえ。警察から云はれたなんて、恥かしいこつちや。けふの寄合は、一つこの猪之助にあづけてくんねえか」

と、口早に云つて、ニコリともせず一座を見廻した。

さてこそといふやうに、一同はしんと靜まりかへつて、猪之助を凝視した。さすがに彼もいくらか昂奮してゐるらしく、骨ばつた頰をヒクヒクひきつらせながら、ちよつと間をおいて、

「こりや、わしばつかぢやねえ、誰も彼もおんなじだと思ふが、こんなくじびきをやるやうになつたなあ、みんな船方が可愛いからだつぺ。さうでなくちやなんねえ。だが、今あ、時がちがふだ。わしらだつて、船方だつて、みんな兵隊さなつて働かなくちやなんねえ時だ、戰地の兵隊さけでよ、この戰爭は勝てるもんか。なあ、さうぢやねえか」

「そだ、そだ」

と、誰かゞ叫んだ。

猪之助は、ジロリとそつちを眺め、いつもの無口に似ず、ひどく能辯に話しつゞけた。

「そいつをなんだ、くじびきで働きぞめをやんなきやなんねえなんてよ、世間さまにお恥かしい

こつちやねえか。われさきにと出たがつて、くじびきをやるちうなら、話や分つとるがのう。ひやあ、こんなくじびきなんざ、やめつぺや。そのかはり、來年は年の功でよ、わしらの船になまきりイさしてもらふだ。いんや、みなの衆がいやなら、再來年もその來年も、わしらにさしてもらふべ。毎年まつさきに出て、みんな搔つさらつてやるだ。ハツハツハ……。昔や、いわしなんか見むきもしなかつた東京の衆もよ、今ぢやあなんだ、いわしみてえに行列して、買つてるさうぢやねえか。なあ。うんと食はしてやつぺえよ。油や火藥も、うんとこさこしれえてもらふべよ。とにかく戰爭に勝たにや、漁をしたつてはじまらねえでなあ。かつを船や、くぢら船なんざあ、ひやあとつくに遠方さ行つて、御奉公してるだぞ。それを、かうやつて村さすつこんで漁ができるなんて、もつてえねえ話だ。正月は一日やすみやいゝや。二日にや、きつと出べえよ。早く出てうんと漁る。その方が、みんなの儲けにもなるぢやねえかよ、船方にもよツく話してな、配當をうんとはずんでやりや、どんなに喜ぶか知んねえぞ。なあ、やらうぢやえねか。二日に乘初式がすんだら、おらすぐ出るでな。あとは頼んますよ。……さあ、これで話はきまつたんだ。ひやあ何も辯はいらねえ。はえゝとこ歸つて寢つぺよ。おらあ、おとつひ海にはまつてなあ、なんだ

か腰つ骨が冷えてなんねえだで、こんでお先にごめんしますだよ」

云ひたいだけ云つてしまふと、猪之助はサツと立ち上つて、もう廊下へ出て行つた。その小柄なうしろ姿を見送りながら、一座の者はしばらく呆然と息をのんでゐた。

五

舊正二日の朝はすさまじい霧であつた。まだ明けきらぬうちから、濃い、重みのある霧が、泉のやうにモクモクと湧きあふれて、たちまち村一帶を蔽つてしまつた。

さして廣くもない船敷場には、大小幾十艘の船がギツシリとならんで、竹箒やしめ縄にかざられ、その霧のなかにシンとしづまりかへつてゐた。

一年間、夜晝たえまなく太平洋をあばれまはつた船々は、かうして大晦日のうちにすつかり洗ひ淨められ、網その他の魚具はみな倉庫へしまつて休めておくのである。今までは七草までそのまゝだつた。惡くすると十五日も二十日も甲羅干しをやつてゐた。それが、今年からは二日に動きだすといふ。その噂はもう村中にひろまつて、いつもなら寢坊な正月も、けさはもうどこの家

でも暗いうちからゴソゴソと起きだし、忙しげに朝飯の支度をしてゐた。

そのかまどの火が、あちこちにポツと赤くぼやけて見える。厚ぼつたい夜の緞帳がしづかに引上げられるにつれて、その赤もしだいに黄ろく明るんできたが、まだ磯から向ふの大舞臺は、もう一枚まつしろな霧の揚幕にかくされ、何かものものしい悲劇でもはじまりさうな情景だつた。

事實、村びとたちは、この霧と今日のなまきりとを結びつけて、早くも不吉な豫感に胸深くおのいてゐたのである。

やがて、濱が急にさわがしくなつた。ときどき、男や女の顔が、霧のなかからヌツとあらはれては消えるだけで、人數のほどはわからないが、その聲や足音では相當の數であらう。

出てくるのは漁師ばかりではない。家族や見物人もたくさんゐる。七時ごろから各船で恒例の乘初式が行はれるのだ。しかし陸上でやるそんな形式的な行事よりも、その直後、猪之助の船がなまきりをやるといふことが、村びとたちのとむねを衝いたのである。ある者ははげしい感動に目を血ばしらせ、ある者は不安げな面持でうなづきあひながら、みんな默々と船敷場の方へいそいでゆく。

鳩山の向ふから朝日が出た。ぼーつと暈をかぶつた、不氣味な太陽だつた。そのころから霧はやゝうすれてきたが、海の方はまだ水平線も見えない白一色であつた。

そのとき、村の西方、犬若の方から、西ノ濱づたひにぞろぞろと歩いてくる漁師の一帶があつた。紺地に眞赤な鯛と鯛とたから船を染めぬいた派手な大ドテラをきた男が、先頭に立つてゐた。猪之助である。彼は早朝、七十餘人の子分を引具して、村の產土神である渡海神社に參詣し、決死敢闘を誓つてきたのだ。すでに大晦日の夜は子分一同を自宅にあつめて、なまきり決行の旨を申しふくめ、徹宵大盤振舞をやつた。きのふの元旦には、單身成田不動と銚子觀音に參拜した。なすべきことはすべてなしつくして、いまは天空闊濶の心境だつた。

子分たちも、明るい晴々とした顏付だつた。ことに、各自出漁のいでたちにキリリと卷いた眞赤なネヂ鉢卷が、應召兵の赤だすきのやうな壯烈な心意氣を見せてゐた。

霧の中からこの一隊があらはれてくると、海岸通りにむれてゐた群集はサツと道をあけ、いつも見なれた顏ながら、何か偉いもの怖いものを見るやうにふり仰いだ。

途中、倉庫によつて、長さ四五町、深さ二十間もある揚操網を一間おきぐらゐにひつかついで

一行は、巨大な蜈のやうな行列をつくつて船藪場へなだれこんだ。

そのとき、猪之助はふと、路傍に手をひいて立つてゐる十歳と六歳ぐらゐな洟たらしの兄弟を見とがめて立止つた。二人はペコリとお辭儀をした。那珂湊遭難者の忘れがたみで、その後母も死に、猪之助がとくに面倒をみてゐる哀れな孤兒である。

「おゝ坊主、大きうなつたのう」

と、猪之助はおもはず相好をくづして、弟の頭をなでてやつたが、急に何やら胸がせまつてきた。目がキラリと光る。だが、その涙は、すでに以前のやうな弱々しい感傷ではなかつた。早く大きくなつて、おれたちのあとをついで國のために働くんだぞと、手でもにぎりしめたい積極的な感動だつた。彼はしかし、さうは云はずに、

「學校は何年になる。うむ三年か、よし、來年から船さ乘せて呉るぞ」

と、兄の肩をポンと叩いて歩きだした。

あちこちの船で乘初式がはじまつたらしく、拍手をうつ音が、パンパンと、霧の中からひゞいてきたが、群集はほとんど全部、猪之助の船をとりまいて離れなかつた。

やがてこゝでも式がはじめられた。猪之助はドテラをぬぎ、キリリとした漁裝束で船上に上ると、機械場のすぐうしろに祀つてある船靈様の前へすゝんだ。

お神酒をあげ、海からくんだ初水をそなへ、心をこめて祈願をさゝげると、後方にゐならんだ子分たちも、逞ましい面魂を伏せて、神妙に禮拜した。

こんどは揚網の型だ。網の一端を三十人ばかりの船方が圓く持ちよつて、その上に鰯になぞらへた大きな鏡餅を二つ投げ入れる。

「揚げいッ」

といふ猪之助の號令で、船方は聲をそろへて、エンヤ、ヨイトと、例の掛聲をかけ、そのたびに力一ぱい網をひつぱつて、餅を宙空高く舞はせるのだ。

他の船々からもその掛聲が聞え、無數の叫びがもつれあつて、すさまじい鯨波のやうに濱一めんにこだまする。それを十四五回くりかへしてから、最後に餅を大タモで船上にすくひ上げると、めいめい配給の冷酒を茶碗に一ぱいづつグッとあふつた。

いつもなら船上に四斗樽をかざり、大まぐろを一本吊して、飲みはうだい食ひはうだいの大ぶ

るまひをやるのだが、酒不足のこのごろではそれもできないし、それに今日はこれからすぐに出漁の用意をしなければならぬ。

たちまち卷揚小屋の發動機が、地ひゞきをたてゝ吼えだし、船底の下に何枚もの敷板がならべられ、船體にむすばれた數條のワイヤがピーンと張り、それを指揮する船頭らのけたゝましい叫び聲のうちに、右船左船、舷をそろへてスルスルと水上へすべりだした。

そのとたん、左船の船底に異様なひゞきが起り、パッと火を噴いた。群集は、おもはず息をのんだ。

少し早くすべると、船底と敷板と、堅い樫板同士のはげしい磨擦によつて火を發するので、べつにおどろくほどのことではないが、なまきりにおびえきつてゐる人々には、何もかも怖ろしく不氣味に見えるのだ。

今や左右一統のなまきり船は、悠然と神秘の處女海に浮かんでゐた。

卷揚小屋の發動機がとまると、代つて兩船のエンヂンが始動した。

右船のかむろに、猪之助がムンズと坐りこんだ。向ふむきで顔は見えぬ。その右手がサッと高

く上ると、まづ右船がしづしづと動きだし、左船がすぐ後につゞいた。

群集のあひだから深い吐息が洩れ、何やらざわめきが走つた。

そのとき、最前列に立つてゐた一人の老人が、しやがれ聲をふりしぼつて、ばんざーいと叫んだ。いつもより一そう顔を眞赤にした山根だつた。

それに和して、嵐のやうな鬨の聲が、濱一めんにまさ起つた。ひきつゞき出漁の準備をしてゐる他船の漁師たちも、悲壯な面持で手をふり聲をあげた。

兩船の船方たちもさすがに昂奮したやうに、褌一つつけぬ素つぱだかのまゝ、猿のやうに甲板上に躍り上つて、ちぎれよと兩手を振つた。だが、猪之助の小さな姿だけは振りむきもせず、防波堤の彼方の深い霧の中へ、吸ひこまれるやうに消えて行つた。

鰹漁夫

一

遠洋漁業地として有名なこの町は、いかにもそれらしく大手をひろげて太平洋に挑みかゝるやうな恰好で、海ぞひに長くのびてゐた。その首根つ子のあたり、謂はゞ山の手の方を西から東へ縫ふやうに流れる小石川と、胴つ腹にあたる海べりを南北へ一線につらぬく黒石川とが、ほゞ直角に合流しながら海へ注ぐところ——その落合一帶が築港の敷地だつた。

川とも云つて、双つながら幅十間ならずの、大都會の堀割みたいに汚ならしい流れである。殊に下町の下水を一手にしよひこむ黒石川と來たら、いつもドス黒く濁り、ギラギラ脂ぎつて、河口近いあたりにはメタン瓦斯のあぶくがブクリブクリと浮上り、古沼のやうな臭氣が一めんにたちこめてゐた。それも無理はないのだ。全町三千七百餘戸のうち、漁業者が約千戸、水産物製造乃至販賣業者が約八百戸といふ數字を見てもわかるとほり、年々數百萬貫も水揚げされる鰹や鮪その他の魚類から、それらの家々でつくられる鰹節、生節、蒲鉾、鹽辛等の煮出し汁やあらなどが、ほとんど全部この川に流れこむのである。謂はゞ、この汚濁こそこの町の生活の象徴であり、數百年にわたる歴史の集約なのだ。川が濁れば濁るほど、この町は發展する。だが、最近のやうに鰹節の製造が激減したとて、おいそれと澄んでくるやうな、そんな底の浅い汚濁ではない。

さて、この汚ならしい流れの河口に、漁船とは似てもつかぬ鈍重な感じの船が六七艘、不恰好なドン腹をメタン瓦斯にくすぐられながら、もつそりと浮んでゐた。孕み女のやうに胎のふくらんだ土運船。それより少し小型の土船。ペックリとブリストマンの口をあけた、爬蟲類みたいな浚渫船。同じ役目のバケット船。ばかでかい鐵製グレーンを据ゑたのと、木製ウキンチ裝置の小型のと、二隻の起重機船。それに、これだけは一寸小粋な白塗り黒塗りの大小二隻の曳航船——どれもこれもたゞ力自慢だけのそんな船どもが、見た目にはものものしく、しかしどこか氣がぬけたやうに、雜然と並んでゐるのだ。云ふまでもなく、すべて築港用の船舶である。漁港だといふのに、漁船など一艘も浮んでゐない。

その曳航船の一つ、白塗りの大靜丸の操舵室(ブリッチ)で、さつきから輪轉舵(ラット)に頬杖ついたまゝ、ぼんやりとバケット船の働きぶりを眺めてゐるのは、船長の杉田俠助だつた。

やぐら、のチェーンに取付けられた一個四十貫からある大バケツが三十數個、グワラグワラの喧

ましい音をたて〳〵廻りながら、次々に水中にもぐつては土砂をすくひあげ、やぐらの天邊まで來るとザザーツと大漏斗の中へぶちまける。漏斗の下には土運船がピタリと寄りそつてゐて、ふくらんだ胎の中に際限なく土砂を呑みこんでゐる。それが一ぱいになるのを待つて、曳航船で引つぱり出し、沖へすてに行くのである。機關の唸り、チェーンの軋り、土砂の落ちる響き、それらの騒音にまじつて、ときどきデツキ係や水夫の叫び聲が濱べの靜寂を破る。だが、いつものことながら、何かしら氣合が乘つてゐないのだ。

目ではそれを眺めながら、俠助は例によつて全く別のことを考へてゐた。船長といつても、小學校を出るとから鰹船に乘りこんで、三十餘年間荒潮に鍛へた漁師あがりの彼である。しかも父祖傳承の漁師魂は、五十の坂に近づいてもなほ衰へず、生涯を鰹船にさゝげつくすほどの氣慨を持つてゐた。だが、支那事變以來船舶の徵用、資材の不足、とりわけ機關用燃油の配給減は、まつたく近代化した遠洋漁業には特に致命的で、出漁回數もグツと減つてきたゝめ、勞力不足の沿岸漁業とは反對に、船に乘れぬ漁夫が多くなり、轉業問題が急にかまびすしくなつてきた。血氣の若い衆さへも、近くのS市あたりの工場へ通ふ者が、めつきり增えてきた。死ぬまで船を下りぬ

と頑張つてゐた俠助も、それを見ては默つてはをれず、去年の春妻を亡くしたのを機會に、涙をのんで自分から太平丸の船長を辭したのである。

ところが、一たん船を下りてみると、三十何年も海の上で暮してきただけに、まるで陸にあがつた河童、木から落ちた猿同然で、陸の生活がさつぱり平仄に合はぬ。その上、長期戰下の魚類不足、食糧增產の聲をきくと、骨の髓までしみこんだ漁師魂がじつとしてをれぬ。たまりかねた彼は、つひに意を決して、少しでも海に近いところ、幾らかでも町の漁業のためになる働き場所として、數人の舊部下と一しよにこの築港へとびこんだのであつた。

だが、昭和十四年から縣の補助下に町ではじめられたこの築港工事も、物資（主としてセメント）と勞力不足のため、遲々として進まなかつた。殊に大東亞戰爭勃發後は、さうした障碍もさらに加はり、しかも肝心の船や魚がそれほど入港しなくなつたので、波止場を造るといふことも

さして緊急を要しないことになり、工事もほとんど休止狀態に入つてゐたのである。

せめてこの工事がもう少し活潑に動いてゐてくれたら、彼の素朴な奉公心もいくらか滿足してゐたであらう。月給が安いとか何とか、そんなことは問題ではない。否むしろ、こんなに暇が多

くて同じ月給を頂戴しては、お上に相すまぬとさへ思ふ。たゞ、たゞ、もつと働きたいのだ。もつと「魚」をとりたいのだ。昔のやうに船が沈むくらゐ鰹や鮪を大漁して、海軍さんにも食はせ、街の店頭行列なんかもケシ飛ばしてやりたいのだ。さう思つて、たまらないやうに歯を食ひしばる。思はず地團駄をふむ。――なんのことはない、このごろの彼の夢は、寝ても醒めても戀しい荒海をかけまはつてゐるのである。尤も、これは一人俠助ばかりのことではない。船を下りた漁夫たちは誰も同じことだつたが――。

「えゝぞオ、出してくれえ！」

突然の胴間聲に、俠助はハツと夢を破られた。見ると、バケツト船の甲板で水夫長の餘井がニツと笑ひながら手を振つてゐる。二十年も彼と同じ船に乗組んで、腕きゝの船頭として鳴らした男である。俠助も手をあげて笑ひ返すと、

「前進！」

機關部へどなつた。

すでに始動してゐた六十五馬力の焼玉無水エンヂンは、ボコツ、ボコツと喘ぐやうに氣合を入

れた。見航索がピンと張る。大靜丸の舳先がグンと浮く、泥んこの土砂を腹一ぱい詰めこんだ土運船は、ものうげに動きだした。

河口を出ると、三分の一ばかり出來上つた防波堤が重複式に三本つき出て、俗に「豆腐」と呼ぶ巨大なコンクリート方塊が波しぶきを上げてゐる。その鼻先をうまく廻つて千メートルほど沖へ出ると、頃を見はからつて「ドア開け」の號令がかゝる。兩側のパーゼ（舷腹）がバツと開いて、土砂の山はまたゝくまに波に呑まれてしまつた。

そのとき、舳の方にゐたデツキ係の岩本が大聲に喚きだした。

「おう、鰹船だ、鰹船だ、鰹船が來るぞオ！」

俠助はオヤといふやうに振返つた。まさしく鰹船だ。どこの何丸か、まだ遠くてわからないが黑塗りの船體に眞紅な船名旗を數旒ひるがへして、和田岬の方から意氣揚々と入つてくる。昔なら骨の髓までしみとんだ姿で、何の變哲もないのだが、殊にこの十日ばかり一艘も入港しないので、ひどく珍らしい氣がする。若い水夫二人はもちろん、機關士の木島までデツキへととび出してきた。

「おう、來た、來た」
「久しぶりだなあ」
誰も彼も目をかゞやかし、息を呑んでゐる。
「うむ、え〻鹽梅にうなづいてやがるなあ。あの分ぢや滿船づらよ……」
俠助がうつとりしたやうに目を細めると、漢口攻略戰に右眼をなくした岩本は、片方の目をギロリとむいて、
「船脚はえ〻けが、がつがあがつてるで、まだ餌が殘つてるぞ」
と、負けん氣な聲をあげた。
「そんでも七千や八千は釣つてるら……畜生、うらやましがらせやがるなあ」
「なーに、見てろ、おら船だつて今に……」
この春除隊後、たつた一ぺん八丈島近海へ出漁したきりの岩本は、いかにも脾肉の嘆にたへぬといふやうに齒がみをし、甲板に足を摺りつけた。
船尾の貯油艙が輕くなり、船首の魚艙が重くなると、船は前のめりになつて、丁度うなづいてゐるやうな恰好になる。しかし活魚艙の餌鰮がまだ殘つてゐる場合は、前檣の斜桁を下におろさない。かういふ鰹船の習性をよく知つてゐる漁師たちは、一と目で他船の漁加減がわかるのだ。
今も、さういつた恰好で悠々と入港してきたその船は、エンヂンの音も輕く次第に近づいてきたが、全長十町に及ぶ大護岸の向ふ、和田濱の沖合にさしかゝつたとき、どうしたことか突然ピタリと停つてしまつた。
「あれ、また乘上げやがつた」
俠助はすぐ氣がついた。雨が降るとあのあたりに淺瀬ができて、それと知らぬ歸港船がよく坐礁する。大した事ではないが、自力で離礁できない場合が多いのだ。
「おゝ、『丸生』の檣右衞門ぢやねえか」
「さうだ、さうだ高草丸だ」
「だらしがねえなあ」
ふいに、何ともいへぬ緊張が船上を走つた。この町の二大船主會社として、事業上はもちろん、政黨的にも永年しのぎをけづつてきた『丸東』東海遠洋漁業株式會社と『丸生』生産組合——

俠助らの屬してゐる『丸東』にとつて『丸生』は謂はば敵會社であるが、それは大幹部のお豪がた同士の間のことで、漁師たちは漁の上でこそ張合へ、心底なんの敵意も感じてはゐなかつた。むしろ乘組員同士は、おなじ經漁師といふ點で、餘人以上に親しみをさへ持ちあつてゐた。

「おゝ、手旗をやつてるぞ。誰か話をしてみろ」

俠助の命令で、岩本がよし來たとばかり手旗をにぎつて操舵室の屋根へとび上つた。眼の仕事となるといつも眞先にとび出してゆく岩本の心事をいぢらしく思ひながら、俠助は室の片隅においたバスケットから、古ぼけた舊式の双眼鏡をとり出して眼にあてた。

「ホンセン、ザショウ、シキウ、ヤツピキタノム」

結局、さういふ信號だつた。

「よし、承知した。土運船をしまつてから、すぐ行くと返事しろ」

大靜丸は、俄かに活氣づいてきた。こんなあてどない土船運びより、どんなに張合があるかわからない。それに、やつぴき（曳航）してやれば、經を一本づつもらへる。久しぶりに剌身がたらふく食へる。いや、この場合そんなことよりも、吾家のやうな經船のそばへ行けるといふことだけでも、たまらなく嬉しいのだ。

土運船を河へ戻して、事務所の監督から許可をもらふと、大靜丸はすぐさま坐礁現場へ急行した。

木造八十五トン、いま殘つてゐる經船では一ばん大型に屬する高草丸は、百五十馬力のディーゼル・エンヂンを、シャカツ、シャカツ、シャカツと、急調子に喘がせて、必死に自力離礁を試みてゐたが、船脚がグツと入つてゐるせゐか、いつかな動かうとしなかつた。そこへ大靜丸が駈けつけると、乘員らは大喜びで、舷側の魚釣臺へ鈴なりに身體をのりだし、口々に聲をかけた。

「おゝ、御苦勞さん、御苦勞さん、申譯なし」

「どうだ、築港の方は。早えとこ頼むぞ」

「おまつちの船はどうした。まだ上架どるのか」

「お菜はどうだ。無けりや、やるぞ」

「しいらもあるぞ。早くロップ出せや」

みんな潮と陽に燒けきつて、赤鬼のやうな面魂だが、頬には人なつかしげな微笑があふれ、聲

は親しげなひゞきに彈んでゐた。

平時でさへ、歸港のときのうれしさは格別である。まして、この四月には敵の內地初空襲があり、敵潛水艦も伊豆沖あたりにまで出沒するといふ現在、その生命がけの危險を冒して大漁歸港した喜びはどんなであらう。その心の彈みが、何も云はなくても自然こつちへ傳はつてきて、俠助初め大靜丸の一同も、何か胸が彈むやうな氣持で、やたらに唾をのみこむのだつた。

そばへ寄ると、まつたく蟬が木にとまつたやうだが、十九トンのわりに馬力の大きな力自慢の大靜丸は、自信たつぷりの恰好で高草丸の曳航用ワイヤを受取り、自分の尻へしつかり結びつけた。みんな岩本が一人でやつてのけた。

その間に、田中といふ一人前の若い衆（十八歳）になつたばかりの少年水夫が、先端に砂袋をしばりつけた細いロープを高草丸の甲板へ投げこんだ。その尻をつかんで待つてゐると、砂袋の代りに鰹が五六本、いいらが一本、尾端をゆはへつけられて海中へ投げこまれた。

「そうれ、御馳走だ、お土產だア。ワッショイ、ワッショイ」

田中は大はしやぎでロープを引つぱつた。三尺あまりもある紡錘形の銀白の胴體が、波にチラ

チラ光りながら近よつてきた。

すでに、やつぴきの準備を終つた大靜丸は、ボーッと小ましやくれた汽笛を鳴らした。高草丸も野太い聲でボーと返した。

「前進（ゴーヘイ）！　全速力（ホースピー）！」

俠助が窓から手を出して合圖をすると、兩船のエンヂンは一せいに全開となつた。ジャカツ、ジャカツといふディーゼルの爆音と、ボコッ、ボコッといふ燒玉無水のひゞきが一つになつて、耳がつんぼになりさうな騷ぎだ。大靜丸は、大荷物をひつぱる馬力馬みたいに、口から泡をふき、上體をのげぞらして足掻いた。が、高草丸はビクとも動かなかつた。

「やーい、やり直しだア。後進（ゴースタン）！」

俠助はふり返つて、高草丸のブリッヂから心配げに顏をのぞかせてゐる船長にニッコリ笑つてみせた。ワイヤがたるんで、大靜丸はもう一度腰を入れた。今度はワイヤをゆるめておいて全速力で前進し、高草丸にはげしく衝擊をくれようといふのだ。

「えゝかア……ホースピー！」

大靜丸は、今度は競馬馬みたいにトットと走りだした。ワイヤが水中からもり上つてきて、見るまにピーンと張つた。一瞬、どこかでミシリッといふやうな音がしたと思ふと、高草丸の巨體はザリザリッと砂をかんで辷りだした。その拍子に、いやといふほど下顎をラットへぶつけた俠助は、同時にうしろの船から怒濤のやうにまき起つた歡聲を耳にして、顎をかゝへながら泣き笑ひした。

二

今日も、いゝ風だつた。

荒海で名高いこの界隈は、東北風が吹くと高さ二丈あまりの大護岸をこえるほどの大浪がうちよせる。そんなとき、波止場のないこの港では、漁獲物の水揚も碇泊もみな近くのS港へ行つてやらねばならぬ。これは漁業者にとつて不便であるばかりでなく、町にとつても大損害だつた。波止場さへ早くできてゐたなら、この町もとつくに日本屈指の大漁港になつてゐたであらうが、二大會社の政黨的營利的相剋は、この築港工事をも無限におくらせてしまつた。その個人主義的

資本家どもによつて食ひちらされたやうな工事を、いま船のなくなつた漁師たちが、乏しい資材わびしい氣持でおし進めてゆかねばならぬとは、なんたる皮肉であらう。

だが、漁師たちは今日も營々と働いてゐた。船へ乘れなくても、せめて海が風いでゐさへすれば機嫌がいゝのである。

朝早く起きると、お早うといふ代りに「えゝ風だぞ、早く起きてみろ」といふ。おそく起きた者は「けふはどうだ、風の工合は」と、第一番にそれをきく。永年の海上生活の習性は、どこにゐても抜けきらないのである。

「みろ、えゝ風ぢやねえか、勿體ねえなあ」

感にたへたやうに呟いて、俠助は岩本をふり返つた。けふは朝から起重機船の曳航をはじめて、もう二回捨石の「豆腐」を沖へ捨てに行つてきたのである。

「……」

機關室から出てきた岩本は、一瞬、釘づけになつたやうに立ちすくんで、青々と光る海をながめたが、たゞうなづいただけで何も云はなかつた。云はないだけに切實だつた。心のなかでは泣

いてゐるのかも知れぬ。

陸上では、あちこちでそれぞれの作業が行はれてゐた。七八人の人夫が濱邊からもつこで砂や砂利をはこんでくる。コンクリ係りがその砂利にセメントと水をまぜて、スコップで練りをやつてゐる。コンクリート攪拌器を使へば早いが、そんなものを使ふほどセメントがないのだ。

そのそばでは、方塊作りが三・四メートル四方ぐらゐな頑丈な型箱を組み、まぜあはせたコンクリに一尺四方ぐらゐのグリ（石）を入れて、片つぱしから型箱のなかへ叩きこんでゐる。一日約十個の豫定だが、完全に凝固するのには半月もかゝるのだ。この四角い眞白な方塊が、豆腐のコマギリみたいにズラリと並んでゐる。

一方では、この乾きあがつた方塊を、やぐらのついたドライヤーズで引上げ、十人ばかりの人夫がエイヤコラサとレールの枝線上を押してゆく。そして本線のトロッコに移して海べりまで持つてゆき、それを起重機船がつかみあげて沖へ捨てにゆくのだ。何しろ小さいのでも五六トン、大きいのは十五六トンもあるので、一日かゝりきりでもさう澤山は捨てられない。この捨石を土臺にして、その上へ長さ七メートル、幅五メートルぐらゐのコンクリの場所うちを次々にやつ

て、防波堤を築いてゆくわけである。

海から目をそらした岩本は、ギラ〳〵と灼けつくやうな炎天の下で汗みどろに動いてゐるこれらの人夫たち（それも大半は漁師だが）の働きぶりをじつと眺めてゐたが、やがて何と思つたかとつぜん俠助のゐるブリッヂの窓から首をつつこんだ。

「なあ船長、一つ頼みてアことがあるだけえが……」

思ひきつたやうにボツリとさう云ふと、岩本は窓枠に兩肘をついて目を伏せた。

「なんだ、改まつて……」

俠助は、いたはるやうに云つて、目の前につき出たネヂ鉢巻のザンギリ頭をながめた。彼はこの、少し氣短かだが、生一本で腕つこきの若者が、數多い部下のなかでも一ばん好きだつた。母を亡くした一人娘の婿には、この男よりないと、以前から一人ぎめにきめてゐたのである。まだ口にこそ出さないが、その氣持は以心傳心傳はつて、岩本の方でも身内のやうになついてゐたし、娘のイヲ子ともよく氣が合つてゐた。たゞ、片眼をなくして歸還してからは、何かしら俠助一家から遠ざかるやうなそぶりを見せてはゐたが……。

「實はな、船長……」

と、岩本はぐいと顔をあげて、まともに俠助の目を見つめながら、

「おら、はあ、我慢できねえだ。こんなええ風つゞきに、こんねア所でマゴ〳〵してるなんて……おら、死んだ親父にも申譯んねえや。かうなりやあ、はあ飛乘りでもなんでもやるぞつて、實ア肚をきめてたんだ。丁度そこへ昨日ね、寶永丸から乘らねえかつて話があつたで、ぢやあ乘ると返事はしたけえが……。な、船長、惡いけんが、一航海やらしてくんねアかな」

右の義眼は冷く動かなかつたが、左眼は切々たる思ひをこめたやうに、熱つぽく濡れ光つてゐた。その眼のこともあるに、とつぜん、漁で死んだ彼の父親のことを思ひだして、俠助は思はず視線をそらした。

「うゝむ、さうか……無理もねえや。おらだつて、じつとしてゐられねア氣持だでなあ、汝みてえな若い者ア……」

云ひかけて、俠助はフッと口をつぐんだ。現在彼の片腕となつてゐる岩本が築港をやめるといふことも困るが、それよりも飛乘りといふことが彼には人一倍重くのしかゝつてくるのだつた。

大體この町の漁師には、明暦の頃から三百年ものあひだ、父祖代々親方（船主）を中心とする一船一家族の傳統が固く守られてゐて、他船に雇はれることは嚴禁されてゐた。たゞ五月五日から九月十五日までのいはゆる「夏の日關」とよぶ盛漁期間以外は、出漁回數も少く、從つて收入もへるので、「飛乘り」といつて他のサバ船やムツ船に雇はれることを許してあつたが、傳統的に他船へ乘ることをきらつてゐる鰹漁師たちには、ごく稀れにしか乘る者がなかつた。俠助も岩本も、まだ一度も乘つたことはない。だから、夏の日關でさへこんなに出漁できなくなつても、他縣の漁夫のやうに見も知らぬ他國の船へ雇はれてゆくことなど論外で、同じ浦濱の船にさへ乘ることを潔よしとしないのだつた。

岩本も一ばんにそれを氣にかけてゐるらしく、俠助がだまりこんでゐるのを見て、辯訴するやうに言ひたした。

「そりや、おらだつて何も飛乘りなんかしたかねアけんが、今ははあそんなことを云つてる時ぢやねアと思ふんだ。先祖代々鰹漁師として育てられたおらつちがさ、鰹竹をかぢらかしてぼんやりしてるなんて、そんなことができると思ふけア。ぜんぜん船が無えつてなら別だけえが、たま

にや出る船があつて、それが一人でもよけい腕きゝを乘せて行きてえつて場合にや、飛乘りだつて何だつてやらにやならねえ時勢だ。こりや何も、手めえのためぢやねえ。おらア、こゝの給料より安くたつてかまはねえ、たゞ沖で働かしてもらやアえゝだ。な、船長、賴むでやつてくんねアか」

今にも泣きだしさうな聲だつた。俠助とても思ひは同じだけに、もう一も二もなかつた。

「うむ、それくれアまで考へるなら、思ひ切つて行つて來いや、おら、築港の仕事だつて、町のため國のためと思ふけえが、食糧增產はこの際もつと大切だでな、おらの分も一しよに賴むぞ。汝ほどの腕つこきア、寶永丸にやゐねえと思ふけえが、まあ、大勢のなかへ一人で入るだで、要領よくやつて來いよ」

「ありがたう。なーに、一人だつて大丈夫だ。だけえが船長、船長も一しよに行かねアかね、二三人ほしいつて話だで」

岩本の隻眼が、急にいきいきと輝いてきた。

「おれか、ハハハハ、そいつア駄目だ。第一體裁が悪いや」

「なーに、船長だからつて何も體裁わりいこたアねえよ。むかしの大臣が南洋の知事になる時勢ぢやねえか。な、船長、古くせア沽券なんかかなぐり捨てゝ、一航海行つてみねアかね。えゝぞ、かうやつて、グーン、グーンと鰹の雨を降らすんだ」

すつかり元氣づいた岩本は、とつぜん海の方に向きなほり、兩手をふつて鰹釣りのまねをやりだした。

「ウントコショ、ドッコイショ、えつ畜生、こたへられねえな、かうやつてズボリと引つこ抜いて、グンとかゝへる、あの味と來た日にやあ……」

憑かれたものゝやうに喚きながら、兩手をふり廻してゐるその恰好を、俠助はもとより、折からそこへトロを押してきた轉業漁夫たちも、顏は笑ひながら、かたづをのむやうにして眺めてゐた。

三

全長十町になんなんとする大護岸と並行に南から北に流れる黑石川は、その間に狹い細長い一

角の部落をくぎつてゐた。鰯ケ島とよばれるこの部落は、漁村としてのこの町のそもそもの元祖で、數百年の昔から地曳網や小釣りなどで鰯その他の雜魚をとつて細々とした暮しをたてゝきた一寒村であつた。何しろ荒海のすぐぬきにへばりついてゐるので、激浪や津波のあるたびに、家は倒れ人は流され、住むことさへできぬほど大自然の脅威にさらされてきたのだつた。

ところが經、その他の遠洋漁業が次第に發展するにつれ、部落はだんだん肥えふとつてきて、明治三十九年には永久的な大護岸ができあがり、今では波の心配はまつたく無くなつた。部落を埋めておるおびたゞしい砂礫が、わづかに當時の慘狀を物語つてゐるにすぎない。

この街を南北につらぬく二間半はゞの街道を南の濱通りといつて、その表通りには、大無電塔のそびえる漁業組合事務所を初め、各水産會社の事務所、大商店、「鮮魚・經節」とのれんをかかげた小商店などがズラリと軒を並べてゐるが、そこから百足の足のやうに幾つも折れこんでゐる一間はゞの露路に一歩ふみこむと、二間に三間ぐらゐのマッチ箱みたいな家が、押しあひへしあひ無數に重なつてゐた。云ふまでもなく殆んど漁師の家で、俠助の家も岩本の家も、先祖代々その片隅に巣食つてゐた。

その大通りに見民亭といふ料理屋があるが――これは、遠洋漁業もまだ櫓こぎ時代、平屋のみすぼらしい仕出し屋だつたのが、明治の末ごろ漁船に發動機をとりつけたいはゆる改良船が劃期的な漁獲をあげるやうになつてからメキメキと繁昌し、いつのまにか二階をつけ、今では洋館の三階も建てました相當な料亭になつてゐる。謂はゞこの町の遠洋漁業躍進時代のお手輕な象徴みたいな家であるが――この家の筋むかふの露路を入つて、とつつきから二軒目が、俠助の家だつた。

玄關も何もない二間半間口の左の方は、昔式の半戸になつてゐて、横に二枚ならべた障子を紐で上げ下しするやうに作られ、その眞中には障子の桟の二こまに小さな硝子がはめこまれて、外がすぐ見えるやうになつてゐた。右側の紙ばりの格子戸をあけて入ると、一間はゞの土間が奥までずつとつゞき、左側に六疊が一間、チョコンと出來てゐる。

その土間の入口近い右側は物置のやうになつてゐて、そこには、鰹竹（釣竿）魚籠、手糸籠、手網、鈎箱、菜鉢（お菜入れ）など、漁師獨特の商賣道具が雜然とおかれ、その奥の方にはかまどやへつついが設けられて、簡單な炊事場になつてゐた。

イヲ子はさつきから、その炊事場で晝飯の支度をしてゐた。父親に似てキリッとした目鼻だち

で、顏や手足は陽にやけてゐるが、浴衣の襟もとからのぞいてゐる胸は、うす桃色にふつくらと張つて、みづ〳〵しい十八歳の靑春が匂つてゐるやうだ。去年母を亡くしてからは、母代りになつて甲斐々々しく一家を切廻し、今年から國民學校へ通ひだした弟の勝男と父親との面倒をみてゐるのだつた。

「あゝ腹がすいた。まだか飯は……」

裏の方から俠助の聲がした。この四五日海が荒れてゐるのでずつと築港を休んでゐた彼は、さつきから猫の額ほどの裏庭へ出て、防火用の砂袋や、火たゝきをこしらへてゐた。

「もうぢきよ、なんにもお菜がないけえが……」と云ひながら、薪をとりに裏へかけだしたイヲ子は、とたんに、

「ばかつ」と大聲に叱鳴りつけられた。

何事かと思つて愕いてふり返ると、めつたに怒つたことのない俠助が、恐ろしい權幕で眺みつけてゐる。

「なんだ、釣竿をまたぐ奴があるかつ。小つくい時からあんなに云はれてゐるのを、忘れたのか。

ばか野郎つ」

ハツと氣がついて足許を見ると、そこには鰹竹が一本ころがつてゐる。昔から、女がまたぐと漁に出たときポッキリ折れると云ひ傳へられ、幼いころから嚴しく戒められてゐるその竹を、うつかりまたいでしまつたのだ。それはもう永いあひだ使はれない古い竿だつたし、それにいま火たゝきの竿にするために物置から取出されたところだつたので、つい氣を許してゐたのであるが、このごろ何故かひどく沈みがちの父親からこんなにも叱られてみると、急に切ない涙がこみ上げてきた。

「す、すみません……」

イヲ子がすなほに詫びると、俠助は怒つた顏のやり場に困つたやうに、その竿を拾つて屋根へたてかけながら、

「まあえゝ、おれが下へおいといたのも惡かつたんだ。だけえがなあイヲ子、いくらこの竿がはあ使はねえ竿だからつて、今までお世話になつた大事な道具を、やたらにまたいだりしちやなんねえぞ。父ちやんはな、今これを切るのが、つ、つらくてゐるとこなんだ……まあえゝ、早く飯

にしてくれ」

思はず鼻をつまらせてさう云ふと、俠助は手にした鋸をとりなほして、竿の切り場所を目分量で計りだした。

事實、彼はさつきから心が痛んでたまらなかつたのだ。どうせもう使へなくなつた一ばん古い竹とはいへ、ながいあひだ自分と生死を共にし、何千何萬の鰹を釣つてくれた、いとしい竹である。せめて、埃にまみれてでも、いつまでも物置にしまつておきたいくらゐのものだ。それを無残に切りきざんで火たゝきにする——そこには、鰹漁夫ならでは分らぬ、忍びがたい氣持があつた。

それに彼は一週間前岩本を飛乘りに送りだしてから、一つの大きな決心をしてゐたのだ。もうこの竹も永久に使ふことがあるまいと思ふと、なほさら愛着がわくのだつた。

だが、きのふ防火群長から、今日中に必ず防火用具をそろへるやうに云渡されたので、ほかに竹はなし、なんとしてもこれを切らねばならなかつた。彼は、目をつぶるやうに鋸をあてると、一氣にサーッと切つてしまつた。

そのとき、表戸がガラッと開いて、

「こんちは、船長……いま歸つてきた」

大聲に云ひながら飛びこんできたのは、菜つ葉服に麥藁帽をかぶつた、漁裝束の岩本だつた。

「おゝ歸つたか、早かつたなあ」

この數日海が荒れるので心配してゐた俠助は、しんから嬉しさうな顏でとびだしてきた。

「飯すんだかね、飯は……實アこれを間に合はせようと思つて、大急ぎで駈けてきたんだ」、

岩本は、帽子をとつた額から汗をタラ〳〵たらしながら　右手にぶらさげた鰹を持上げてみせた。長さ三尺あまりの大鰹だつた。

「ほう、こりや有難え。丁度いまお菜がなくて困つてたところだ。さつそく御馳走になるかな」

と、俠助はその鰹を受取つて、手で計りながら、

「おゝ、こりや三貫匁からあるぞ。大したもんだ。どこまで行つた」

「銚子沖五十浬で、すーげえ魚群にぶつかつてね、一ぺんで滿船しちやつたんだ。もう一度出なほしたかつたけえが、はあ油が切れちやつてね、殘念ながら歸つてきた」

「さうか……まあその話はあとでゆつくり聞くとして、お汝もまだ飯前づら、いまおれが料理するで、一緒に食はうぢや。それに俺もおのしに少し話してアことがあるで……」
「うん、ぢやあ呼ばれすか……その代ち料理はおらがやるよ」
俠助がいゝといふのを引つたくるやうに鰹を手にすると、岩本は炊事場の方へ行きながら、
「イヲちやん、流しをちよつくら貸してくりやうよ」
と、いくぶんテレ臭さうに聲をかけた。
「まあ、大きやアねえ。助かるわ、今なんにもねアで、父さんのきらひなとろいこぶでもこさへすかと思つてた。ホホホ……」
つい今しがたまで泣出しさうな顔だつたイヲ子は、いつのまにか持前の屈託なさをとりもどして、こぼれるやうな笑顔を見せてゐた。
そこへ、半分こはれた玩具のグライダーを持つて表から駈けこんできた勝男が、
「わつ、すーげえなあ。どこで釣つただ、小父ちやん」
叫びながら、いきなり魚に抱きついた。

「どう、この鰹とこの勝男とどつちが大きやアか比べてみろ」
岩本は魚の尻尾を握つたまゝ見比べて、
「おう、勝坊の方が少し大きやアわ。はあ學校へ入つたでなあ、豪アゝ。いまうんと刺身を食はしてやるぞ」
とおだてあげた。
久しぶりに眞赤な、血のしたゝるやうな生きのいゝ鰹のぶつ切りを山もりにして、賑かな晝飯をすますと、俠助はイヲ子と勝男を濱へ遊びに出してから話をきりだした。
「實アな、おのしが行つてからいろいろ考へただ……築港の仕事も大したことアねえし、なんとか、まちつと戰爭のお手傳をしてアと思ふけえが、おらはあ兵隊にも行けねえし、漁の方もこれからさきヤまつとゝ窮屈になると思ふでな、この際思ひきつて軍屬になつて南方へ行かすと決心したんだ。ちやうど海軍で南方行きの短期工員、つまり設營隊だな、それを募集してたんで、實アー昨日その志願書を出したんだ」
「えつ、さうかね」

と、爪揚子をつかつてゐた岩本はギロリと片目をむいて、
「相變らず氣が早えなあ。そんで、あとをどうする氣だね、勝坊らを……」
「うむ、それだ、それがまあ一ばんの問題だけえが……」
俠助は、じつと目をつむつて、しばらく何か考へこんでゐたが、やがて顏をあげると、まともに岩本の顏を見ながら、思ひ切つたやうに云つた。
「それについて、實ア折入つて頼みてアことがあるんだ。それア、ほかでもねえ、お汝にイヲ子を貰つてもらひてアんだ。ろくな娘ぢやねアけが、おのしならお互ひに氣心もわかつてるし、それに第一、この俺からしておのしが好きでなんねアだ。な、頼むで、貰つてくりやうよ……」
「だめだよ船長」
とつぜん、岩本がさへぎるやうに云つた。
「おら、こんな不自由な體だで、これからどうなるか分んねえ。イヲちやんにや、まつと立派なお婿さんがいくらでもあらあね」
「いや、おら、よしんばどんな豪ア男が出てきたつて、おのしのほかにや誰にもやらねアつ・り

なんだ。こりや昨日や今日考へたこんぢやねえ、はあ二年も三年も前から、じつくり考へてきたことんだ。こんなことを云つちや何だけえが、おら今まで心ん中ぢや、おのしを吾子みてえに思つてただよ。おのしの親父が亡くなつてからは、なほさらさうだ。生きてたら、許嫁にしてもらつてたかも知んねアよ。な、頼むで、うんと云つてくりやうよ。さうすりや、イヲ子だつてどんなに嬉しいか知んねアし、勝男だつておのしが兄貴になつてくれりや、なんにも心配いらねえ。おら、なんの心殘りもなく、思ふぞんぶん御奉公して來れるんだ。俺の方は十日ぐれアのうちに採用の通知が來ると思ふでな、話がきまりや、さつそく式をあげてもらつて、安心して出發してアな。尤も、もうぢき入江さんのお祭だし、勝男もお道具方で出ることになつてるで、十三日のお祭だけア拜んで行きてアと思つとるよ……」
めんめんとかき口說く俠助の皺つぽい目は、いつかうつすらと涙ぐんでゐた。

四

水色の素袍小袴に同じ色の小さな烏帽子をチョコンとのつけた勝男のすがたは、雛人形のやう

に可愛かつた。その手をひいて俠助が家を出たのは、朝の九時ごろだつた。

街は奉納燒津神社と書かれた御神燈で埋り、時局がら控へ目ではあるが、けふを晴れと着かざつた男女のむれが、潮のやうに神社への道を急いでゐた。

この町の産土神であり氏神である縣社燒津神社――日本武尊を祭神と仰ぐこの神社の例祭は、全國屈指の壯烈極まる荒祭りで、町がら、漁師、魚屋、鰹屋の若者を中心として行はれる。

その年入營の元氣一ぱいの若い衆が十二人づつ、舁丁として二臺の大神輿をかつぎ、それに百人ぢかい白裝束の若衆も加はつて、「アンエイトー、アンエイトー」と叫びながら、肩の肉がえぐれて白衣が血だらけになるほど、揉みに揉み、あふりにあふる。この神輿に家の中をあふられると緣起がいゝといふので、船元の家などではわざ〳〵呼入れてあふつてもらふが、それとは違つた意味で、いつも憎まれてゐる惡辣な料理屋や、二階から首を出して見物してゐる家なども、木つ葉みぢんにあふられる。軒の樋はひんまがり、硝子戸はふみつぶされ、屋根はガラ〳〵と落ちてくる。同時に、神輿の天邊についてゐる鳳凰も、まはりの飾りもメチャ〳〵にこはれてしまふ。

そのほか「いちつこ」といつて緋の衣をきせた九つぐらゐの女の子を荒馬にしばりつけて闇の中をとばせたりやぶさめに似せた「かねたか」といふ騎馬の男が疾走しながら小川ぞひの垣根に矢を三本放つと、群集が殿りあひ蹴りあひ、血まみれ水びたしになつてその矢をうばひあつたり、いろ〳〵な荒つぽい行事が行はれるが、その間ぢゆう、ドドンドドンといふ大太鼓の音にまじつて、アンエイトー！、アンエイトーの叫びが、町一ぱいにひゞきわたる。これは「鳳籃越渡」つまり神様のおかごが渡御するぞ、下に〳〵といふ聲譯の聲だとも云はれるし、また、「浦がえゝぞ」――大漁だぞといふ意味だとも解されてゐるが、その眞義ははつきりしない。とにかくこの町の漁師たちは、海の上でも陸上でも、何かといふとこの掛聲を叫びだす。いはゞ、この勇壯な叫びこそ、漁村としてのこの町の熱と力の端的な表象なのだ。

俠助らが一歩鳥居をくゞつたときも、境内はすでに白や水色の裝束に身をかためた若者たちと參詣の人々であふれ、大太鼓の音につれてアンエイトーの聲がものものしく聞えてゐた。俠助も若衆時代、何度も神輿をあふつた經驗があるので、なんともいへぬ懷かしさがこみあげてきた。

「さあ勝男……日本が戰爭に勝つやうに、そしてな、お前がえゝ若い衆になれるやうに、しつか

り拜むんだぞ」

勝男とならんで、俠助は神前にぬかづいた。これが最後となるかも知れぬと思ふと、萬感胸にせまる思ひだつた。

だがもう何も思ひのこすことはなかつた。目のわるいのをたてに、最後まで固辭してゐた岩本も、漸くイヲ子との結婚を承諾し、結婚式もすでに一昨日すましたし、自分の留守のうちは家へ來て勝男の面倒もみてもらふことになつたし、何一つ心配の種はなかつた。志願書を出した海軍の方からも、十四日までに出頭せよといふ指令が來てゐるので、明日は早く出發しなければならぬ。もう二度とこのお社を拜むことはできないかも知れぬ。こんどこゝへ歸るときは、白木の箱に入つてゐるかも知れぬ。それでいゝのだ。あとには岩本もゐる。イヲ子もゐる、勝男もゐる。みんなで町を守り、國を護つてくれるだらう。こんな老いぼれの自分が、英靈となつてこゝへ凱旋し、やがて靖國神社に祀られるとすれば、こんな光榮はないではないか……

「父ちやん、ぢき行列が出るよ」

勝男の聲にほつと吾に返つた俠助は、急いで境内の裏側へ行き、勝男を神幸式の列に入れさせ

た。そこには勝男と同じやうな裝束をつけた子供たちがたくさん整列して、めい〳〵御太刀や御楯やお弓など、氏子が奉納した御道具をさゝげてゐる。勝男は御弓を捧持することになつた。

やがて、一きは高らかな太鼓の音がひゞき渡つたと思ふと、水色の袴をきて五尺ばかりの青竹をもつた警護の若者が八人、拜殿のきざはしを青竹でうち叩きながら、

「サンヤレ、サンヤレ、サンヤレ……」

と叫びだし、そこへ二臺の神輿が本殿の方から下りてきた。

拜殿前の廣場に下りると、一人が、

「ソレキタサーノエー」音頭をとると同時に、百餘名の白裝束の若者たちは、口々に「アンエイトー、アンエイトー」と叫びながら、力一ぱい跳び上り、押しもみ、あふりだした。神輿は怒濤に漂ふ船のやうに搖れ、八方からしばりつけた白さらしの太紐がわづかにそれを支へてゐる。

大榊を先頭に、神列は動きだした。勝男も小さな手に御弓をさゝげて歩きだした。俠助は、その脇につきそつて歩きながら、こみ上げる可愛さ嬉しさに、時々ふり返つては顔見合せてニッコリ笑ひあつた。

海の倫理

一

「ワーイ、木だ、木だア、木が流れとるぞオ、鳥もゐるぞオ！」

五時の朝飯がすんで間もなくだつた。突然、前檣で魚群を見張つてゐた船頭が大聲で叫びだした。

操舵室で輪轉舵をにぎつてゐた船長の萬助は、ハッとしたやうにマストをふり仰いだ。ガラス戸ごしに見える船頭のうしろ姿が、右手を夢中に振りながら、はるか右舷前方を指さしてゐる。つゞいて、ブリッヂの屋上に見張りをしてゐた大船頭の吉兵衛も、大手をひろげて突つたちながら、

「おうッ、木付きだ、木付きだッ、おもかぢ一ぱーいッ」

と、傳聲管から下のブリッヂへどなりこんだ。

「よーいしやッ」

萬助も、さすがに下つ腹から何かこみ上げる思ひで、全身をのしかゝるやうにしながら、ラッ

トを右へガラ〳〵と廻した。

「宜候！　前進！　全速力！」

頭の上から、吉兵衛のドラ聲がおつかぶさるやうにひゞいてくる。萬助はラットを止め、信號機をジャン〳〵鳴らして機關部へ全速力の信號をおくると、ドアをけとばして外へとび出した。

前方約一キロのあたりに、何かチラ〳〵動いてゐるものが見える。ふつうの肉眼では、ほこりが舞つてゐるか、陽炎がたつてゐるみたいにしか見えぬが、炯眼な船頭には、早くもそれが鳥であることが分つたのだ。

しかも、その下には、何か黑いものが浮きつ沈みつ流れてゐる。鳥がゐて、木がある。これはきさしく木付きと判斷してよからう。木付きなら大したものだ。醬油で煮しめたやうな眞つ黑な、ぶしやう髭だらけの萬助の顏は、おもはずニンマリとほくそ笑んだ。

「どうだ船長、木付きとにらんだけえが……」

いつもムッツリ屋の吉兵衛も、聲をはずませながら、屋根から下りてきた。

「うむ、ほんものゝ木付きにお目にかゝるなア、何年ぶりかな。こりや大したこんになりさうだ

ぞ」

「道理でどこにもゐねアと思つたよ。みんなこゝに寄つてやがつたんだ」

吉兵衛は、ものものしい表情で、下の船室へおりて行つた。

すでに船内は色めきたつてゐた。漁師たちは口々に何か聲たかく喚きあひながら、狂氣のやうに右往左往してゐた。

それも無理はない。この大正末年の建造された十五トンのボロ船——東海丸が、油と修理の關係で、七月八月と大事な夏の漁期を二た月も上架したあげく、すでに豆南諸島を北上してしまつた鰹の大群を追つて、あわてて母港焼津を出帆したのは九月の初旬だつたが、千葉縣沖の漁場へついてからもう十日にもなるのに、まだ魚群(むれ)のなの字にもぶつからなかつたのだ。みんな腐りきつて、いら〳〵してゐた。そこへこの減相もない御馳走にありついたのだから堪らない。しかも木付きと來たら、餌つきがひどくいゝので、一どきに一萬尾二萬尾と釣ることもめづらしくはないのだ。

一たい鰹といふやつは奇妙な魚で、淺瀬や潮目などに集まるいはゆる「瀬つき」は別として、

沖なぶらとなつて太洋を移動するときは、鯨やコロ鮫のやうな大きな魚のそばとか、南洋の椰子または檳榔樹のやうな古朽ちた流れ木にくつついて、大群をなして游泳してゐる。鯨付きやコロ付きは、鰹のおそろしい敵である鮫やカジキマグロからのがれるためだが、わづか二間たらずの流れ木一本に、なぜあんなにも無數の鰹が付いてゐるのか——そこにまた鰹ならではわからぬ造化の妙があるわけだ。

いまその流れ木が、根つ子のついた片はしをわづかばかり海面に見せて近づいてきた。その上にはマトリの大群が、海面にわが體を叩きつけるやうに降りては上り、上つては降り、まんじとも巴と舞ひ狂つてゐる。

すでに漁師たちは、船長と機關部員一名をのこして、全部竿をにぎつて右舷の魚釣臺(ろかい)にズラリとならんでゐた。

誰も彼も、もうじつとしてゐられないやうに、立つたり坐つたりして、目をキリ〳〵ひんむいてゐる。

「餌(えさ)投げーッ」

船頭の聲に應じて、餌投げ係の萬太と豐作は、小桶の中から二三尾のマルイワシを手づかみにして、バラ〳〵ッとふりまいた。キラリと光つて海面におちたイワシは、たちまち何ものかにガッと呑まれてしまつた。

「うわーッ、食つた、食つた、食つたア！」

漁師たちはいきり立つて、足許に運ばれた餌鉢からイワシをつかみだし、鈎につけて投げこんだ。

萬太と豐作は夢中で、二彈、三彈と餌を投げつける。サッと撒水ポンプが右舷一めにはとばしる。その水しぶきの虹の中から白銀の腹をひらめかして、ズボリ〳〵と鰹がとび上つてくる。ものすごい餌つきだ。

「やーい、こいつア食ふぞオ。しやぐま（擬似鈎）でやれ、しやぐまで！」

萬助がどなつた。

もう一つ一つ餌をつける必要はない。餌釣糸を鳥の羽のついた擬似の鈎に代へて投げこむ。グイと引かれて、エイッと引上げる。見事な紡錘形の魚體は、小脇にかゝへる暇もなく、大きな拠

物線をえがいて、背後の甲板へとびおちる。また入れる。すぐ食ひつく。一匹つり上げるのに、わづか三四秒の時間だ。それを三十何本の竿が一せいにやるのだから、まるで鰹の大群が船中へ突擊してくるみたいだつた。

船はいつか鳥ばしらの中に突つこんで、ピタリと停つてゐた。

二

ふと見ると、さつきまで舳先で餌をなげてゐた伜の萬太が、いつのまにかブリッヂのすぐ下の舷門のところへ來て、釣竿をいぢつてゐる。

「萬太、おめえ釣る氣か」

上から萬助が聲をかけた。ニヤ〳〵笑つてゐる。

「うん、えゝらなあ」

肢體はのび〳〵と大きいが、今年やうやく十八歳の元服式をやつて一人前の若い衆になつたばかりの萬太は、まだ本物の鰹を釣つたことがないのだ。今まで水を一ぱい張つたビール瓶やバケ

ツを鰹代りに猛練習してきた腕前を、今こそ實地に見せてやるんだといふ氣負つた表情が、その子供つぽい眉のあたりにあらはれてゐる。

「ほんとに釣れるか」

「釣れなくつて！」

「よし、やつてみろ。落じちゃ駄目だぞ。みんなの邪魔になんねえやうにな」

萬助はうれしかつた。小さいころは弱くて、とても漁師のあとつぎにはなれまいと思はれてゐた一粒種の萬太が、おとゝし船へ乘つて小若い衆づとめをするやうになつて以來、めき〳〵と丈夫になり、いつのまにか自分より背のたかい立派な若い衆になつて、いよいよ自分一人で鰹を釣るといふのだ。父祖代々の鰹漁師である彼にとつて、これ以上うれしいことはない筈だつた。

（しつかりやるんだぞ）

肋の奥で叫びながら、目だけは笑つてじつと眺めてゐた。

慣れない手つきで投げこんだ萬太のやまは、すぐさまグイと引かれた。

「そこだッ」

萬助は、思はず叫ぶ。

「ヨーイショ！」

かけ聲だけは一人前に、グイと引上げたが、上げかたが少しおくれたゝめ、鰹がズボリと抜けて來ない。水面をバタ〳〵あばれ廻るやつを、むりやりに力一ぱい抜き上げて、宙にフラ〳〵するのをやつとこさ小脇にかゝへこんだが、こんどは釣がぬけなくジタバタしてゐる。

「それ、えぎた（鰓）をおさへるんだッ」

父に教へられて左手の親指をグツとえぎたに突つこみ、やつと釣をはづした萬太は、眞赤な顔をふりむけてテレ臭さうにニヤリと笑つた。

「そんなこんぢゃ駄目だッ。魚がとびつく力を利用して、もつと早くサツと上げるんだ。そんなこんぢゃ、まだ竿は持てねえぞ」

わざとガミ〳〵叱りとばしたが、心のなかでは、初めてのわりにしちやなか〳〵うめえぞ、との親父よりずんと頼もしいぞと、萬助は三十年前、自分がはじめて釣つたときのことを思ひだして、舌なめずりをした。

そのまにも漁師たちは、必死の竿をふりまはしてゐた。目は血ばしり、歯は食ひしばつて、人相が變つてゐる。阿吽の呼吸以外、むだ口一つきく者はない。

甲板はいつか鰹の山になつて、それが一つの太い河のやうに、ジワ〳〵と低い胴中の方へ流れてゆく。

二回、三回と、回をかさねるにつれて、萬太の手つきも大分しつかりしてきた。もう我慢できなくなつた萬助は、ラットが動かないやうに綱でしつかりしばりつけると、愛用のはねこみ竹をとりだして、甲板へとび下りた。

「どら〳〵、おらにやらしてみせろ」

萬太をどかして、その席に立つと、はねこみ竹をポンと抛りこんだ。

これは一ひろ半ほどの短い竿で、やまも太麻で短く、その先に大きな牛角のしやぐまをつけたものだ。これで水面を「い」の字模様にひつかくと、鰹がとびついてくる。それを上へ抛りあげて、ヒョイとやまをゆるめると鰹はひとりでに鈎からぬけて、頭上をうしろへとんでゆく。すぐまた入れて抛りあげる。最初のと二番目の鰹がまだ甲板におちないうちに、三番目のがとび上

る。一二貫もの鰹がいつも三びきお手玉みたいに宙に舞つてゐるので、これを三段釣りといふ。よほどの名人でなければ、ちよつとできない藝當である。

萬助はいま、それをやりだしたのだ。しばらく手にしなかつたので三段とまではいかないが、二匹はたしかに宙に浮かんでゐる。

「わー、すげえ！」

萬太は、呆然と息をのんだ。

おなじ餌投げ係で萬太と同年の豊作や、他の少年漁夫たちも、いつか集つてきて、うつとり見とれてゐる。

「さあ、こんだア、これをやつてみろ」

およそ二三分のあひだに百匹ぢかくも釣りこんだ萬助は、ふと手をやすめると、汗びつしよりになつて萬太をふり返つた。さすがに年のせゐか、ひどく疲れが出る。

「ほんとにお手玉みてアだな。おらア初めて見た」

「おらも初めてだ。話にや聞いてゐたけえが……」

豐作も感嘆の聲をあげた。

「こりや、かういふ餌つきのうんと良えなぶらでなきや出來ねえんだ。さ、やつてみろ、萬太」

「やだ、やだ、そんなおつかねえの……」

萬太は、頭をかゝへて逃げださうとする。

「なんだ弱虫め、それで一人前の若い衆つて云へるか。圖體ばつか巨くつて、三度の飯をどけえ食つてるだツ」

叱咤しながら、萬太の尻を一つポンとどやしつけたが、その皺つぼい目はたのしげに笑つてゐた。

三

およそ一時間で一萬四五千の鰹を釣上げ、たちまち大漁滿船した東海丸は、意氣揚々、歸航の途についた。

船尾の貯油艙が輕くなり、船首の魚艙が重くなつたゝめ、船は前のめりにグッとうなづいて、

折から吹きだした風のなかを重たげにヨロ〳〵と走つて行つた。

が、大漁のよろこびに加へて、明日はいよ〳〵懷かしの母港へ歸れるといふので、船中はまるで盆と正月が一どきに來たやうなはしやぎ方だつた。

夕飯がすむと、恒例の演藝會が船首の若衆部屋ではじめられた。いつも歸航の前夜に、若い衆が中心となつて行はれる樂しい慰勞會である。

船長、機關長、コック長、船頭はじめ、艫の衆（既婚者で、ともの船室に寢てゐるのでかう呼んでゐる）も、數人見物に來てゐた。

魚釣りやらその魚の整理やらで全身綿のやうに疲れきつた若い衆たちも、演藝會となるとたちまち活氣づいた。

佐渡おけさが出るかと思ふと、ロ三味線が出る。詩吟、映畫說明、軍歌、聲色、手品と、あとからあとから變つたものがとび出して、みんな顎をはづし、腹をかゝへて笑ひころげる。中には船の動搖で、ほんとにコロ〳〵ころがる者もあつた。

夜に入つて風はます〳〵烈しくなり、雨さへ降つてきた。

ちやうど萬太が壇に上つて、まだ少年らしい羞かみを見せながらハモニカで軍艦マーチを吹いてゐる時だつた。突然、無線屋（無電局員）の八木が、何か心配顔で入つてくると、ニコ〳〵笑つてゐる萬助のまへに一枚の紙片をつきだして、何ごとかさゝやいた。

萬助は、ハツとしたやうに紙片をにらみつけ、しばらく考へるふうだつたが、すぐに隣りに坐つてゐる吉兵衛や機關長に何か耳うちすると、しづかに立上つて若衆部屋を出た。船頭たちも緊張した面持で、あとからついてきた。が、向ふむきになつて夢中でさわいでゐる若い衆たちは、何も氣がつかず、二度目に吹きだした萬太の、「太平洋行進曲」にあはせて、大聲に合唱をはじめてゐた。

「こりや、とんでもねえことになつたぞ。福清丸から機關破損、航行不能につき至急曳航たのむつていふ緊急信號が入つたんだ」

ブリッヂの奥にある狹い船長室へ、みんな折重なるやうに入ると、萬助はさう云つて船頭たちの顔を見まはした。緊急信號といふのは、S・O・Sにつぐ求助信號である。

「場所はどこだ」

吉兵衛がきいた。

「東經百四十六度、北緯三十五度半といふで、このへんだな」

萬助は、テーブルの上に厚い板ガラスでおさへてある海圖を指さした。

「本船の位地は？」

機關長の近藤が、油でドス黑く染つたやうに濁つた目玉をひんむいた。

「本船の位地は……えーと、三十分前に野島崎正東百五十浬だつたで、本船からの距離は、さつと百浬東微北（イースバイノース）だな」

「百浬つて云やア、どんなに急いだつて、明日の正午ごろになつちまふら」

近藤が云ふと、

「まあ、追風だで、もう少し早く着くと思ふな」

萬助は何か考へるやうに頭をかゝへた。

「福清丸つて云やア、『丸生（まるせい）』の船ぢやねえか」

ふと、誰かゞ思ひだしたやうに云つた。

「さうよ、久右衛門がだ。たしか八十トンぐれアだつたな」

一瞬、重くるしい沈默がよどみ、六人の幹部たちの面上には、きびしい苦惱の色が走つた。

それはまだ大東亞戰爭がはじまる少し前のことで、そのころ濱津の鰹鮪漁業は、東海遠洋漁業株式會社と、燒津生産組合といふ明治以來の二大船主會社に獨占され、熾烈な競爭がつづけられてゐた。

たゞに事業の上ばかりではなく、兩社の幹部連は、それ〴〵政黨はなやかなりしころの政友會、民政黨にぞくし、政治的にもするどく對立して、事ごとに爭つてゐた。今でこそ兩者は一つに統合されてしまつたが、その當時は、新體制が强化されて政黨が解消されながらも、なほ相變らずのいがみあひをつゞけてゐたのである。

だから『丸東』(東海會社)所屬の東海丸が、『丸生』所屬の福清丸から救助をもとめられたといふことは、この場合一つの皮肉な運命だつた。

――こいつア、弱つたことになつたなあ……。

みんな茫然としたやうに、顏を見合せた。

だが、先方の船が敵會社の船だから弱つたといふのではない。それどころか、兩社の幹部同士はどんなに敵對してゐようとも、生産者である漁師同士には、おたがひに敵などといふ意識は毛頭ありはしない。沖であへば親しく聲もかけるし、「副食物」の交換もやる。まして海上は相見互ひだ。どこの船でも、たとへ外國の船でも、他船が遭難した場合、近くにゐる船が助けにゆくのは、儼たる海のおきてでもあり、また海上生活者の美しい倫理でもある。それがいやだといふのではない。

また、せつかく大漁滿船して入港を明日にひかへながら、またぞろ百浬も逆もどりするのがつらいといふわけでもない。陸上におけるやうな、そんな利害損得の打算といふものは、海上ではまつたく考へられないのだ。

たゞ一つ――こんなにも鰹をギッシリつめこんで、ひとり歩きさへ大儀なこのボロ船で、しかも荒模樣のこの海上で、はたして自船よりも大きな船を曳航できるかどうかといふ危惧が、だれの頭にもピンと感ぜられたのである。

「こりや、むづかしいぞ。このぶんぢや、ひでえしけになるで……」

やつと口を切つたのは、吉兵衛だつた。萬助より一つ上の四十六歳で、漁や航海では萬助におとらぬ老練な腕きゝであるが、數年前子供をなくしてから急に無口になり、どこか暗い感じがするので、いままで船長に選擧されるほどの人望もあつまらず、それがなほさら彼をしめつぽい人間にしてゐるのだつた。

「油はどうだ」

船頭の一人がきいた。

「油は、今んとこ一杯々々だけえが、これでしけを食つて手間どると危ねえかも知んねえな」

機關長の近藤が、油だらけの顔をしかめながら、小首をかしげた。

「ほかに船はゐねえのかい、この近くに……」

「ゐねアこともねアが、福清丸には本船が一ばん近くなんだよ」

若い八木は正直に答へた。

それまで默つてうつむいてゐた萬助は、このときグイと顔をあげた。

「なんだ、おまつちは……行かねえ相談をしてゐるのか」

「いや、さういふわけぢやねえが……」

吉兵衛が云ひかけるのを、ひつたくるやうに、

「だから、そんなジメ〳〵したせりふを云ふなつてことよ。はあ文句を云つてる時ぢやねえんだ。ふだんだつて見殺しにやできねえに、まして今ア、人間一匹、船一ぺえが大事なときだ。なんとしたつて助けにやなんねえ」

「だら、お汝、自信があるか、このしけん中で、この積荷でよ」

「自信？　あるとも。大ありだ。だが今ア、そんなこたア問題ぢやねえ。こつちになんぼかの危險があつたつて、からなりや、やれるとこまでやるまでだ。荷が重きや、棄つちやつたつて仕方がねえ。できさうもねえことを、でかしてみせるんだ。なあ、それが嬉洋つぽの度胸ぢやねえか！」

つぶれた嗄がれ聲だが、そのひゞきには凛として犯しがたいものがこもつてゐた。

もう、いやも應もなかつた。

「さうだ、やるよりほかはねえ」

近藤がまつ先に立上つて、すぐ下の機械場へ下りてゆくと、他の連中も悲壯なおもゝちでうな

づきあひながら、それ〴〵自分の持場へ散つて行つた。

四

夜がふけるに從つて、風雨はます〳〵烈しく、浪はいよ〳〵高くなつた。

船は、古ぼけた鎌首をあげてグググッと浪の山をのぼりつめたと思ふと、ズデーンとはげしく尻もちをつく。一萬五千貫の艦をのみこんで重々しくふくらんだドン腹は、そのまゝズブズブ沈んでしまひさうだつた。

が、次の瞬間には、また舳先に浪しぶきをあげて、次の浪へ突つこんでゆく。

グワウ〳〵といふ風浪のうなりにまじつて、ときゞ〳〵空廻轉する推進機(スクリュー)の悲鳴が、不氣味に闇をつんざいた。

そのあひだにも、遭難船とは無電でひつきりなしに連絡がつゞけられてゐた。

——貴船の漁はどのくらゐか、殘油はどうだ、食糧は？　本船はもう東經何度にかゝつたから、あと〇浬だ、安心せよ、頑張れと、狀況探索や指導激勵の言葉を、あとから〳〵送つてやる。

同時に、燒津の漁業協同組合本部とも、たえず連絡をとる。實直者の八木電信員は、頭に受話器をくゝりつけたまゝ、一晩中一睡もしなかつた。

萬助も徹夜だつた。

船長になつてから十年間、航海中は一度も寢卷きに着かへたことのない彼である。夜間、當直と代つて睡眠中でも、いざといふ時にはいつでもとび出せるやうに、いつも着たきり雀だつた。

それほど責任感の強い彼。ましてこの荒天では、舵とり船頭や見張り員に舵をまかしてはおけなかつた。殊にけふは、朝つぱらからの大仕事でつかれきつてゐるので、睡魔がゐんりよゐしやくなく襲ひかゝる。それを突つぱねるやうに、彼は兩手にグッと舵輪(ラット)をにぎりしめたまゝ、身じろぎもせず暗黑の海上をにらみつけてゐた。

そのガラス窓を、ホースで水をぶつかけるやうに、雨のたばが叩きつける。ずんぐりと背が低くて、やゝ猫背の萬助は、ふとい猪首をのばし、爪立つやうにラットにのしかゝりながら、血ばしつた金壺眼をラン〳〵と光らせてゐた。

夜中の十二時ぢかいころだつた。

ふと、船首の方に何かピカリと光るものが見えた。スーツと消えた。

はてな、何だらうと思つて、目をこらしたが、それきりあとは見えなかつた。

(見張りかな?)

いや、見張りはさつき引上げさせたはずだ。ふつう、霧中航海のときなどは、檣上や船首尾、舷などに見張りをおくが、こんな荒天のときなど、特に船首部の見張りは、激浪のためにさらはれる危險があるので、立てないのが原則だ。萬助は宵のうち立てゝおいた見張りを全部ひつこめるやうに、さつき若衆頭に命じておいたのだつた。

氣のせゐかなと不審に思ひながら、彼はなほも、黑々としてあやめもわからぬ船首部の方を見まもつてゐた。

すると、それから七八分もたつたとき、突然、若衆頭の興平と、若衆の豐作が雨合羽の雫をたらしながら、血相かへてとびこんできた。

「船長! 大へんだ、大へんだ、萬太が見えなくなつたッ」

けたゝましい興平の叫びに、萬助は思はず目をむいた。

「何ッ、萬太が?」

「さうです。さうです。萬太が、ゐなくなつちまつたんです」

そばから豐作が、泣きだしさうな聲をあげた。

「どうしたんだ。もつと落ちついて話してみろ」

萬助は二人をにらみつけた。

「あの……今しがた、萬太が船首(おもて)の見張りに出るつて、甲板へ出たんだ。それつきり歸つて來ねアで、心配になつてね、興平さんを起して、そこらを探しまはつたけえが……ど、どこにもゐねアんです」

「なんだ、見張りをまだ立てといたんか」

萬助が聞きとがめると、

「いや、見張りは、はア止めろつて、さつき船長の命令をみんなに傳へておいただよ」

興平がムキになつて云つた。豐作もつゞけて、

「おらも、見張りはハア出なくてえゝだ、こんなとき出たら危ねえぞつて止めただけえがね、萬

太は、なーに大丈夫だ、おら何だか船が心配だし、それに胸がムカ〳〵して氣持わるいで、見張りがてら、ちよつくら風にあたつて來るつて、ドン〳〵出て行つちやつたんだ」

萬助は、目を正面になほすと、しばらく身じろぎもせず突つ立つてゐたが、突然、

「ばッ、ばかやらろ！」

歯ぎしりするやうに、低い、しかし激しい叱咤の聲をもらした。

二人は、ハッとして息をのんだ。

「それア、いつごろのこんだ」

やゝあつて、萬助がうめくやうに云つた。

「今から、十分ばかり前だで……」

「懐中電燈か、マッチを持つてつたか」

「いや、何も、持つてかねえが……」

それを聞いて、萬助は思はずギクリとなつた。

（すると、さつきのあの怪しい光は……もしや萬太の靈火（ひのたま）では……？）

一瞬、全身が凍りついたやうだつた。

やがて、その騒ぎを聞きつけて、すぐ下の船室から、吉兵衛はじめ船頭や機關長などがドヤドヤと起きてきた。

「船長！　こりや大へんだ。きつと浪にさらはれたんだ。すぐ船をかへして、さがさにや駄目だッ」

機關長の近藤につゞいて、ほかの船頭たちも、

「さうだ、さうだ、早えとこ廻してくれ、船長！」

噛みつくやうに叫鳴つた。

が、萬助は、何も答へず、身じろぎもせず、ジーッと前方をにらみつけたまゝだつた。グッとラットのハンドルを握りしめた、松の根つ子みたいな兩の拳だけだ、小きざみにふるへてゐた。

「おいッ、船長！　何をぐづ〳〵してゐるだッ」

たまりかねた吉兵衛は、いきなり躍りかゝつて、萬助の腕をラットからもぎはなさうとした。

近藤も加勢して、萬助の肩につかみかゝつた。が、金挺みたいにラットにしがみついた萬助のか

らだは、ピクとも動かなかつた。

「なぜ廻さねえだ、船長！　お汝アさつき、何て云つた。人間一匹だつて大事だつて云つつら。まして萬太は、おぬしの一人つ子ぢやねえか。可哀さうに、なぜ助けてやらねえんだ！」

病氣ではあつたが子供を死なせた苦いおぼえのある吉兵衛は、萬助の二の腕をつかんだまゝ、息をセイ〳〵云はした。

あつけにとられて側に立ちすくんでゐた豐作も、ふたゝび泣聲をあげて、

「船長、お、お願ひです……早く、早く萬太を助けてやつて下せア」

と、萬助の腕にすがりついた。

じつと齒を食ひしばつてゐた萬助は、そのとき初めて口をひらいた。

「すまねえ……ありがてえ……みんなの氣持は、おら、うれしい……だけえが、みんな、よツく考へてみてくれ」

意外に靜かな、おちついた聲だつた。誰も彼も、氣を呑まれたやうに、棒立ちになつた。

「なあ……いまこの時化んなかでよ、おいそれと船が廻せるかつてんだ。へたア廻しやア、一ペ

んにお陀佛だ。萬太の野郎ひとり助けるために、四十何人殺せるもんか。そんな危ねえまねが、できるかつてんだ。……よしんば、うまく廻せたつてよ、十分もまへに落ちたやつを、この闇夜の荒海ん中で、何して探せるもんか。一時間も二時間もかかつて、土左衛門を拾ふくれアが、關の山だ。いまこの船ア、一刻をあらそふ大事な任務をもつて走つてるんだ。そんな無駄な時間がつぶせるもんか。……なあ、おまつちだつて知つてるら、おら、小桶一つ落したつて、すぐ船をかへして拾へつて、常に云つてるんだ。そのおらでさへ、いまこの船は、こんりんぜア廻せねえんだ……」

ふと、言葉がとぎれた。

誰も彼も、物もいひえず、齒をくひしばつたまゝ、立ちすくんでゐた。

萬助は、急に聲をおとして云ひつゞけた。

「おら、ほア、きつぱりとあきらめた。禁められた見張りに自分勝手にとび出しやがつて、波にもつてかれるなんて、そんな不甲斐ねえ野郎は、おらの子供ぢやねえ。ば、ばか野郎！　萬太の意氣地なしめッ。なんのために漁師になつたんだ。おら、貴樣を、そんな大馬鹿野郎に育てあげ

たおぼえはねえぞ！　そ、そんなマヌケ野郎は、い、いまのうちにくたばつちまへッ」

おさへにおさへてゐた感情が、次第に激してきて、つひに口がきけなくなつてしまつた。しばらくおしだまつたまゝ、白髪の多い髭づらをビク〳〵ひきつらせてゐた萬助は、やがてまた靜かな口調に返つて、

「さあ、みんな……あしたは大事な仕事があるぞ。早えとこ寢んで、あしたになつたらうんと働いてもらふんだ。こゝは、おら一人でえゝで、早く歸つて寢てくれ、寢てくれ」

さう云つて、ふと思ひついたやうに、

「うむ、そいからな、すまねえけんが、板つ子を五六枚、海へはふりこんどいてくれ。運が良きゃア、つらまさるつてこともあるで……」

五

いたましい夜は、ほの〴〵と明けそめた。

ブリッヂの周圍の硝子窓からしのびこんでくる白い光が、一晩中彫像のやうに立ちつくした萬

助のすがたを、クッキリと浮かびあがらせた。彼は、ホッとしたやうに、血ばしつた目であたりを見廻した。

雨はいつかすつかりやんでゐたが、風はなほ烈しく、浪も高かつたが、もうこゝまで漕ぎつければ、半分は成功したやうなものだ。

萬助は、惡夢からさめたやうに、ゆうべの出來事を思ひだしてゐた。今までは、この危險な闇夜の荒海を乘り切ることに全神經が集中されてゐたが、その緊張がいくらか解けると、ゆうべのことが、吾子のすがたが、のしかゝるやうに大寫しになつてきた。

きまるで夢のやうだ。なんとしても現實のことゝは思はれぬ。きのふのあの漁のすがた、演藝會の光景が、殊さら樂しくあざやかだつただけに、なほさら本當のことゝは信じられなかつた。

だが、もう、萬太はこの船にはゐないのだ。どこにもゐないのだ。あの可愛い笑ひ顏も、二度とぶたゝび見ることはできないのだ。國へ歸つて、おれは女房になんと詫びたらいゝのか、女房は、何て云ふだらう……。

彼はふと、二十年前、おなじ漁師の娘だつた女房のスミヨと、はげしく好きあつたときのこと

を思ひだした。あのころのスミヨの顔が、このごろの萬太の顔に瓜二つだつた。あんなに萬太を可愛がつてゐたスミヨは、萬太が死んだことを知つたら、どんなに嘆きかなしむだらう。十六歳で初めて乗船したときも、お父つァんが一しよだからと安心しきつてゐたのに……その親父がからして附いてゐながら……しかも、船を返して探してもやらずに……。

（あゝ、萬太、スミヨ……許してくれ……辛抱してくれ……殘酷なやつと恨んでくれ……おれは、船長として、あゝするよりほかなかつたんだ……だが、スミヨ……萬太はえれえ奴だつたぞ。船のことがしんぺアだと云つてよ、ほかのもんが出るのも怖がるおもての見張りに、吾から出てつたんだ。それほど海を怖れなかつたんだ……なあ、スミヨ、新米の若い衆にしちやア、出來すぎてるぢやねえか……立派な死にかたぢやねえか）

そのとき、ゆくりなくも萬助の瞼にうかんできたのは、この正月二日にわが家でもよほした賑やかな元服式の情景だつた。やつと一人前の若い衆になつて、うれしさと羞かみに充ちあふれた萬太の顔……それをいたはるやうにイソ〳〵と酒宴の世話をしてゐたスミヨの姿……

突然、脂汗にまみれた萬助の顔は、クシャ〳〵にひきゆがみ、今までおさへつけてゐた涙が、

堰を切つたやうにドッと流れだした。涙は、ラットから床へ、瀧のやうにしたゝり落ちた。まだ誰もゐないブリッヂで、彼はひとり齒をくひしばり、眉をひきつらせて、思ふさま泣いた。物ごころついてから人に泣顔を見せたことのない彼は、三十年の涙をこの一瞬にしぼり出したかのやうだつた。

だが、まもなく部下たちの姿が甲板上にあふれだし、やがて、はるかの波間に福清丸らしい黑點が見えがくれしてきたとき、彼はふたゝび、船長としての鐵石の心をとりもどしてゐた。

「何をメソ〳〵してやがるんだ。これがおらつちの戰爭だぞ。戰爭に戰死者が出るのは當りめえぢやねえか。さあ、トットと曳綱の用意をしろッ」

萬太の死に、ともすれば沈みがちになる部下を叱咤激勵して、目前にせまる曳航の準備に萬全をつくす彼だつた。

風浪中で海難船を曳航する場合、何よりも困難なのは、云ふまでもなく曳綱を先方の船にとりつけることである。

初め浮かしに細い綱（ロップ）をつけて風上から流してやるのだが、船をあまり近づけたら危險だし、さ

りとてあまり遠すぎては、なか〳〵先方にロップがとゞかない。安全の範圍で、なるべく接近したくみにロップを送つてやらねばならぬ。

そして曳綱も、マニラ索にするか、鋼索にするか、あるひはもつと太い錨索にするか、時と場合におうじてその選擇をあやまらぬやうにしなければならぬ。へたをすると切斷するおそれがあるからだ。

風は南々西だつた。福清丸は船首を南西にむけ、海錨をながして漂流してゐた。

東海丸は西微南から、風をなゝめに背負つて、それに近づいてきた。このまゝでは反對の方向をむきあつてゐるので、曳航位置につくためには、どうしても福清丸の手前で大きくおもかぢをひいて、福清丸の風上へ、こつちの尻を向ふの船首へもつてゆくやうに廻りこまねばならぬ。

積荷が大きいから、へたに横波をくらつたら、一ぺんに顚覆してしまふ。萬助は、相變らずラットにピッタリと取りつき、血相變へて前方をにらみすゑてゐた。

ゆうべ萬太を呑んで味をしめた怒濤はこんどは船もろともとばかり、巨龍のやうな白牙をむいて襲ひかゝつてくる。そのたびに、船首は波の胴つ腹にかゝへこまれ、甲板かちブリッヂまで、

たくましい浪の前肢にたゝきつけられた。

萬助は、一瞬目をつむつて、神々に祈つた。萬太の靈に祈つた。

ふたゝび、カツと目をあいた彼の形相は、さらに物すごくひきつり、燃えたち、さながら鬼神そのまゝだつた。が、その目の一點には、水のやうに冷く澄んだものが湛へられてゐた。

じいつと浪のうねりを見守つて、そのスキをねらつてゐた彼は、機を見るや、猛然とラットを右に廻した。全身を叩きつけるやうに、腕も折れよと引きしぼつた。怒濤をうける舵の抵抗が、ググツとそれを引き戻さうとする。何をツと、彼は死物狂ひにのしかゝつた。

ギギギギーツと、船はすさまじい悲鳴をあげながら、大きく右へ急轉回した。

瞬間、ヅヅーンと横波をかぶつて、甲板もブリッヂも、水びたしになつた。南無八幡！ 萬助も思はずラットにしがみついたほどの傾きかただつた。

が、やがてその波がひいたとき、東海丸はみごとに福清丸の風上へ廻りこんでゐた。

「萬太……すまねえ！」

彼は思はず叫んで、頭をさげた。

（あいつが神様になつて、船を守つてゐてくれるんだ）

その考へは、萬助をむしやうに奮ひたゝせた。

福清丸の二百メートル前方へ來たとき、彼は機關部に後進（ゴースタン）の信號をおくつて、徐々に尻を先方の船首へもつてゆきながら、與平に命じて浮かしを投げこませた。

これがまた、なか〳〵の難作業だつた。波のために、とんでもない方向へ流されてしまふ。それをたぐり返して、またやり直す。五回目に、やうやく先方へとゞいた。

もかぎ（鯨などの大ものをひつかける鈎）でそれを拾ひとつた福清丸の若い衆が、一瞬波にかぶつて見えなくなつた。

が、波がひいたとき、さらはれもせずにロップをしつかり握りしめてゐる彼のすがたが甲板にあらはれると、息をのんでゐた兩船の乘員は、おもはずワーツと喚聲をあげた。

そのロップをだん〳〵太くして、先方に引つぱらせ、つひに首尾よく曳航の取付けを終つたのは、もう夕方近いころだつた。

東海丸がボボーツと汽笛を鳴らすと、福清丸もそれにこたへて、よろこびの聲音をふりしぼつ

た。

「どうだア、行くぞオ！」

「ありがたう、えゝぞオ！」

おなじ音色でありながら、その時々によつて違つた意味にひゞく汽笛は、そのときにはこんなふうに聞えた。

兩船の漁師たちも、手をふり、大口あいて、何か叫びあつてゐる。そこには敵も味方もない、たゞ、同じ日本の、同じ町の、親しい仲間同士の純一無雜の交歡の叫びがあるばかりだつた。

やがて、曳航索がピンと張りきり、兩船は匐ふやうにソロ〳〵と動きだした。針路は西微南（ウエスパイナウス）、おなじ母港への道である。

そのころ、船長室の横の無電室では、八木が寢不足の目を血ばしらせ、組合本部への無電を懸命にうつてゐた。

「――五時十分曳航開始、ソノ位置、東經百四十七度、北緯三十六度半、時速四カイリ、天候南南西ノ風曇、風力十、海上波高シ……」

望郷

舵を吉兵衛にゆづつて、寢臺に寢たふれた萬助は、かすかにその音を聞きながら、半死半生のやうにウツラ〳〵としてゐた。

そのとき、ブリッヂから吉兵衛の野太い胴間聲がひゞいてきた。

「船長！　今度ア、おらの思ひどほりにして、良えらなあ」

「な、なにをだ……」

萬助は、夢うつゝに聞きとがめた。

「おら、少し船を廻り道さして、昨夜(ゆうべ)んとこを通つてゆくつもりだ。ひよつとしたら萬太のやつ、板つ子につらまつて流れてるかも知んねア。あいつ、泳ぎがうまかつたでなあ」

「う、うむ……すまねえ……お汝(のし)のえゝやうにしてくれ……」

ニッと笑ひかけたまゝ、萬助は昏々と深い眠りに落ちこんでしまつた。その笑ひかけた目のふちから、ひとすぢ白く涙の糸をひきながら……。

一

總噸數五十トンの木造鰹漁船「南榮丸」は、古ぼけた舳先をグッと上げ、染まるやうに碧い南海の波濤を蹴つて、北へ北へと突つぱしつてゐた。

前檣のてつぺんには「南榮丸、祈大漁、燒津神社」と白く染めぬいた眞紅の船名旗がへんぽんとひるがへり、艫の方には、「皇道産業燒津踐團」とか「南進報國隊」とか、墨くろぐろと書かれた赤白の大幟が、そのかみの八幡船でも見るやうに、ものものしくはためいてゐた。

折から、甲板上ではデッキ洗ひがはじまつてゐた。麥わら帽に菜つ葉ズボンだけの、屈强の若衆らが十二三人、竹竿のさきに棕梠皮をつけた「木精棒」をにぎつて、バケツで海水をぶつかけては、並んでゴシゴシと甲板をこすつてゆく。

「アンエイトー、アンエイトー……」

いつも叫びなれた故郷燒津神社の祭禮のかけ聲を、こゝでも遲ましくひゞかせながら、汗みどろの勞働をつゞけるのだ。

その中にまじつて、正太はさつきからジリジリしてゐた。もうアバリ（比島北部の要港）の根據地を出帆してから、三四時間にもなる。だのに、まだゆつくり休むひまがないのだ。

けふも朝暗いうちから、食糧、油、氷などの積込みをやり、小一時間もかゝつて錨と傳馬船をひきあげ、船が動きだすと同時に、活魚艙の掃除をやつて新しい水を入れたり、すぐ近くの餌場へまはつて籠活簀に蓄養されてゐる餌イワシを、三つのかめのこに一ぱい、およそ十石も手送りで移したり、そんなはげしい勞働がやつとすんだと思ふと、こんどは甲板洗ひだ。一分間もやすむひまはない。

だが、こんなことは鰹船の若い衆として昔からやりつけたことで、それが苦しいといふのでは毛頭ない。たゞ一刻も早くひまを見つけて、さつき宿を出がけに渡された故國からの手紙を、ゆつくりと讀みたいのだ。

封筒の上書きには、兄貴の鐐一の名前など、いかにも男手らしく書いてあるが、たしかに美代子からの手紙にちがひなかつた。去年の十月末、日本を發つてから初めてついた手紙――しかも可愛い美代子からの最初のたよりなのだ。早く見たくてたまらない。正太は、さつきからウズウ

ズしながら、ときどき手をやすめては、手紙を入れたズボンのポケットをおさへてみた。何か腰のあたりがムズムズとし、思はず深い吐息がこみあげてくるのだつた。

「正太、何をボヤボヤしてやがるんだ。ハア日本へ歸りたくなつたのか」

仲間の呶鳴り聲にハツとして、

「なんの、歸りたくなんかあらすけえ。腹がへつたんでえ」

負けをしみに呶鳴りかへして、またも無意識に不精棒をしごくのだつた。

やうやくデツキ洗ひがすんで、海水で汗を流すと、もうお午近かつた。全身、骨がぬけるやうに疲れきつてゐた。誰もかれも、口をきくのさへおつくうのやうに默りこんだまゝ、穴倉みたいな船室へころがりこんだ。晝飯まで、十分でも二十分でも眠らうといふのだ。

やつと機會が來た。正太もからだのふしぶしがズキズキ痛かつたが、そんなことは忘れたやうにほくそ笑みながら、船首に長くつき出たやりだしの先まで行つて、向ふむきに馬のりになつた。

初夏の太陽が、斬りつけるやうに照つてゐる。目の前は海ばかりだ。こゝなら誰に見つかる心配もない。

正太はすばやくポケットの手紙をとりだして封を切つた。プンと、若い女の匂ひがした。やつぱり、美代子からだつた。

正太様——

おわかれしてから、いつのまにか○月もたつてしまひました。もう來るか〳〵とお手紙を待つてたけれど、なか〳〵來ませんから私の方から出します。

無事にそちらへ着いたといふことは踐團の事務所で聞きました。でも、その後のことがちつともわからないので心配です。

うまく行つてますか。餌イワシや、氷の方はどうですか。もう漁に行つたの？　内地とちがつて何かとやりにくいでせうね。どうぞおからだを大切にして、お國のためにうんと働いて下さい。

兄さんはまだ相變らず清水の工場へかよつてゐます。毎日とても疲れて歸つてきて、ロクに口もきゝません。でも、せんだつて、「正ちやんとはあんなに喧嘩別れをしたが、あいつはなか

なかえらい男だ」なんて云つてました。私たちのことを少しは感づいてゐるのでせうか、ホホホ……

私もなんとかして兄さんを說きふせ、踐團に入つて南洋へ行かせたいと思つてますけど、兄さんはなか〳〵頑固で、いまでも片意地をはつてゐます。心のなかでは、あなたがたの勇ましい行きかたに動かされてゐるのでせうけれど……

踐團では、こんどいよ〳〵北ボルネオ行の第一陣が出ますので、班員のみなさんは一生けんめいで船を修繕したり、訓練をうけたりしてゐます。こんどは、サザエモ（註、船元の屋號）の新ちやんとナンバンの小城さんなども行くことになりました。『丸東』や『丸生』の若い衆たちで、船に乘れないで轉業してゐる人たちも、今までの行きがかりから、みんな兄さんみたいに意地をはつたり冷笑したりしてゐますが、心のなかでは じつとしてゐられない氣持でせう。

ね、正太さん、この燒津の人たちも、いまにきつと踐團の大きな理想に力をあはせなければゐられなくなりますよ。きつと、きつと……

私も、正太さんがそばにゐなくて淋しいけれど、遠い暑いところで敵の飛行機や潛水艦におそ

はれる危險をおかして働いてゐなさる、あなたがたのことを思つて、强い心になつて働きます わ。どうぞ、一日も早く、私たちもそちらへ行けるやうにして下さいね。その日ばかりを樂しみにしてゐます。けさも早く、一人で入江さまへお參りして、そのことと、南榮丸の航海安全をお祈りして來ました。……

讀みすゝんでゆくうちに、正太は何か胸がせまつて、のどの奥から熱いものがグツグツとこみ上げてきた。

とつて十八、よく熟れた水蜜桃のやうな、產毛の多い美しい肌の美代子のすがたと一しよに、故郷の海が、山が、街が、親しい人々の顏々が、むしやうに戀しくなつかしく浮んでくる。入江さま（燒津神社）のお祭の大鼓の音がドドン〳〵とひゞき、二臺の大御神輿をかついでアンエイトー〳〵（大漁だ〳〵といふ意）ともみあふ勇壯な叫びが、どこからか聞えてくるやうだ。

正太はしばらく茫然として、遠い故國の空に眸をなげてゐた。

二

勇武日本武尊の御事蹟に名だかい靜岡縣燒津――それは、鰹節を主とする遠洋漁業でも全國に鳴りひゞいてゐた。

數百年來の美しく逞しい傳統と、明治の中ごろから勃興した資本力機械力とが結びついて、それまで荒海の一寒村でしかなかつたこの町を、たちまち東海一の大漁港に仕上げてしまつた。その漁獲高は年に五六百萬圓にものぼり、更にそれから製造する鰹節その他の水産加工品の年産額は、千百萬圓にも達するといふ盛況だつた。

ところが、支那事變から大東亞戰爭へかけての石油の消費規正强化と、船腹の徵用は、全國の漁業、とくに遠洋漁業に決定的な打擊をあたへた。燒津もこの例にもれず、船も油も自由にならなくなつた漁師たちは、ぞくぞくと半轉業して、近鄕の工場や土方工事にとびこまねばならなくなつた。

町はたちまち火が消えたやうにさびれ、父祖代々漁業に生きる傳統も、メチヤ〳〵に崩れかゝ

つた。

これに對して、今まで町を牛耳つてきた『丸東』（東海遠洋漁業會社）と『丸生』（燒津生產組合）の二大漁業會社は、なんら施すすべを知らず、たゞ拱手傍觀するのみだつた。それのみか、永年政黨的にも對立抗爭してきた兩社幹部は、さいどの土壇場になつてもなほ資本主義根性がぬけ切れず、あくまでも自由主義的營利觀にかぢりついてゐた。

これを見て、憤然と起ち上つたのは、『丸八』といふ鰹節製造問屋の當主、村山祥之助だつた。若いころから青年團の團長などに推されて革新的な青年運動に獻身し、最近は赤誠會などに關係して熱烈な皇道主義を奉じてゐた彼は、有史以來の國難と、鄕土產業の衰運を坐視するにしのびず、昭和十七年一月、同志を糾合して「燒津南進報國會」を結成したのである。

そして、過去一切の個人主義的營利制度の排除、眞の皇道精神にもとづく鄕土產業の再編成、その餘剩力による南洋進出と、南洋分村計畫の樹立等をその綱領として、全町民に呼びかけるとともに、古船をあつめて南進の訓練、準備をはじめた。

同憂具眼の士は、ぞくぞくとその傘下にあつまつたが、まだ一般の人々は長夜の眠りからさめ

す傍觀的あるひは默殺的態度をとつた。中には、あんなボロ船や代用燃料で何できすけえと、罵
冒冷笑をあびせる者もあつた。

だが、村山一派は不退轉の勇猛心をもつて着々と準備をすゝめ、その年の十月「皇道産業燒津
踐團」といふ資本金六十萬圓の有限會社を設立すると同時に、軍の許可をえてフイリッピンへ漁
業先發隊を派遣するまでになつた。岩崎正太が、周圍の反對をおしきつて、敢然と踐團に參加し
たのは、その時だつたのである。

もと〳〵父祖代々サザエモの子飼ひ漁師として、現在は、『丸東』所屬の太平丸乘組員だつた
關係上、船元にたいする義理もあり、また數年前父を海でうしなひ、今は年老いた母と幼い弟を
かゝへてゐる彼として、新しい會社に入つてまだ目鼻もつかぬ異鄕へとびだすことは、何かと躊
躇されたが、持つて生れた生一本の熱情はおさへることができず、つひに母を說きふせ、親類た
ちもどうにか納得させたのであつた。

だが、小さいときから一ばん親しかつた八木鑛一とは、その問題でたうとう衝突してしまつ
た。小學校も同級なら、乘船もおなじ、そして一昨年は一しよに半年間海軍補習生として橫須賀

海兵團に入り、さらに一ケ月ほど前からはともに清水の某軍需工場へかよつてゐたほどの仲よし
だつた。

しかし、唯でさへ、十五六のころから遠洋へのりだして、壯烈な鰹釣りにきたへられた鰹漁夫
にとつて、こまこました地味な陸上の仕事は向かなかつた。若い漁師には珍らしく理智的で意地
つぱりの鑛一は、それでも齒をくひしばつて我慢してゐたが、多情多感で、どちらかといふと熱
しやすく冷めやすい性格の正太には、なんとしても「陸手（おかて）の仕事」が辛抱できなかつた。しかも
まだ二十二といふ若さに似ず、船中一二の鰹釣りの名手だつた正太は、鰹竹（釣竿）を持たずに
は生きてゆけない人間だつた。

ある日鑛一の家をたづねた正太が、こんど思ひきつて踐團に入つて南洋へゆくと云ひだしたと
き、いつも無口の鑛一は、まつかふから反對した。

今は魚を釣るより兵器を增產しなければならぬ時だ、工場で働くのは國家の要請だ、と鑛一は
云ひ張つた。そればかりぢやない、先祖代々の親方（船元）への恩義はどうする、そんな義理知
らずとは絕交する、とも云ひつのつた。

正太もまけずに云ひかへし、はては殴りあひの大喧嘩になりかゝつたところを、妹の美代子が泣いて仲裁に入り、そのまゝ別れてしまつたのである。

その晩、美代子はそつと正太を呼びだし、眞つ暗な濱べで長いこと話しあつたが、今までたゞ兄妹のやうに親しかつただけの二人は、その夜からはげしく結ばれ、出帆の日まで約一と月のあひだ、鏑一の目をしのんで逢ひつゞけた。

――なあに、南洋だつて俺つちは鮪延縄で何べんも行つたところだ。謂つてみりや、むかしの職場だ。そこへ燒津の分村をこしれアて、燒津の町を救ひ、日本をふとらせるんだ。二年交替だつてけえが、おら、召集せア來なきや、ずつとゐるつもりだ。今にきつとおふくろやお汝を迎へに來てやるぞ。……

出帆の前夜、さう云つて強くにぎつた美代子のやはらかな掌の感觸が、今もこの掌にのこつてゐる。

「美イ坊……待つてろ、待つてろ、ハアぢきだぞ。いまにうんとみやげを持つて、迎へにゆくからな」

正太は、なほもやりだしにまたがつたまゝ、内地に似た入道雲のもくもくと出てきた遙かな北方の空を、しびれるやうな思ひでじつと眺めてゐた。

三

南榮丸は、すでに年老いた百馬力の無水燒玉エンヂンをあへがせながら、なほも北へ北へと進んでいつた。

パラウイ島も、カミダイン島もすでに見えなくなつた。今日の新漁場、南カデレス地方は、もう間もない。

夕方までにそこへ着いて、一ト漁やらねばならぬ。漁師たちは甲板にとぐろを卷いて、はちきれるやうな談笑を交しながら、竿や、やまの手入れに餘念がなかつた。

いつたい鰹といふ魚は、内地近海には二三月ごろから八九月ごろまでしかゐないが、南洋方面には周年ゐる。黑潮にのつて日本へ洄游してくる鰹も、もともと南洋が故郷なのである。

しかも今まで、南洋の鰹釣り漁業がそれほど發展しなかつたのは、生餌にするイワシが、どう

したわけか現地であまり獲れなかつたからだ。　わが内南洋方面でも、　從來その點で苦勞してゐた。

ところが、こんど正太らの先發隊の努力によつて、南洋イワシの習性が初めて分つた。日本のイワシは大きい目の網でも怖がつて脱出しないが、南洋のは圖太くて、ドンドン網の目から逃げてしまふといふことが分つたのだ。さらに、現地漁村の古老から聞いた話によつて、むかしは集魚燈をつかつて夜とつてゐたことが分つた。　さつそく燈をつかつて、　こまかい網でとつてみると、豫想外の豐漁だつた。

これで餌イワシの問題は解消した。第二の難關だつた貯藏用の氷も、むかしからアバリにあつた製氷會社で作らせることにした。はじめ危惧されてゐた踐團の事業は、かくて洋々たる前途が約束され、いよいよ今度の本格的出漁となつたわけである。

初めての漁場への、初めての出陣！

その成績如何は踐團の士氣に關する。あんなボロ船と笑つた故郷の人々への見せ場でもある。よろし、やるぞ！　とばかり、漁師たちは得意のタカハチマキをキリリとしめなほし、手ぐすね

ひいて待機してゐた。

前檣と操舵室の屋上には、すでに見張りが立ち、らんらんと目を光らせてゐる。

四時ごろだつた。さしもに強烈だつた南洋の陽光も、いくらか弱まつたと思はれるころ、突然

「鳥だ、鳥だ、鳥だッ！　そうれ一番、來たぞオ！」

前檣の見張り船頭が叫びだした。漁師たちはハッとしてマストをふり仰いだ。

船頭は左手を大きくのばして、はるか左舷前方を指さしてゐる。つゞいてブリッヂの屋上に頑ばつてゐた老船長も、大手をひろげて突つ立つた。

「おゝッ、魚群だ、なぶらだ！　シヤンととり舵だーッ」

傳聲管に口をあてゝ下のブリッヂへどなりこむより早く、船はグーッと左へ急旋回した。

「ヨーソロ！！　全速力！　廻せ、廻せ、ジヤン〳〵廻せーッ」

推進機をうんと廻せといふ意味だ。その叫鳴り聲とともに、南榮丸はむらがる海鳥の大群めがけて突進した。

すでに漁師たちは全部竿竹をにぎつて、　右舷の魚釣臺にズラリとならんでゐた。　たれもかれ